
怨嗟の輪廻

暁さくや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

怨嗟の輪廻

【Nコード】

N3138D

【作者名】

暁さくや

【あらすじ】

マンシヨンの一室で発見されたミイラ死体。死体の隣には、元気な赤ん坊がいた。わずか数日の間に干からびたと思えない遺体。涙を流して何かを訴える霊。連続して起こる事件の裏には、恐ろしい怨嗟が潜んでいる……

序の段（前書き）

この小説はホラーです。心霊現象が描写されています。

序の段

燵る蠟燭の炎が、断末魔の喘ぎを残して立ち消えた。

唐突に闇が落ちてくる。目隠しをされたように視界は遮断され、目蓋に残った蠟燭の残照だけが淡い閃光となつて眼球に記憶されたけれど、おぼろげな光は急速に闇に溶け、常闇の国へと身ごと連れ去られてゆく。

視界がなくなると、汚物と腐敗臭が澱んで漂う空気だけが肌に触れていった。

耳には、どこからともなく響きわたる不定期な水滴の音だけがある。だます。

滴り落ちる水音に混じつて、かきりと、乾いた音がした。枯れ枝のような指が、己が体の下に敷かれた御座を弾いたのだ。

御座の上に、一人、女が横たわっている。

左手が御座に触れているが、指は二度と動かなかった。

右半身を下にして、右手は頬に当てたままだった。赤子のように体を丸め、御座の上に横たわっている。

すでに元の色すら分からぬようになった着物の裾からのぞく皮膚は、乾燥して白い粉をふいている。全身、骨の間に皮膚がめり込んで筋がたっていた。骨と皮が一枚、かろうじて女を覆っているようだ。背に結わえたままの長い髪は根元から白く変わっている。

女の長い睫毛が痙攣した。目蓋が、針の隙間ほど持ち上がった。

たっぷりと時間をかけて、目蓋を持ち上げようとしているようだ。った。

蠟燭の火が、また消えた。

今日で二十五回目だ。

毎日、時間は定かではないが、女の生死を確かめるために人の指ほどの和蠟燭が灯される。胸郭がわずかでも動いていることを確認すると、蠟燭を運んでくる者は、一秒たりともこんな場所にいるも

のかとばかりに駆け出してゆく。

そして、蠟燭が燦るほんのわずかな時間、辺りの様子がうかがえるのだ。

天然の岩場に囲まれた座敷牢だった。天井も岩で、今にも崩れ落ちそうなひびが入っている。人がようやく一人、立つことのできる高さだ。畳を六枚も敷けば、いっぱいになるほど狭い。だが、座敷牢といっても、畳が敷かれているわけではない。湿気て変色した板が敷き詰められている。その上に、御座が敷かれていた。

女はようやく、目蓋を上まで持ち上げた。

が、そこには眼球がなかった。

挟られて、干からびた梅干を思わせる残骸が残されているだけだ。顔にできた不自然な窪みは、どこともなく前に向けられている。

女は長く胸郭の動きを止めた後、一瞬息を吞むくらいの短さでありの空気を貪った。

暗紫色に代わった薄い唇がかすかに震える。

許さぬ……

静かな水面に小さな波紋が起きるくらいの、ごくごくわずかな振動があたりを揺らした。

女の口から、声が漏れ出でたわけではなかった。

地下の座敷牢には変わらず闇と静寂が落ちている。

いずくともなく、水滴の滴る音がした。

女の胸郭が、動きを止めた。二度と再び、肺が空気で満たされることはなかった。

一の段 胚胎…… 1

部屋には、鼻の粘膜が切り刻まれそうなほどの強烈な腐敗臭が充満していた。

まるで生ゴミを捨てた袋に頭を突っ込んだようだった。

あたりは夕闇に包まれたように薄暗い。

遮光カーテンがすべてを拒絶するかのように、明るい日差しをさえ拒み続けている。それがかえって部屋の温度を上昇させる手助けをしているらしい。

「なんだあ、こりゃあ」

六月のむせ返るような湿気の中で、土岐河警察署刑事課・警部補、岡崎純一はネクタイを緩めて息をついた。わずかに広くなった額に滲む汗をハンカチでふき取る。そのまま敵つい四角の顔をつるりと拭った。

部屋を見渡すと、片付けるといふ日本語を知らないのではないかと疑いたくなるような状況だった。

テーブルの上には食べかけのパンが散乱し、流しには食器が山と詰まっていた。三角コーナーでは、魚の頭がとろけるようにして腐っていた。悪臭の原因はこれらしい。もちろん食器棚は暇をもてあましている様子だ。

部屋の四隅には目に見える埃が積もっている。床はもともと白っぽい色調のフローリングだったようだ。それが分かるのは少々ずれて動いたソファアの跡が残っているからだ。どう見ても床は煤けたように汚れている。

洗面室に足を運べば、タンスに入っている洋服はすべて着尽くしたと察するに余りある洗濯の山が積まれている。浴室ではシャワー水栓から定期的に水滴がもれ落ちていた。

「一日中、片付けもしないで何をやってたんでしょか、この仏さん」

「不謹慎だぞ、琢磨」

岡崎は、肩越しに覗き込んで呟く部下の琢磨貴彦をたしなめた。どこにでもあるマンションの一室であつた。

玄関から廊下が真っ直ぐに伸び、両脇に五、六畳の洋間が一室ずつ、左に洗面と浴室、リビングの扉を開けると対面キッチンの縦長のリビングダイニング、その隣が四枚扉で仕切られた和室だ。

いつもなら、こぢんまりとした核家族の住まいには、今日に限って大勢の人間がいた。

現場を検証するために、鑑識の人間や刑事課の者が捜査している。「どうぞ、いいですよ。終了しました」

現状保存のための捜査が終了し、鑑識課の者が奥の現場へと入室を許可する。

「現場は奥の和室です」

鑑識班の検証が済み、岡崎たちはようやく和室に入り込むことを許された。口元をハンカチで押さえながら足を踏み入れる。

そこだけが、現実世界から切り取られたかのような空間だった。

一組のベビー布団の上に女が一人、倒れている。

人間と、呼びたくもないような死体だった。

全身の皮膚は干からびて、筋がたっている。肌の色は土気色に変色し、ところどころ暗紫色に変わっていた。

岡崎は乾燥しきつた生姜を思い出していた。それに、そっくりな色をしていた。

ミイラ、というものを見たことはなかったが、これが確かにそうだと いわれると、絶対納得するだろう。

女の口は大きく開いていた。

パツカリとあいた暗闇からは、今にも蛆うじが這い出てきそうだった。そんなことを思うのも、周囲に充満する饅えた（すえた）匂いのせいかもしれない。

さらに、女の瞳は失われていた。

物欲しそくに、寂しげに、眼窩に収まるはずの眼球はない。吸引

力のある闇が、そこにはあった。底知れぬ深さをもつ井戸を覗いたかのような。

岡崎の後から、生理現象にしたがって胃の内容物を吐き出す音がした。

「琢磨あ、吐いてねえで、女の身元、教えろお」

「すみません」

琢磨は慌てて洗面所に駆け込んでいった。

あきれたように腕を組みなおしながら、岡崎は改めて部屋を見渡した。雑然と散らかった部屋は、荒らされたようには見えなかった。和室には、何も置いていない。タンスはすべて玄関脇の洋間に集中して置かれていたし、テレビなどはリビングにある。和室は子供に危険のないよう配慮されているようだった。

確かに、部屋は人が毎日のように住んでいたとは思えないほどに荒れている。しかし、強盗が荒らしたとするのなら、引き出しの中身も荒らされていていいはずだった。

食器棚やテレビ台についている引き出しの中は、整頓されたままだった。引き出しはきちんと閉まっている。食器棚の引き出しの一つには、現金と通帳と印鑑が入ったまま。洋間に置かれていたドレッサーも同じで化粧品が散乱していたが、脇に置かれていた装飾品の入ったケースには、ダイヤの指輪が残されていた。

部屋を見渡すうち、あまりの息苦しさで岡崎はまたネクタイを緩め、今度はボタンをはずした。

「鑑識さん、もうカーテン開けていい？」

「いいです、窓枠の指紋も採取済みですから」

鑑識の一人が言い終る前に、岡崎はカーテンに手をかけていた。いい加減うんざりしていた。

窓を開けると、森の中で深呼吸をしたような澄んだ空気がなだれ込んでくる気がした。部屋の中よりは、幾分か湿気の少ない風が頬をなでていく。外の空気だって大して綺麗だとは言えないはずだったが、この部屋に比べれば何倍も清浄に感じる。久々に、空気がお

いいいと岡崎は思った。

＊

事件が起こったのは、土岐河城下町として歴史ある建物が多く残る街だった。駅周辺は整備・開発されてマンションが立ち並んでいる。その一角である。

「被害者は佐々木麗子、二十一歳。発見者は夫です。夫の、陽司、同じく二十一歳、山岡製作所の作業員です」

「若いな」

琢磨貴彦の報告を、岡崎純一はマンションの玄関に程近い一室で聞いていた。ひよろりと背の高い琢磨の、のんびりとした口調は、岡崎をいつも苛々とさせる。

琢磨の報告を書きこんだ手帳のカバーは、使い込まれて縁の皮の部分が白くなってきた。尊敬する先輩から譲り受けてもう二十年になる。四十半ばもとうに過ぎてしまった。

被害者の名前を書き記した所で、岡崎は筆を止めた。

「もちろん死後何日、なんてのは」

「はあ、鑑識さんも検死官も首を傾げるばかりで」

現場ではすでに遺体を搬送する作業にうつっていた。廊下を、黒いシートに包まれた担架が通っていく。

岡崎も二十年以上刑事をやっているが、こんな事件は初めてだった。

「で、それがその、二人の子供だったのかい？」

岡崎は頬を人差し指で掻きながら、斜め後ろを振り向いた。琢磨が手招きする。部屋の入り口を塞いでいた捜査員たちが、誰からともなく道を空けた。

そこを女性警官がおくるみに包まれた赤ん坊を抱いてやってきた。赤ん坊は、和室の惨状を忘れさせてくれるほどの穏やかな寝息をたてていた。親指を口に入れ、ふっくらとしたリンゴのような赤い

頬は艶々としている。ひとめ見ただけでは性別は分らないが、身を包むピンクのおくるみで、赤ん坊が女の子であるとわかる。

若い女性警官は慣れない手つきで赤ん坊を岡崎に差し出そうとした。

岡崎はそれを手で制すると、首を振った。

「寝かしておけよ、起きると厄介だ」

「あれ？ 係長のところはお子さんいらっしやるでしょうに。懐かしいんじゃないですか？」

捜査員の一人が揶揄するように声をかけてきた。

「懐かしいもんか、もう子守はうんざりだ　で？」

視線を送る岡崎に気付いて、琢磨は頷き手帳を捲った。

「裏付けはまだですが、どうやら夫の陽司はしばらく家に帰っていません。それです。それで今日の朝、六月になったので衣替え用の夏物のスーツを取りに来て、すると新聞は下の郵便受けに溜まったままで、玄関も開いていたそうです。奥を覗くと、和室であの死体を発見し、驚いて後退った拍子にソファアーにぶつかっただと」

「そら、びつくりするだろうさ、あんなの見たら、なあ」

岡崎は頬を掻きながら、赤ん坊を振り返った。

「この子はどこに？」

女性警官は困惑したような表情で赤ん坊を眺めやっってから、ぎこちない笑みを浮かべた。

「死体の、そばにいたと、そう聞いていますけれど」

岡崎は眉を寄せて目を眇めた。頼んでいた店屋物がカツどんではなく、大嫌いなカレーだった、とでも言わんばかりだ。

「そば？」

「はい。赤ん坊がいると聞きましたので同行したのですが……到着した時はご主人が玄関で携帯を片手にしゃがみこんでおられて、部屋の奥は薄暗かったんです」

誰もがこの言葉を疑ったに違いない。

母親である佐々木麗子がミイラ状態の死体で見つかったというの

に、この赤ん坊はいかにも満足げに眠っているのだ。

時おり思い出したように指を吸い、それでも赤ん坊は目を開けることがない。満たされたまま眠りにについている。

岡崎は部屋の入り口を見た。

入口の向こう、廊下の先に和室がある。あの死体は一日二日で仕上がる代物ではないはずだ。第一、これまでそんな死体にはお目にかかったことがない。白骨化していると言われたほうが、まだ現実味がある。

けれど遺体は枯渴しきった大地のように、完全に干からびていた。カレイかアジの干物を連想させた。

魚のほうがまだいい。死体を天日干しにでもすれば、きれいに干からびてくれるのだろうか。

ああなるまでに一体どれほどの日数が必要なのか、専門的な知識を持ち合わせていない岡崎には分からなかったが、たった一つ言えることがある。

赤ん坊はどうみても、六ヶ月というところだ。岡崎にも二人の子供がいるから、見当くらいつく。

ということは少なくとも、赤ん坊が六ヶ月になるまでは、女・佐々木麗子は生きていたことになる。そうでなくては、赤ん坊が健やかに成長していることの説明がつかない。

一緒にミイラになっていてくれたほうが、今よりはるかに状況を理解しやすかったはずだ。

岡崎は大きく息をつくと、額に手を当てた。

「とにかく佐々木陽司に会おうか。どこにいる？」

琢磨が何か言いたげに口を開いた。

「なんだ？」

「病院に運ばれました。捜査員が到着した時には、すでに茫然自失の状態だったとかで」

「じゃあ、誰が、その背広を取りに来たと言ったんだ？」

「女です」

岡崎は目をむいた。

それでもすぐに事情を察した。女連れで、妻のいる家に服を取りに来たというのか。

「悪い男だな、俺より」

「係長が比較対象なんですか？」

岡崎は琢磨の後頭部を平手ではたと、馬鹿なことやってんじゃねえ、と一喝し、部屋を出た。

胸が悪い。

幼い子供を抱えた妻を捨て、女の元に逃げる。

そんな人間は山と見てきたが、今回は少し事情が違う。

誰かに殺されたにしろ、自然にこうなったにしろ、幼い子供を残してたった一人で死んでいった佐々木麗子が不憫に思えた。

綾子はどうしているかな。

いつもなら思い出しもしない妻の顔を思い浮かべながら、岡崎は再び和室に戻った。

岡崎はリビングと繋がった和室の入口から、ベビー布団だけになった部屋を見渡した。遺体がなくなった部屋は、なんだか広く感じられる。

リビングに目を戻すと、テレビの脇に本と雑誌が積まれているのが目に入った。横積みされているので、何の本かは分からない。十冊以上はある。

岡崎はリビングに戻って、本を手にとってみた。すべて、育児関係の本だった。

そこに、佐々木麗子の孤独を垣間見た気がした。

一の段 胚胎…… 2

一通り部屋の捜査を終えてから、岡崎は琢磨と組んで、ミイラ死体・佐々木麗子の夫、陽司を尋ねることになった。

陽司は人事不省に陥って警察病院に運ばれている。

総合受付で尋ねると、佐々木陽司は救急診察室のほうにいます。親切な受付の事務員がわざわざ案内してくれた。

受付の左手から、救急診療室に入ってすぐの所に部屋があった。ベッドが六台並んだ、点滴などを受けるための部屋らしい。カーテンで仕切られただけの、簡易のベッドだ。一箇所だけ、カーテンが閉められたベッドがある。

監視のために入口に立っている警官二人に挨拶したところで、岡崎と琢磨の背後から甲高い女の声がした。

「どいてくだらない？」

女はオーキッド色のスーツを身にまとい、真っ赤なルージュを唇に塗り、ラメ入りのアイシャドーと巻き毛という派手な姿だった。およそ見舞い客や患者の家族といった風ではない。今からでもすぐに水商売の客の相手ができるという格好だ。

小首を傾げると、重そうなりリング型のピアスが風鈴のように小さな音をたてて鳴った。

手に缶コーヒーを二つ持っている。

岡崎は懷から警察手帳を取り出して開いた。

「佐々木陽司さん、あちらですか」

「あら、いやだ」

女はいかにも営業用の婀娜っぽい微笑で二人の警察官を迎えた。カーテンを引いたベッドを指差して、客を案内するに似た仕草で自ら先頭に立っていく。

確か佐々木陽司は二十一だった。女は化粧のせいかな、もう少し上に見える。

「陽ちゃん、警察だつて。じゃ、私、帰るから」

女はカーテンを身体半分くらい開けて、缶コーヒーを一本投げ込むと、腕時計を見た。ダイヤの仕込まれた、高級品だ。

「五時から店に出なきゃいけないから。じゃ、元気でね」

「明日、電話するからね、美樹ちゃん」

カーテンの中から明るい声がする。

岡崎は琢磨に目で合図した。琢磨も頷いて、女を足止めする。このまま黙って帰ってもらうわけにはいかない。身元をはっきりさせておく必要がある。

琢磨が女に質問を始めたのを見て、岡崎はカーテンを開け、佐々木陽司を見た。

陽司はベッドの上で胡坐をかいていた。手で缶コーヒーをもてあそんでいる。上着を足元に置き、ノーネクタイだったが、紺のスーツ姿だ。

幼い印象だった。まるで幼稚園児がランドセルを背負った時のような、新中学生が初めて学ランを着た日のような、妙な初々しさがある。童顔なせいかもしれない。

「佐々木陽司さんですね」

「そうです」

佐々木陽司は、すらすらと詰まることなく自分の住所や年齢などを述べた。面接官に応えるような几帳面さだった。

岡崎は拍子抜けしていた。佐々木陽司は高校生だといっても通る容姿だ。受け答えも真面目そのものである。それなのに、やっていることは一端の大人であることが、どうにもちぐはぐで理解できない。

「奥さんの麗子さんと、最後に話したか会ったのはいつです？」

「さあ……希実の夜泣きが五月蠅くて、家を出たのは春だったから……あ、そうそう。ゴールデンウィーク明けに、急に暑くなったことがあったでしょう？ それで着替えを取りに行きましたよ。そう、そのとき喧嘩になって！ 珍しく麗子が激しく言い返すもんだ

からよく覚えてます」

陽司はとても良いことを思いついたとばかりに、缶コーヒを投げ出して手を打った。微笑むとえくぼができる。

「五月の七日ですよ。ハイ、確かです」

岡崎は思わず手を上げそうだった。

陽司はあまりにもにこやかで、算数の正解を出したと喜ぶ小学生と同じ口調だった。思わず眉が寄り、眉間にシワがいったのが自分でも分かったくらいだ。

深呼吸を一つして、出来るだけ声を落とし、穏やかに言えるように努めながら質問を続ける。

岡崎の不機嫌を敏感に察知したのか、佐々木陽司はふいに笑うのをやめた。

「では、もう一つ。どうやらお嬢さんは“希実ちゃん”というのですな。今、警察のほうでお預かりして」

陽司は慌てて降参と言わんばかりに両手を上げた。

「いえいえ！ 僕には無理ですよ。育てるなんて。麗子は身寄りがないし、いいようにして下さいよ」

思わず岡崎はベッドの脇に置いてあった椅子を足で蹴っていた。

*

「係長、顔が怒ってます」

「あたりめえだ！」

「岡崎さん、殴りかかるかと思いました」

「よく堪えたと思うよ、自分でも」

警察病院からの帰り道、眉間にしわを寄せたまま、岡崎は何とか自分を抑えるのに必死だった。佐々木陽司は、麗子との間にできた子供を引き取る気はないと断言した。あれでは、中学生がリクルーティストを着て女遊びをしているのと同じことだ。

梅雨時の湿った風にあおられて、並木道の木々が梢を鳴らす。岡

崎には、木々までもが自分の怒りに賛同してくれているようにすら思えた。

「世の中狂ってますよね」

「なんだ、琢磨、珍しく泣き言か？」

からかうように頭一つ大きな琢磨を見上げると、いつもは飄々とした部下の顔が蛇蝎の如く嫌う獣を見たかのように歪んでいた。

「おいおい、そう真剣にとらえなさんな。ああいう輩も、世の中にはいるってことさ」

「そうですね、ほんとうに」

「そうそう、大人気なく怒っちゃいかん」

他人の怒りを静めてやるうちに、自らの燃えさかる炎も鎮火する、とはよく言うものだ。岡崎の熱も、かなり引いてきた。琢磨も小さく笑っている。

しかし……世の中狂っている。

それは確かかもしれない。

ミイラ死体の隣に、元気な赤ん坊。捨てられた妻と子供。

わけの分からん事件に出会ったもんだ。

岡崎は人差し指で頬を掻いた。

一の段 胚胎…… 3

平沢幹夫は苛立っていた。

目の前でタバコをふかしている男は、一向に電話をやめようとしていない。やたらと電話の相手に媚を売るような会話が、余計に幹夫の神経を逆撫でする。

ようやく電話を切って顔を上げたかと思ったら、男の口からでた言葉は、幹夫の怒りのスイッチをご丁寧に押し直したようなものだった。

「えっと、どちらさんだっけ？」

幹夫は大きく息を吸い込んで、わざと大きな声で言った。

「二日前にデモテープをお願いした平沢幹夫です」

「そうだった」

男は目じりを下げた。明らかに笑っていた。蔑んでいるようにしか見えなかった。男は笑みを顔に貼り付けたまま、座っているデスクの真ん中の引き出しを開けた。山のようなディスクが無造作に放り込んである。その中から一枚を取り出して、幹夫にぞんざいに突き出した。

「そうだなあ。人を感動させる、魂を揺さぶるものがないなあ。今は、人並みに歌えるだけじゃ、ダメだよ、光るものがなくちゃ。もうちょっと、経験、つんでおいでよ。じゃ」

ディスクを突き出したまま、幹夫のほうを見ようとせず、空いた手で受話器を握った。

何を言われたのか、分からなかった。周りの時計が、一瞬のうちにすべて止まったように感じられた。幹夫は呆然と差し出されたディスクを見下ろした。

いつまでたっても幹夫がディスクを受け取らないと分かると、男は無言のまま機の端に放り出した。ディスクがぺたりと音を立てる。再び媚びたような声で相手にへつらう電話が始まった。

幹夫はさらうようにディスクを掠め取ると、ポケットに突っ込んで踵を返した。

事務所の扉を叩きつけるように閉めてから、さらに隣の壁も蹴りつける。

『東山芸能プロダクション』

という表示を睨みつけてから階段を降り始めた。

こいつらは誰も俺の音楽を理解しようとしなんだ。

平沢幹夫は小声で呟きながら、ポケットに手を突っ込んだ。そこにはディスクが入っている。取り出してしばらく眺めていたが、おもむろに半分に折り曲げて階段の踊り場に捨て去った。

もちろん、唾を吐き捨てることも忘れない。

雑居ビルの三階は薄暗く、湿気た臭いと冷気で満たされていた。

五月の末から降り続けた雨がようやくおさまっても、今年はまだ暑くない。

幹夫はだらしくよれた長袖のシャツをたくし上げた。

音楽事務所を回るのも、もう五件目だ。

そのいずれにもことごとく拒否され続けてきた。デモテープを持っていつても、聴いてくれることはない。だが、今日の東山芸能プロダクションの担当者は違った。話だけでも聞いてみよう、とテープを受け取ってくれた。

幹夫は担当者からの色よい返事をかなり期待していた。自分の音楽には自信があったし、当然デビューの話があるとも思っていた。

高校時代からバンドを組み、その頃からのファンだっている。地元のパバーなどで音楽を披露すれば、ちゃんと客は聞いてくれた。客の中には、幹夫の音楽を褒めたたえ、デビューすればきっと応援すると持ち上げてくれる者だっていたのだ。

けれど、担当者は幹夫の想像もなかった答えを返してきた。

身体の奥底から発熱して、全身の水分が蒸発してしまうのではなにかと思うくらい、腹が立っていた。何かに当たらずにはいられなかった。

階段から降りると、脇に積まれていた新聞紙の山を蹴り崩した。

「ざまあみろ……」

崩れた新聞をわざと踏みつけて雑居ビルの玄関を出ると、暗澹とした雲が広がっている。

幹夫をあざ笑うかのように、道行く人々が振り返っていくような気がした。

それが余計に幹夫の怒りに油を差し込んでいった。

我慢ならなかった。

オレンジ色に染まった髪を乱暴にかきあげ、「どいつもこいつも、人をバカにしやがって！」と口汚く罵った。それでも気持ちはおさまらなかった。

幹夫は雑居ビルの玄関のすみに唾を吐き捨てた。所々破れたジーンズのポケットに手をつ込み、周囲を睨みつけるようにして足早に駆け出していく。

幹夫が出て行った後、ビルの玄関には再び薄闇と静寂が戻ってきた。

その、薄暗い玄関の隅に、一人の老婆が座っていた。

古い雑居ビルの隅には、蜘蛛の巣がはり、煤がたまっている。玄関を入ると右手に集合ポストがあり、そのすぐ奥がエレベーターになっていた。左側が、いま幹夫が降りてきた階段だ。

階段を下りてすぐ、踊り場の隅に、老婆は座っている。

身じろぎ一つせず、折り目正しく正座しているのだ。黒とも灰色とも見える着物の袖から、細い指が両膝の上に添えられていた。

銀鼠色の長い髪は結わうことなく乱れて肩にかかっている。頬はこけ、腕は肉を失い筋がたっていた。口元にはあるかなしかの笑みを浮かべ、縫い針のように細い目をしている。明いているのか、閉じているのか判断しかねる瞳は、まっすぐ走り去る平沢の方向へ定められていた。身体は微動だにせず、録画のスロー再生のように頭ごと青年の動きを追っていた。

ビルの玄関から平沢が見えなくなると、老婆の口元がゆるりと綺

麗な弧を描いて鋭く持ち上がった。歡樂に酔ったように目がしつかりと閉じられる。

悦にいった笑みが老婆の顔に張り付いた。

暗影に染まった着物を身にまとう姿は、漆黒の闇に揺らぐ蠟燭が燃え尽きていくのと同じように、やがて消え去った。

二の段 連接…… 1

雨が降っていた。

今年は六月になったばかりだというのに、梅雨のはしりだとかでよく雨が降る。五月の末から毎日のように降り続き、どこの中にも、きつと洗濯物が衣料品売り場さながらに陳列されているに違いない。

岡崎はコーヒークップを片手に、窓から音もなく、しとしと降る雨を眺めていた。

佐々木麗子はその特異な死亡状況から、検死の後、即日、司法解剖に回された。監察医務院という施設があるのは、東京特別区・大阪・名古屋・横浜・神戸の五地域のみで、他の地域は法医学教室に委託することになる。

岡崎のいる法医学教室の窓からは、この字形に建っている創英大医学部の校舎が見渡せた。時計はちょうど一時をさしていた。三コマ目の講義が始まるころだ。白衣を着た学生や研修医が歩いている姿が見える。

岡崎はぬるくなったコーヒを飲み干して、応接用のソファに身を沈めた。

教授の部屋はどこにでもある事務室のようにも見えた。

沢山のトロフィーや表彰状らしきものが並んでいる以外は、棚にびつしりと本やファイルがあるだけで何も無い。並んでいる本は法学や医学関連だけでなく、一般の文芸書から、何故か野球やスキー、テニスなどのスポーツ関連の本まである。かなり雑食な読書家らしい。

本だけはきちんと整理されていた。雑誌などは几帳面にも発刊順に並んでいる。

ただ机の上は違う。パソコンの周囲にも本や書き殴ったメモ、食べかけのサンドウィッチなどが散らかり放題で、一体いつ片付けた

のかと問いただしたくなる。

きつと本は助手あたりが片付けているのかもしれない。

相変わらずわけが分からん人だ。声を出さずに岡崎は呟いた。

創英大学医学部法医学教室教授・野辺山哲^{のへやまさとし}とは、岡崎が土岐河警察署に配属になって以来の知り合いだった。事件で出会ったあと、偶然にも親戚の葬儀で再会し、互いの妻が再従姉妹であることが判明した。

以来、親しく付き合うようになったのだが、いつ来ても野辺山の周りが片付いていたことなどなかった。岡崎はこの机の上と似たような場所を思い出さざるを得なかった。

昨日、事件のあったマンションの和室で見た光景が、どうにも頭から離れない。

干からびた死体がどうやら脳裏に焼きついてしまったらしい。

岡崎はポケットから手帳を取り出すと、間に挟んである一枚の写真を取り出した。女が一人、写っている。

遺体は干からびて人相も分からなかったから、岡崎にとっては、写真を手にして初めて麗子に直面した気分だった。

化粧つけが全くない。眉も少し薄かった。髪は後ろにひとつに束ねている。美人とはいえないが、とても綺麗に笑っていた。

この写真は背景を消して人物だけを取り出した合成だが、実物は違う。実際は産院の病室で、佐々木麗子が生まれたばかりの赤ん坊・希実を抱いて微笑む写真だった。

女は子供を生んだばかりが一番美しいという。偉業を成し遂げた満足感と充実感で、マシユマロのように優しく笑えるのだ。岡崎の妻、綾子だって、今は目を吊り上げて亭主を締め上げているが、二人の子供を生んだ時は同じ顔をしていた。

日付は十一月二十一日。写真の下に、産院の名前がある。写真は、独身時代のもの以外は、これしかなかった。産院を訪ねると、写真は記念に看護師が撮ったものだという。麗子は希実をたった一人で産んだのだ。たった一人で産んで、一人で育てていた。

赤ん坊はあのあと乳児院に預けられたが、機嫌よく過ごしている
とさっき聞いたばかりだった。

それだけが救いだな。

岡崎は赤ん坊の寝顔を思い出して、表情を柔らかく崩した。

少し角ばった顔はどう見ても厳つくて、娘二人には「塗り壁」だ
と敬遠されるようになってきた。一係でも強面で通っている。気安
く話しかけてくるのは琢磨くらいで、岡崎は珍しく神経の太い新人
だと思っていた。

「やあ、待たせたね」

待ち人がやってきたので、岡崎は手帳をしまつて立ち上がった。

「結果は？」

「相変わらず急ぐねえ、岡サン」

「さんざん待たしといて、そりゃねえだろうよ」

白衣を着た男が立ち上がった岡崎にかまう風でもなく、向かいの
ソファーに腰を下ろした。テーブルに、まるでごみを捨てるように
紙の束を投げ置く。

「ほい、報告書」

「野辺山さんよ、簡単に説明してもらえると有難いんだよ。この足
ですぐ行きたいところもあるしな」

「まあ、座りなよ」

野辺山は笑いながら、白衣のポケットからタバコを出して火をつ
けた。体を起こして自らの膝の上にひじを乗せ、岡崎を見上げる。

白衣はアイロンもあたつていないし、一体いつ洗濯したのだと問
いただいたくなるような汚れもついている。白衣の下はラフなポロ
シャツにジーンズで、これでよく教授として教壇に立っているな、
と肩書きを疑いたくなる風体だ。それでも涼しげな目元は、とても
岡崎と同じ年とは思えず、白衣を脱げば精悍な中年にみえるだろう。
適度に日焼けした健康的な肌は、スポーツマンを連想させる。

「で、アレは他殺？ 事故？」

岡崎は早口で尋ねた。要するに知りたいのは、事件性が在るか無

いかなのであつて、それさえ聞ければ用は足りる。

「だから、急かないでくれるかな」

少しは休ませろよ、という言葉がそこに見え隠れした。岡崎も仕方無しに腰を下ろす。野辺山はゆっくりと一度タバコをふかしてから、声を低くして言った。

「人間業じゃ、ないかもな」

周囲の空気の流れが一瞬、止まったようだった。録画再生を停止したのと、同じ感覚を岡崎は味わっていた。

部屋は静かで、雨の音だけが響いてくる。

野辺山は岡崎の反応を楽しむかのように、喉の奥で小さく笑うと続けた。

「結論から言えば、あの仏さんは完全なミイラだよ。ただし、あんなミイラは歴史上まれに見るだろうね。エジプト人もびっくりだ」「ミイラじゃないってことか？」

「いや、法医学的に見たら、ということさ。岡サン、ミイラの作り方、知ってる？」

「知るかよ、そんなもん」

岡崎は昨日の和室の状態を再び思い出して身震いした。

「エジプトではね、死体から内臓を取り出して、別の壺に入れるんだ。映画のハムナプトラ、見た？」

「知らん」

「なんだあ、あれ、面白いよ」

野辺山は眉をひそめる岡崎を見て、悪戯っ子のように微笑んだ。

「映画はおいといて、まあ、なんでそんなことするかっていうとね」

野辺山は簡単にこう説明した。

身体の腐敗が進行するよりも早く急激な乾燥が起きると、細菌の活動が弱まりミイラ化する。自然発生ミイラは砂漠の砂の中から見つかる事が多い。それは急速な乾燥をもたらす自然と、餓死による脱水状態であることによって、水分量が少ないという絶対条件が整うからだ。しかし、こういった自然のミイラは不完全なことが多い。

死体の中で一番先に腐敗が進行するのは、外気に触れることのない内臓である。

「だから、エジプトでは内臓を取り出すわけさ」

「じゃあ、この佐々木麗子の場合は、完全なミイラになる、ってなことは」

野辺山は大きく頷いた。

「まず不可能だろうね。まあ、すごい偶然が天文学的な確率で起これば別だよ。だけどねえ、春だしね、雨も降って湿気もあったし、死蝻っていうなら分かるけれど、三ヶ月もあの状態にいる」

「三ヶ月？」

「そう、ミイラになるにはそれくらいはかかる。ああ、その前に餓死か脱水状態になってなきゃいけないし、さらに三週間は加えとい

て」

言葉を遮った岡崎に機嫌を損ねるふうでもなく、野辺山は指で三をつくって顔を綻ばせた。

餓死状態になるには、体格や脂肪の多さにもよるが少なくとも三週間はかかる。

「でもね、餓死、っていうのも考えられない」

野辺山は一度吸ったきりのタバコを灰皿で押し消すと、報告書を指差した。

「読んでもらえばわかるけど、仏さんの死体の脳は死後一日、って所だった」

岡崎は報告書に目を落としていた、その姿勢のまま硬直した。

体は死んで三ヶ月はたっているのに、脳だけが死後一日？

岡崎は心霊写真でも見るように、野辺山をゆっくりと見上げた。

「脳はね、溶けちゃうんだよ。聞いたことない？ 脳死状態の人の脳は機能を失って崩れていくんだ」

野辺山の表情が硬くなっていくのが、岡崎にも分かった。

ミイラの作り方だの、ハムナプトラだの言っている、茶目っ気のあるところはあっさりと消え去り、代わりに、法医学の講義用の小

難しい顔になっていく。

「まだ緊急検査結果だから、正確じゃないよ。でもさ、脳からは、大量のエンドルフィンとドパミンが検出された。それにグルコースだってたんまりあった。脳は確かに生きていたし、死んでいなかったよ、一昨日まではね」

至極自然に聞きなれない単語を並べられて、岡崎は危うく聞き流すところだった。足の裏から、むずむずと蕁麻疹が広がっていきそうだったが、捜査のためとあればそれも我慢するほかない。

岡崎は頬を人差し指で掻きながら、小首を傾げた。

「あのさ、野辺山ちゃん」

「分かってますって。だからね、脳からは、過剰なくらいの興奮物質が検出されたのよ」

ドパミンはアドレナリンやノルアドレナリンの元になる神経伝達物質のひとつである。アドレナリンとは副腎で分泌されるホルモンで神経伝達物質の代表選手だ。心拍が上がるのも、アドレナリンが一役買っている。現在、仮説ではあるが、統合失調症（幻覚・妄想など）は、中脳辺縁系ニューロンのドパミン過剰によって生じるともいわれている。また、同様にエンドルフィンは体内で生産される天然の鎮痛薬であり、モルヒネそっくりの快感作用をもたらす脳内麻薬物質である。ある種の恍惚感をもたらすともいわれている。

「それと、脳はバカ食いなんだ。グルコースは、ブドウ糖、って言えばいい？ まあ栄養なんだけどさ、人間が摂取した糖の四分の一は脳にいくんだぜ？ それに等しい分の糖は確保されていたようだから、頭に限って言えば、餓死したわけじゃなさそうだ」

野辺山は急に疲労感を感じてもしたかのように、肩に手を当てて首を左右に動かしながら、ソファアに体を沈めた。

岡崎の中で昨日考えたことと、いま野辺山が言ったことが見事に一致していくような気がしていた。

赤ん坊は生きていた。

佐々木麗子の隣に寝ていたにもかかわらず、だ。

つまり、佐々木麗子は三ヶ月かかってミイラになったのではなく、短時間でああいう状態になったと考えるほうが、すべて辻褃が合う。麗子の夫・陽司は言っていたではないか。

ゴールデンウィーク明けに喧嘩をしたと。

五月七日には、麗子は元気に喧嘩ができた。さらに、近所の目撃情報によると五月の二十九日、やつれてはいたが、麗子はたしかにベビーカーを押して散歩に出たらしい。

そして、六月一日、ミイラとなって発見された。

わずか三日。この三日の間に、麗子の身に何かがおき、ミイラ死体となった。

岡崎はその話を野辺山にした。捜査上の秘密保持は義務ではあったが、この場合は例外だと勝手に決め付けた。だいいち、報告書をひとりで勝手に先に読みに来ていること自体、規則違反といわれても仕方ない。

野辺山は話を顔色ひとつ変えずに聞いていた。

話し終わった後、二人は沈黙した。

相変わらず、雨の音だけが部屋に充満していった。廊下からも足音ひとつしない。講義が始まったのか、学生達の話し声もしなかった。

静寂の中に、取り残されたかのようなだった。

「おかしい話だな、岡サン」

野辺山は再びタバコをポケットから取り出した。だが、それを吸いもせずに、一本を手にしたまま、しばらく弄んでいた。

「仏さんは、あつという間にミイラにされたわけだ。不思議なことに、脳だけが生きていた。体はミイラなのにね……でも少なくとも死ぬ時は幸せだったろうよ。そういう結果が出るしね、脳からは……」

野辺山は持っていたタバコを灰皿に押し付けた。火すらつけていなかったのに。岡崎はそれを指摘しようとしたが、次に野辺山から出た言葉があまりに非現実的だったので、呆然とした。

「泣いてたよ、僕の見た仏さんは、目が無いのにさ、涙流すんだぜ？」

これを岡崎の脳が理解するまでに、たっぷり一分はかかった。何をバカなことを言っているのかと、返そうと思ったが出来なかった。野辺山がこのようなことを言うのは初めてではなかったからだ。

野辺山は法医学教室の教授という地位を持つ、いわば科学者でありながら、非現実を肯定するに十分な経験も豊富だった。

「しきりに目を指差すんだよね、だけど、霊体が弱々しくて、声が聞こえない。そんな霊に会うのは初めてだな。強い人は犯人を教えにくれたりするからねえ。まあ、たいていは現場にとり憑くみたいだから、一緒に死体という人は滅多にいないけどね」

野辺山は見えるのが当たり前で、何の疑問も持ちませんとばかりに微笑んだ。

岡崎は、背中に氷塊を入れられたのではないかと思うほどの寒気を感じていた。岡崎にはおよそ霊感というものはなかったが、野辺山がこの話をする時だけは、いつも背中がむず痒くなるのだった。

二の段 連接…… 2

岡崎と琢磨が科捜研、科学捜査研究班の報告を聞いたのは、野辺山教授の法医学教室を訪問した翌日のことだった。

佐々木麗子のミイラ死体が発見されて、三日が経過した。

科学捜査研究所でも、麗子の細胞などの詳しい検査がなされた。だが、野辺山教授の見解となんら変わりのない結果でしかない。毒物などは一切検出されず、また刃物などによる傷もなく、首を絞められたという索条痕もない。結局、死因は特定されなかった。あとは、本人であることが最終的に確認されるDNAの解析結果待ちだった。

麗子の干からびた指にはめられていた結婚指輪は、夫・佐々木陽司と同じものであった。また、頭蓋骨と写真を照らし合わせるスーパーインポーズ法によっても、麗子本人であることは一致していた。ただ、最終的な結論をDNA鑑定に依存しているわけだ。

事件性を示す目撃証言や物証は何ひとつ出なかった。

室内の指紋も、佐々木洋司、麗子、希実以外のものは発見されていない。

岡崎の部署内でも、早くも事件性ナシ、という動きになりつつある。他にも抱える事件は多くあって、変死事件ではあるものの、特異な死亡状況からみても殺人などでの立件は難しいという見解に落ち着きつつあった。

まさか解剖所見に従って、非現実的な捜査を行うわけにはいかない。

岡崎も今は違う仕事に忙殺されていた。

二件の傷害事件の調書がたまっている。岡崎がもつとも不得意とするのはデスクワークだった。不備を指摘されるのは日常のことだ。これは刑事の仕事ではない、と公言しているくらいだ。

インスタントコーヒーを片手に悪戦苦闘する岡崎の右肩を、刑事

課の課長・久保が叩いたのは、ちょうど昼の休憩まであとわずかという時だった。

「まだ、完成してなかったの？　岡サン。悪いけど、放火殺人」

「聞こえませんでした」

岡崎はペンを走らせながら、顔を上げずに言い返した。

久保も負けずに、今度は岡崎の両肩をしっかりとつかんで揉み始めた。

「まあまあ、岡サン。そう言わずに行ってくれないか？　行けば、調書の提出期限が、少しのびることになるんだがなあ」

滅多に声を荒げることもない寛容な上司だった。目尻が下がっていて、ふつくと大福餅を連想させる丸い体型も、久保の温容な人格を強調している。およそ刑事課にいるとは思えない風体だが、仕事に対する姿勢は誰よりも厳しい。勸善懲惡を地でいく性格だ。影で「お代官様」と呼ばれていることは、さすがに久保の耳には入っていないはずだった。

岡崎も久保に対しては安心して冗談も言えるし、信頼もしていた。「調書の提出期限が延びても、その間に別の仕事してたら、一緒にしようがぁ」

斜め向かいで、同じく調書を書いていた琢磨はすでに立ち上がっていた。

「後輩さんはヤル気満々だ」

腰の後ろに手を回しながらすでに踵を返した久保をみて、岡崎は舌打ちした。冷めたコーヒを一気に喉に流し込むと、机の上に散乱した書類を片付けた。

「約束ですからね、課長。提出期限は延長です」
「聞こえませえん」

久保は笑いながら、他の捜査員たちにも声をかけていた。調子がいいのはいつものことだが、それに上手くのせられている自分も、どうかと思っていた。しかし、仕事とあれば仕方がない。少しでも警察官を休ませてくれてもいいはずだった。事件の解決のために

奔走しても、警察は何をやっているんだという非難が常に付きまとう。そういう時は遣り切れない思いを抱え込んで酒に訴えるしかない。

「どうだ、琢磨。今夜あたり、行かんか？」

コップを煽る真似をして琢磨を誘ってみたが、当の後輩は即、首を横に振ってきた。

「僕、デートなんです。岡崎さんも、たまには早く家に帰ったほうがいいんじゃないですか？」

「うるせ、余計なお世話だよ」

琢磨の後頭部に平手をぶち込んで、岡崎はため息をついた。

家に帰ったら、妻の綾子と喧嘩が待っている。もっぱらの話題は、高校三年生になった長女と、中学三年の次女の進路だ。高学歴を望む綾子と、叩き揚げで刑事を勤めてきた岡崎とでは、こと学歴という価値観に関して言えば北極と南極ほどの距離の開きがあった。

「現場はどこだ？」

捜査員の一人が、車のキーを手に駆け出した。

「大崎町三丁目の雑居ビルです！」

*

岡崎が担当になったのは、早朝におこった放火殺人事件だった。燃えたのは、大通りの抜け道として利用される狭い道に建っているビルだった。道幅が車一台分であったこと、夜間の路上駐車が常習であったことなどから、消火活動がかなり難航した。火を消し止めてから、無人とされていたビルから遺体が発見されるまでも、少し時間を要したらしい。

一番烈しく燃えていたのは、雑居ビルの入口だった。そこから、黒く煤けたビンが発見された。

雑居ビルに投げ込まれた火炎瓶が、運悪く管理人室の前に積まれていた廃品回収の古新聞に燃え移ったというのが、現在のところの

見解だ。

被害者は雑居ビルの管理人だった。

管理人室はビルの一階にあり、四畳半の小さな窓のない部屋だった。本来なら、納戸として使われるはずの狭い部屋は、消防法からみれば違法ともいえる造りになっている。そこを管理人は勝手に自分の部屋としていたらしい。

いつもなら不在であるはずの管理人は、その日偶然、家賃を滞納していた契約者に督促状を叩きつける目的で部屋に泊まっていた。家賃を滞納している焼鳥屋の主人が、営業終了の深夜二時、最後に管理人に会ったと証言している。出入り口が一つしかない部屋の唯一の逃げ道が燃え上がったために、管理人は部屋に閉じ込められ、あつという間に炎にまかれて死亡した。

「ひでえな、こりゃ」

岡崎は煤けた古い雑居ビルを見上げた。五階建てのビルは現在すべて賃貸契約が結ばれて空きなしだった。一階には管理人室と焼鳥屋、二階が消費者金融、三階が東山芸能プロダクション、四階と五階がアパレル会社のようなだった。一階の焼鳥屋はビルの裏手、一筋向こうの道路沿いに入口が設けられている。ちょうどエレベーターと階段の向こう側に、完全に独立した形で店が一軒あるのだった。

岡崎は一階にある集合ポストから上を見上げた。

一階と二階へ続く階段は、真っ黒に焼けていた。焦げた臭いが充満し、いまだ漂う煙に目が痛くなる。ポストも一部炎の勢いによって歪んでいた。最もひどいのは、管理人室だ。燃えるものは、すべて燃えつくしたとっていい。

おそらく管理人は眠っていたに違いない。起きていたとしても、外に出ることは不可能であったし、火にまかれるか中毒を起こすかどうかにしても逃げることはできなかったはずだ。

琢磨はハンカチで口元を覆ったまま、眉をひそめた。

「確信犯ですかね」

「さあ、どうかな。どんな恨みを持ってたか知らんが、ひでえ犯人

だ」

「ですが、管理人が泊まっているこの日を選んだんですから」

「決め付けちゃいかんぞ。憶測とか思い込みってのが一番怖いんだ。偶然、とか、運が悪いってヤツも、この世にはあるんだからな」

岡崎は再び雑居ビルを見上げた。

理由はなかったが、空気が澱んでいるように思われた。焦げついた臭いと、そこから立ち上る煙に、気持ちが悪んでいくのが分かった。

見ず知らずとはいえ、人が命を理不尽に奪われるというのは、何度経験しても気分のよいものではなかった。

二の段 連接…… 3

平沢幹夫はだらしなく膝の上に乗せていた手を、ゆるゆると両耳をふさぐヘッドホンに添えた。

暗紅色のヘッドホンは、オレンジ色の髪に埋もれてカチューシャかヘアバンドのように見える。頭に巻きつくようなそれは、鮮血が変色してどす黒くなった血溜りをほうふつとさせた。

静謐な室内に、マラカスを遠慮がちに振ったような音が切れ目なく響いている。

どうやら音楽が洩れ聞こえているようだった。

八畳一間の部屋は脱ぎ捨てた衣類や、食べかけのパンやカップラーメンなどで雑然としているものの、生活必需品以外ではすべて音楽関係のもので満たされていた。ポスターもカレンダーも本もすべてが音楽とつながったもので、それ以外のものは見当たらない。

壁際にはミキシング用の機材やキーボードなどが並べられ、天井まである隣の棚にはCDが何百枚と並んでいた。

幹夫は機材の前に胡坐をかいて座っていた。

身じろぎ一つせず、じつとコンポを見つめている。

憧れの音楽家に会ったように恍惚とした表情をしているが、だらしなく開けられた口元からは涎が垂れていた。ふっくらとしていた頬は、わずかにこけ、目の下にはクマができている。肌にも艶がなく、どちらかと言えば血色が悪い。

部屋の明かりはついていない。

カーテンが半分開いているが、外は闇だった。すでに日が落ち、雨雲に覆われた空からは月明かりさえ期待できない。

ワンルームの台所にある小さな電灯だけが、隣にある八畳ほどの部屋を仄かな明かりで照らしていた。隣室の明かりが幹夫をやりわりと照らし出し、反対側に薄い影をつくっている。

仄暗い部屋の中で、幹夫はずっとコンポから流れる音楽を聴いて

いた。いつもならリズムにのったり口ずさんだりするが、今夜はただじっと、置物のように座っている。

時折、ピクリ、と体が痙攣する以外は、息をしていることすら忘れていたのではないかと疑いたくなる。

ヘッドホンに手を添えたまま、また、しゃくる様に体を痙攣させた。

刹那、ふいに台所の電灯が揺らぐ。

幹夫の薄い影も、ほんの一瞬、陽炎のように揺らいだ。

弱い光源から作られたはずの影は、瞬時に漆黒の闇へと変化した。墨を塗りたくったかのような底知れぬほどの濃い陰影が水を掬い上げたかのように沸きあがり、幹夫ではない別の人間が現れた。

老婆だ。

幹夫の背後に、寄り添うように座っている。

骨に皮を一枚巻いたかのような細い指を膝に添えて正座している。黒とも灰色とも見える薄墨色の着物を着ていた。

突然、蝶番が外れたように老婆の首が左に傾げられた。

銀鼠色の長い髪が老婆の頬にかかった。頬はこけている。腕は肉を失い筋がたっていた。口元にはあるかなしかの笑みを浮かべ、縫い針のように細い目をしている。

老婆の口元が弧を描いた。太い笑みが浮かんだ。

老婆は締め上げられた喉から振り絞るようなしわがれた声で、幹夫を呼んだ。

「どうじゃ、気分が好いじやろう？」

幹夫が声に反応したかのように小さく痙攣した。

「そうか、よいよい」

老婆は枯れ枝のごとき手を伸ばして、幹夫の髪に触れた。優しく愛撫しながら、老婆は音も立てずに、膝で前へ進み出て幹夫に寄り添った。

幹夫は、これ以上の幸福はないとばかりに、感嘆のため息を漏らした。それが少しずつ、女と肌を触れ合った時のような喘ぎ声に変

わっていく。

「そうじゃ、お前の聴いている音楽とやらは、お前の血となり肉となる。それはお前の曲だよ。どうじゃ、満足じゃろうが」

摩擦のない床を氷が滑っていくに似た動きで、老婆は幹夫の周りをまわりつくように移動した。正座したままだ。そのままの姿で老婆は幹夫の前に回ってきた。

「俺の音楽……」

「そうじゃよ……満たされておるが良い」

「俺の音楽……」

幹夫は念仏のように同じ言葉を繰り返しはじめた。幹夫の声は徐々に大きくなっていく。

「俺の音楽を理解しないヤツは、地獄に落ちればいいんだ」

表情を変えずに、幹夫は呟いた。

老婆の口元に下卑た笑みが浮かんだ。

「面白い男よ……」

老婆はなおも、幹夫の髪を弄ぶように愛撫し続けた。

「気分が好いじゃろう？」

再び幹夫が老婆の声に反応したかのように小さく痙攣した。

「若い者の生き血はなんと力が漲っていることよ……これでまた満たされてゆくわい……」のう、そうであろうがよ」

オレンジ色の髪に触れていた老婆の筋だらけの土色の手が、幹夫のあごに滑り降りてきた。

幹夫が跳ね上がるように身体を震わせた。

「待っておれ……いま、満たしてやるからな……」

三段 接合…… 1

雑居ビル放火殺人事件の捜査はひとつも進展しなかった。

進展しないどころか、毎日のように雑居ビルの玄関付近に小火が出る。周辺住民から苦情が相次ぎ、連続放火を警戒して、警察官が夜を徹して雑居ビルの警備につくことになった。同時に特別警戒のパトカーも周辺の巡回を始めた。

それでも小火はやまなかった。毎晩のようにどこからともなく雑居ビルの玄関付近で火が熾り、警備に当たっていた警官が慌てふためいて消火に当たる毎日だ。

なぜ、どうやって、警察官の監視を掻い潜って火をつけることができるのか、誰にも分からない。

そのうち、焼死した管理人の亡霊の仕業ではないかという妙な噂まで立ち始めた。犯人らしき目撃証言が何ひとつ出ないにも関わらず、火が湧き出すように点くことが、周辺の人間には超常現象に見えたのかもしれない。

まさか、警察まで霊の仕業だと騒ぎ立てるわけにもいかず、警備とともに、地道な捜査が続行されていた。

家賃を滞納していた契約者はもちろん参考人として連行されたが、放火があつた時間には確固たるアリバイがあつた。捜査はすぐに振り出しへ戻り、捜査員たちは目撃者探しと容疑者のあぶり出しに奔走させられた。

岡崎と琢磨は三階にあつた東山芸能プロダクションの担当となり、事務所に関係する人物の洗い出しにかかりきりとなった。とにかく、芸能界の端くれに位置する東山芸能プロダクションは人の出入りが一番多く、かつ記録にすら残っていないことが多かった。ある時は苗字だけが残されており、ひどい時など愛称だけで人物を特定しなければならなかった。以前に契約していた人間、そのマネージャーや移転先事務所などの関係者をリストアップしただけで、岡崎は息

を呑んだ。

「洗い出すだけで、十年くらいかかるんじゃないか？」

「十年ですか！」

向かいに座る琢磨の真面目な返答を無視して、岡崎は頭をかきむしった。

社長を含め五人の社員の周辺からは、恨みを買いそうな事情を抱える者はおらず、これといって動機となるものも見当たらない。所属のタレントもテレビでは全く見ないような顔ぶれであったし、雑誌や会社と契約してモデルをするのが現在の主な業務内容らしかった。

以前は岡崎でも知っている有名な歌手もいたようだが、揉め事を起こして移籍している。その歌手にもアリバイがあった。

さらに岡崎を驚かせたのは、事務所の人間の引き出しから出てきた山ほどのデモテープだった。売り込みにきた者達の、出来の悪い音楽。彼らの中に、逆恨みをする者がいないとも限らない。

先の見えない人探しに疲れ果てて、冷めたインスタントコーヒーを入れなおそうと腰をあげた時だった。

「岡サン、例の件、結果が出たらしいよ」

久保がいつものように、岡崎の肩に手を置いて言った。

「例の件、って言う」と

「ディスクだよ、三階の踊り場に落ちていたやつ。真っ二つに折れちゃった」

「でましたか」

放火事件の捜査の際、三階の東山芸能プロダクションの近くに、一枚のディスクが落ちていたのが発見された。無残にも半分に折られ、隅に捨てられていた。その上に唾を吐き捨てたらしく、さらに雲の巢も巻きついて、ディスクはかなり汚れていた。

「やっぱり、デモテープ、らしいよ。聞ukai? 岡サン」

「いいです。東山芸能プロダクションの人が言っていました。似たような音楽を聞かされる身にもなっけ欲しい、なんてね。で、どうで

しょうか？」

久保が差し出した真新しいCD Rを手にしながら問うた。久保はわずかに眉を寄せ、肩をすくめた。

「でるわけないね。こんなことで、このディスクを捨てた人間を特定できたら、楽なことはないじゃないか。分かったのは、血液型がAだってことくらいだね」

「なるほど、容疑者が日本人のうち四分の一になったわけだ」

「指紋は取れたらしいよ。前科はなし」

「そりゃ、すげえ」

犯人は永久に分からないと宣言されたのと同じだと、岡崎は思った。東山芸能プロダクションの新人を発掘する担当者は、デモテープを持ち込む人間の名前どころか顔すらも一切記憶にないと、ついさつき聞かされたばかりだった。

「それじゃ、あと頼むよ、岡サン」

久保は嫌味ではないかと思えるほど無邪気な笑みを残して席に戻っていった。岡崎に言わせれば、夜中に警備に当たっている人間の手落ちじゃないかと、叫びたい気分だった。しっかり見張っていれば、連続放火魔を逮捕することは容易なはずだ。

人差し指で頬をかきながら、やつぱりコーヒーを入れなおすことにしようと再び席を立った時、岡崎のスーツの内ポケットで携帯電話が震えだした。

三段 接合……2

創英医科大学の法医学教室、野辺山教授の部屋は几帳面に片付けられていた。相変わらず教授の机の上だけは、埃をかぶったパソコンのまわりに、本と紙屑と、飲みかけのコーヒー、学生の書いたレポートなどが散乱していた。机のライトが点かないのではないかという高さにまで本が積みあがっている。

「おい、この前きた時より、本の山が高くなったんじゃないか？」

岡崎は小姑のように、机の上の埃を人差し指で擦り取って、野辺山に差し出した。

野辺山は悪びれた風もなく、講義用の資料を応接テーブルに投げ出すと、椅子に深く腰掛けてポケットからタバコを取り出した。

「いま論文を一つまとめているんでね」

「ほお、仕事やってんだ、野辺山先生」

「岡サンよりはね」

野辺山は笑いながら、タバコに火をつけた。

いつものようにくたびれた白いポロシャツに、今日はあるうことが、ジャージだ。その上から白衣を羽織っている。一体どこの世界にこの姿で講義をする教授がいるのだろうか、岡崎は野辺山を頭の先から足元まで眺めやった。

その訝しげな視線に気付いたのか、野辺山は自分の服装を見下ろして、「さつき講義の前に、学生とスカッシュやってたんだよ」と白い歯を見せる。

「それより、その入口に固まってるひよる長い後輩さんを紹介してくれないかな」

膝に肘を置いた姿勢のまま、野辺山は入り口を振り返った。

目が合った瞬間、琢磨が姿勢を正し直したのを見て、岡崎は声を立てて笑った。

「琢磨貴彦くん。彼は俺と違って出来がいいからね」

「よろしくお願いいたします！」

琢磨は敬礼でもしそうな勢いで、さらに背筋を伸ばして深く礼をした。

「まあ硬くならず、入口に立ってないで、こっちへどうぞ」

入口に縫い止められている琢磨の腕をつかんで、岡崎はソファーに座らせた。

「ところで野辺山先生。いま勤務中なんだけどね。急に呼び出されても、困るんだよ」

「オヤ、勤務中にちゃんと寄ってくれたじゃないか」

声をたてて笑いながら、野辺山は半分ほどしか吸っていないタバコを灰皿に押し付けた。そのままウンと唸って、頭を掻く。

「岡サンに頼みというか、なんていうか。どうしていいか、分からないわけでもない。でもさ、あんまり気の毒でね、毎晩出てこれる」とさ

「毎晩って？」

岡崎は冷凍庫を覗いたかと思った。それほどの寒気が、襲ってきた。野辺山が「出る」と言えば、何が「出る」のか思い当たることがはたった一つしかない。

「そ、毎晩」

野辺山のほうは、お酒のつまみが毎晩同じだという程度の軽い口調だった。人差し指をわざとらしく立て、左の肩越しに後ろを指差す。

「いる」

指先から鳥肌が音をたてて広がったかと思った。ソファーに背中を押し付けるようにして後ろに下がる。

「いる、って、佐々木麗子さん？」

思わず「さん」をつけているあたり、自分でも可笑しいもんだと、岡崎は内心苦笑した。だが、間髪おかずに野辺山が頷いたので、咳払いで動揺を誤魔化し、座りなおした。

「その、彼女はなんて言ってるんだ？」

「なんにも。前にも言わなかったっけ？ 目を指差して、泣くんだよ、さめざめとね」

そのほうがよっぽど怖いんじゃないか、という言葉は、辛うじて口にしなかった。言ったら野辺山の肩越しに手がにゅっと現れて、瞳を失った佐々木麗子が恨めしそうに出てきそうな気がしたのだ。あのむせ返るような部屋で見た、ミイラの姿で、だ。

岡崎は隣で目を丸くしたまま硬直している琢磨に気付いて、野辺山の特技を話して聞かせた。琢磨は一度肯いただけで何も言わなかった。部下が野辺山の話信じようが信じまいが、いまの岡崎にはどうでもいいことだ。琢磨のことは一先ず保留にしておくことにした。

「それでさ、野辺山ちゃんは俺にどうしろってんだよ。何にもできやしないって。今は放火殺人事件の捜査でいっぱいだよ」

野辺山は口の端をわずかに持ち上げて笑っていた。

「この前、学会に行ったらね、こういう遺体を解剖したって話になってね」

「は？ それで？」

「それでね……」

野辺山はまたタバコを出した。

顔も講義用の小難しい顔になっている。難解な参考書と睨めっこしたような野辺山は手でタバコを弄んでいた。岡崎はこの時、初めて気付いた。これは野辺山の癖だ。たぶん講義中も、白板用のマジックかチョークをいじりながら話をしているに違いない。

今度、講義を覗いてみると面白いかもしれない。

「実はさ、同じ遺体を解剖した教授がいたんだよ」

意外な言葉を聞かされて、岡崎は野辺山の顔を二度と見たくないと思うほど眺めた。最近、妻の綾子とでさえ見つめ合ったこともないというのに。

野辺山は岡崎が驚いて目を丸くしているのにもかまわず、タバコを弄びながら続けた。

「隣の県の話だったしね、世間ではどれほど話題にのぼったんだか、僕も知らなかったんだけど、ほら、先月の、ゴールデンウィークの終わり……五月の六日だ。マンションで首切り死体、っていう事件、覚えてないかな」

「その前に！ ちょっと待った。それって、ミイラ死体だったって、こと？」

野辺山は大きく肯いた。岡崎の隣に姿勢よく座る琢磨にも視線を送って、もう一度肯いてみせた。

「そう、ミイラだったらしいよ、世間には公表されてなかったと、教授は言っていたけれどね。マスコミあたりでは、餓死した女子高生という風に一時は騒がれていたらしいよ」

岡崎は、周囲の空気を貪るように口を開いたり閉じたりした。なんと说着いていいか、分からなかったからだ。

隣に座る琢磨が、岡崎に確認するように問いかけてきた。

「僕は覚えてます。一時的に騒がれてましたが、あとで訂正が入ってましたよね。あれはダイエットをしすぎた餓死で、首は落ちてなかったって。でもミイラ死体だとは聞いてないですよ、岡崎さん」

「そうなの？ 岡サン、部下のほうが記憶力いいじゃない。でさ、先生は自然発生ミイラとは考え難いし、首が切れていたのも、乾燥して折れたという可能性を指摘したらしいんだよ。だいいち、両親と一緒に住んでいて、前日までは部屋にいたって言うんだから。でさ、随分もめたようだけど、結局はいまだに事件性がどこにも認められないらしいよ」

野辺山の言葉が終わらないうちに、岡崎はしてやったりとばかりに大きく手を打ち鳴らした。

「アレか！ 高層マンションで女子高生の首切り死体、という……」

「それじゃまるで新聞の見出しじゃないか、岡サン」

野辺山はソファーにもたれかかり、声を立てて笑った。

「そこで、なんだがね」

ふいに笑い声がやんで、タバコの先が岡崎に向けて差し出された。
「野辺山先生の言いたいことは分かってきた。この二つは同じだと
言いたい訳だ」

「そうなんだけどね……」

野辺山はタバコで頭を掻こうとして、思わず頭の上でタバコを潰
してしまっていた。ひしゃげたタバコを眺めてから、岡崎と琢磨を
見てため息をつく。涼しげで、どこか精悍な顔に暗い影が落ちたよ
うだった。

「確かにコレは、人間業じゃない、と思うわけだよ」

「野辺山ちゃん、それはやめてくれ。いくら同じようなミイラ死体
が出たからって！ きつとなにか二つの事件には共通点があって、
それで同じような変死体になったんだよ。犯人が幽霊だなんて、言
わんでくれよ？」

「そんなことを言い切ったりしないが、だとしたら何故、彼女は僕
について回るんだろう」

言いながら、野辺山の人差し指がまた背後に向けられた。岡崎は
再び足先からざらついた舌で嘗め回されたような感触を味わうこと
になった。

野辺山は背後をさした指で、今度はVサインをつくった。

「二つの理由を考えたんだ。一つは簡単、失くした目で、きつとも
う一度みたいものがある、つまり、『なんとかちゃん』という子供
さんだ」

「希実ちゃんだ」

「そう、その赤ちゃんだ。彼女は自分の子供がどこに行ったのか、
知らないだろう？」

岡崎は頷いていた。

確かに「佐々木希実」が事件のあと乳児院に預けられたことを、
麗子は知る由もないだろう。

思わず視線は何もいるはずのない野辺山の左肩の後へ向いていた。
そこに悄然と立つ佐々木麗子を思い浮かべる。

子供に会いたい、か。

その一言は、岡崎の胸を打った。岡崎にも子供が二人いる。妻とうまくいっていなくても、やはり子供は可愛い。それも乳児なら余計に可愛いはずだ。子供達が幼い頃は、よく飽きずに綾子と二人で顔を眺めていた。それだけで幸せな時間だった。

佐々木麗子が育児に必死だったのは、残されていた沢山の本を見ても明らかだ。子供に思いを残さない母親など、ごく一部を除いてこの世にいないと思っている。

なんとしても成仏させてやりたいな。

岡崎はボンヤリとそんなことを考えていた。

「それでもう一つの理由だが」

野辺山は、今度は指を一本にした。

そこで、大学の講義が終了するチャイムが鳴った。時計を見ると二時半だった。いつまでも野辺山教授の部屋で油を売っているわけにはいかない。東山芸能プロダクションを訪ねて、折られていたディスクの音楽を再生し、なんとか持ち込んだ人間の顔を思い出してもらわなくてはならない。

野辺山教授も宙を見上げていた。

「ああ、講義が始まるな……」

「なんだよ、もう一つの理由ってのは？」

野辺山は「ああ」と生返事をしながら立ち上がった。雑多な自分のデスクに向かい、ゴミと紙切れを掻き分けて一冊の本を手にする。岡崎からは、よれてしわになった白衣を羽織る野辺山の後姿が見えた。

「彼女はさ、岡サン。この事件の犯人を知っているわけだ」

「犯人？」

「そうさ……犯人。だって彼女は二人目だ。三人目が出たっておかしくない、そうだろう？」

ちょうど時を同じくして、部屋の外を甲高い笑い声を上げながら生徒が通り過ぎていった。そのあとに訪れた静寂は、じつに居心地

が悪かった。

馬鹿なことだ、と、岡崎も言いたかった。けれど、野辺山の言っていることを、馬鹿なことだと一笑に付すだけの理由が何もなくかった。

犯人がいる、つまり、ミイラ事件は連続殺人事件だということになる。だとしたら、動機は、殺害方法は、なんだというのか、どうすれば、わずか数日でミイラを作り上げることができるというのか。そう言っ、野辺山を攻め立てたい衝動にすら駆られる。

振り向いた野辺山の顔は笑っていなかった。横に引き締められた唇が、自らの言葉を否定するような言動を拒否しているようにさえ見える。

岡崎はじわりと湧き上がってくる恐怖を感じずにはいらなかった。

「冷たいことを言うようだけどね、岡サン」

野辺山がいやに淡々と言った。冷めた声だった。心臓が、ひやりと凍ったようだった。

手にした講義用の本を小脇に抱え、岡崎の横を通り過ぎざま、野辺山は言った。

「きつと次の被害者が出るよ。とんでもない奇病かもしれないし、とんでもない殺害方法があるのかもしれない。それよりも、彼女が僕に訴えようとしているモノは、とんでもない化け物かもしれないじゃないか……そんな気がするんだよ」

思わず岡崎は頷きそうになっていた。

野辺山は法医学教室の扉に手をかけたところで、思い出したように振り返った。

「とりあえずさ、岡サン。彼女を子供のところへ連れて行ってやりたいと思ってるから、それ、都合つけてもらえるかな」

「あ、ああ、そうだな」

「じゃ、講義、行ってくるよ。忙しいところ、悪かったね」

岡崎と琢磨も、野辺山を見送ってから、部屋をあとにした。

三段 接合…… 3

「どうします？ 岡崎さん」

琢磨が重い口を開いたのは、創英大学医学部の校舎の脇にある駐車場だった。キーのロックをはずしながら、車越しに岡崎を覗き込んでいる。琢磨は背が高いので、車から頭が出ているが、岡崎は半分隠れる形になっている。

返事をする気分ではなかった。

どうやら、野辺山教授はこの事件を霊現象か何かだと思っているようだ。

現実、佐々木麗子の遺体は科学的にも説明のつかない状態にある。身体は完全なミイラだが、脳だけは生々しく生き残っていた。加えて、野辺山に付きまとう麗子の幽霊。

岡崎は車に乗り込んでから、「早く出せ」と琢磨を急かした。

「どこへですか？ 一人めの犠牲者が出た、隣の県まで？」

「何を馬鹿なことやってんだ。東山芸能プロダクションに決まってる」

「あ、そうですね。まずはそっちですね」

琢磨の思わず早送りのボタンを押したくなる話し方に、岡崎は訳もなく少しばかりイラついた。

野辺山教授の部屋を出てから、ずっと佐々木麗子の顔がチラついて離れない。赤ん坊を抱いて微笑む写真の中の彼女ではない。眼球を失った恨めしそうな眼窩が二つ、真っ直ぐに岡崎を眺めている。昔、小学生だった頃、いつも理科室にぶら下がっていた骸骨の人形のように、ゆらりと宙に浮いている姿だ。

もしも野辺山が言うように、五月六日に発見された女子高生の死体が佐々木麗子と同じ状態だとすれば、これは連続殺人の可能性もある。もしくは、野辺山の言葉を借りれば奇病。こういう時には横のつながりの薄い警察の弱点が浮き彫りになる。押しかけて、事件

の捜査資料を閲覧するにも手続きが必要だ。

五月六日？

岡崎はなぜか日付が気になった。いつか、どこかで、似たような日付を聞いたような気がしたからだった。

「岡崎さん。東山芸能プロダクションは、確か仮事務所を借りてるんでしたよね」

「ああ、そうだ。間違えるなよ。放火現場に行ってたって、無意味だからな」

「それにしても、驚きました。法医学でお世話になってる教授先生に靈感がおりだなんて。どうりであの部屋、寒いはずですよ」

岡崎は車のシートにもたれていた背を起こした。

「寒かったのか？ お前」

「ええ、なんだか鳥肌がたって仕方なかったんですよ。岡崎さんに教えてもらって、ちよつと納得しました」

運転しながら微笑む琢磨の顔が目に入って、岡崎は少しだけ嫉妬した。何も感じない自分のほうがおかしいと、言われた気がしたからだ。

*

東山芸能プロダクションの仮事務所は放火事件のあった雑居ビルのすぐ近くだった。

駅にも程近い雑居ビルは芸能活動の拠点としても絶好の立地条件だったらしい。東山芸能プロダクションの経営そのものには、たいして影響がなかったらしく、岡崎達が訪問した今日も、来客もあり、電話は鳴りっぱなしで、五人いる社員のうち三人は外に出て不在だった。

さんざん待たされたあげく、申し訳なさそうにお茶を運んできたのは二十歳そこそこに見える若いアルバイトだった。

まるで若い男性雑誌の表紙を飾っていそうなお洒落な服を着てい

るのに、顔は全く十人並みで、あまりのアンバランスさに呆れるのを通り越して、気の毒にすらなる風体だった。

「すみませえん。もうすぐ帰ってくると思っただけどお」

東山芸能プロダクションの中で、特に音楽芸能を担当している社員が不在であることを謝罪しているらしかった。

岡崎は思わず眉がよったのを自覚した。「敬語すら使えないのか、こいつは」と顔にはつきりと出たに違いない。岡崎は思わず、舌打ちしていた。礼儀を知らない若者に、つい腹が立ったが、ここで怒っても仕方ない。自分に言い聞かせて、何も言わずに出されたお茶を手にした。それがいけなかった。お茶は薄い上に冷めていた。白湯に薄い黄色の色をつけたのと同じだった。

腰をあげかけた岡崎に、隣から慌てて琢磨が声をかけてきた。

「岡崎さん！ デ、ディスクを預けていったん戻りますか？」

「そうだな、おい、君！」

怒りに任せた鋭い声で、踵を返していた若者を呼び止めた。彼が振り向くと、腰の辺りに無意味にぶら下がっている何本ものチェーンがジャラリと音をたてた。

振り向いた顔は、にこやかに微笑んでいた。

岡崎は毒気を抜かれて言葉を失っていた。彼に頼み事をしても無駄に終わるだろうと思いつつも、今日は出直す以外にないと腹を括った。ディスクを若者に渡し、この中に記録されている音楽を持ち込んだ人間を思い出してもらえよう、他の社員へ伝言を依頼した。もしくは、持ち込むような人間の中に怪しい者が混じっていないか、たかとも思い出してもらえと有り難いと伝えた。

「怪しいヤツ？」

若者はディスクを手にして、岡崎の顔を真つ直ぐ見上げてきた。何かを思い出したような顔だった。唇がもの言いたげに開きかける。

「何か気付いたことがあったら、なんでもいいから教えてもらえないかな」

「はあ……あれ、いつだったかなあ。けっこう最近。態度の悪い奴がいたよ。髪がさ、オレンジ色で、目付きが悪いんだ。挨拶もしねえでドアを叩きつけて帰ったから、俺、よく覚えてんだ。礼儀のねえヤツだなあって……」

若者は面倒そうに首をかしげて後頭部を掻いた。思わず畳み掛けるように言い返したい衝動を抑えて、岡崎は声を落とした。

「いつごろ分かる？」

「たぶん、火事が出るちよつと前だったと思うんだけど、何時って言われても……」

岡崎は若者の肩に手を乗せた。

「顔、覚えてるんだよね」

若者が怯えたように肯いた。

*

平沢幹夫は、立っていた。

電柱と背後の壁に身を寄せて、ひっそりとたたずんでいた。

立ち並ぶビルや家屋の濃い闇にまぎれ、通り過ぎる者は誰も彼に気付かない。影の一部に同化してしまっただかのように、まるで存在感というものが感じられなかった。

大体、大通りの抜け道であるこの路地は、深夜になると人通りがなくなる。

街灯はあるが、通る人間の顔を判別してくれるほど明るいわけではない。

幹夫は、頭を覆うヘッドホンに手を添えた。手は艶を失い乾燥していた。オレンジ色の髪は根元が白くなり、櫛も通さず乱れきっている。

ただ、時折リズムを取るように頭や体が揺れていた。

落ち窪んだ眼窩におさまった瞳は、痩せこけて乾燥した肌にはそぐわないほど、異様に煌々と潤って見える。爛々と輝く目は、闇で

獲物を捕らえた野生獣のように、じつと一点を見つめていた。

「ば〜か。俺の素晴らしさを、わからねえヤツは、ば〜かだ」

声までもが艶を失い、カラオケで歌いすぎて喉を痛めたように、しわがれていた。

幹夫は羽織っていたジャケットのポケットに手を入れた。そこに忍ばせた缶コーヒーほどの大きさのビンをしつかりと握り締める。

ゆるゆると移動した視線の先には、二人の警官が立っていた。入口が燃えて煤けた雑居ビルの玄関だった。

彼らは眠そうだった。時折、大きなあくびをしている。それでも居住まいを正し、注意深く辺りの様子を伺っていた。警官たちの隣には一台のパトカーが止まっており、中にも二人の人間が座っているのがみえる。

幹夫がポケットからビンを取り出して右手で握り締めた。筋だった腕には、あまりにも重そうなビンだった。腕は小さく痙攣していた。

「行くのかえ？」

幹夫の耳元で、深夜の暗闇に溶け込むかのような囁き声がした。

風が耳元で、ごとと音をたてたのと似ている。

電柱の影に立つ幹夫の周りには誰もいない。

喉の奥で堪えるように幹夫は笑った。

その笑い声にしわがれた声が重なる。音楽でいえば、ユニゾンのように。幹夫の声としわがれた声が同じ高低で含み笑いを続けた。

「面白い獲物じゃたよ、主は……楽しませてもらうた」

闇の深遠から、筋のたった腕が伸びてきた。すつと現れた枯れ木のような手が、幹夫のこけた頬を愛おしそうになる。

幹夫は笑い続けていた。

狂気に満ちた目は、真っ直ぐ向かいに立つビルの看板を睨み上げている。

東山芸能プロダクション。

「燃やしてやる」

果てしなく続く闇を背後に背負ったまま、幹夫は足を一步踏み出した。

「俺の音楽を理解しないヤツは、地獄に落ちればいいんだ」

同じ台詞を一言一句間違えずに、ひたすら繰り返した。お経を唱えるかのように、低く呟き続ける。

幹夫の歩みは、次の一步を踏み出したところで止まった。止まったのではなく、足が出なかったというほうが正しい。

踏み出したもう一步は、関節が枯れ枝を真つ二つにしたのと同じように膝からくず折れた。片膝をついた姿勢で、なおも前に進もうとする。もう一方の膝をつき、右手にピンを握り締めたまま、次に右肘、右肩をつき、ついに電柱のそばで横になった。左手は吸い付いたように、ヘッドホンをあてた耳元に添えられたままだった。

「今日で、この苦しみは終わりじゃよ」

横になった幹夫のそばに、生暖かい風が吹いた。蠟燭の火がわずかに揺れるほどの風だ。風に乗って落ちてきたのは、黒い影だった。右の指は、しっかりとピンに巻きついていてる。

幹夫が大きく目を見開いた。

「俺の音楽を理解しないヤツは、地獄に落ちればいいんだ」

声は徐々に、闇に溶け込んでいった。言い終わって息を吐き出したまま、幹夫の胸郭は動きを止めた。全身が、小刻みに痙攣し始める。

幹夫のそばに降り立った影が、人の形に集約し始めた。

老婆が正座していた。膝の上に両の手を添え、薄墨色の着物を身にまとい、銀鼠色の長い髪が肩にかかっている。

老婆は暗紫色にかわった薄い唇に笑みをたたえたと、そっと片手を幹夫の頭に添えた。

「終わりじゃよ……ようした……」

四の段 寄寓…… 1

香坂義夫は天を仰いだ。

そこに星空はない。眩く瞬く色とりどりのネオンが、本来あるべき自然の輝きを漆黒の闇に押し込んでいく。

あたりは煌びやかなのに、どこか殺伐とした景色だった。

今の香坂にとっては、ネオンに煌々と照らし出される人間達のほうが、ビルの谷間に巣くう闇よりも、よほど魑魅魍魎に見えた。

「化け物どもに飲ませる酒なんか、ねえぞお……」

往きすぎる楽しそうな若者たちを見て小さく呟く。堂々と言えるほど、度胸は据わっていない。なんだか、ひどく拗けた気分だった。真っ直ぐ足を運んでいるはずなのに、時おり人とぶつかってしまった。その度に片手を軽く挙げて、詫びを入れる。香坂にとっては、身体が左右に揺れているというより、度の合わない眼鏡を無理にかけて歩かされているようだった。

火照った身体に、あたりの微風がちょうどいい。

光山エージェンシーの専務にかなり飲まされたことは覚えていた。何をどれだけ飲んだのかは分からない。ビールも焼酎も、おぼろげな記憶ではウイスキーも空けたはずだった。

取引先だと、なんでも我慢しなけりやならないのか……

香坂の二度目の呟きも、夜の街に蔓延った若者たちの叫び声に掻き消されていく。

専務の森崎は無類の酒好きだった。彼の酒に付き合える者だけが契約を取れるなどという噂が、まことしやかに囁かれるほどだ。

香坂は正直なところ、営業という仕事に嫌気がさしていた。飛躍的な発展を遂げたIT産業は、香坂のような営業社員の地道な努力にも支えられている。契約だけでなくメンテナンスやクレームにまで付き合っていかなばならない。一件契約を取れば会社の業績アップにつながるが、言うほど容易いことではない。自身の販売成績は

即、ボーナスに跳ね返ってくる。どんなに頑張っても、家に帰ると給料が足りないと言にばやかれ、押し掛かる家のローンは、利息ばかりで一向に減ったためしがない。子供はどんどん大きくなり、金がかかるばかりだ。

「何のために、こんな事を我慢しなくちゃならないんだ……」

香坂はおくびと共に毒づいて、足元に転がっていた小さな石を蹴り上げた。

石はビルの片隅に転がっていく。その行方を確かめもせず、香坂はまた頼りない足を前に運んでいった。

大通りに出れば、タクシーの一台くらい拾えるだろう。今は思考回路が麻痺していて、郊外まで乗るタクシー代のこと頭になかった。

香坂が通り過ぎたあと。

転がった石を、手にするものがいた。

枯れ枝のように細く筋ばかりの手を伸ばして石を拾う。少し前にかがんだので、乱れた銀鼠色の髪が肩から滑り落ちてきた。

老婆だった。

目はしっかり閉じている。少し、落ち窪んで見えた。

老婆は拾った石を握り締めて、口元を綻ばせた。

四の段 寄寓…… 2

岡崎は夢の中でまで妻の綾子と喧嘩していた。

そこでの喧嘩は他愛もないことだったように思うが、記憶には残っていない。

身体が痛くて目が覚めると、ベッドではなくソファアーの上だった。目の前の小さなテーブルには、ビールの缶が二つ転がっている。カーテンからは、白々と夜が明けはじめたことを示す淡い光が差し込んでいた。

空き缶を見ていると、記憶がビデオの巻き戻しスイッチを入れたように戻ってきた。原因は紛れもなく昨晚の夫婦喧嘩だ。気まずくなつてビールを片手にリビングでついうたた寝をしてしまったのだ。きつかけはいつもの通り、娘の進路のことだ。高校三年生の娘が遠方の有名私大を受験したいと言い出して、下宿を許すか許さないかで、妻・綾子と喧嘩になった。

「あなたってどうしてそう物分りが悪いのよ！ 頑固者！ 融通がきかないっいたらありやしない。あなたは要するに、可愛い娘をそばにおいておきたいだけじゃないの」

綾子のとどめに、岡崎の怒りの沸点がいとも簡単に突破された。

「だから、どこにそんな金があるって言うんだよ、お前は！ 下宿なんかさせて、事件に巻き込まれでもしたら、後悔先にたちやしないんだよ」

「わけの分かんないこと言わないでよ。私だって、頑張つて働いてるじゃない。もう知らないわよ、話にもなりやしない！」

捨て台詞をはいた綾子の頭には角が生え、岡崎に少し似た四角い顔は紅潮し、目はつりあがって、さながら夜叉のごとき様だった。

お互いに引かないものだから、折り合いのつけようがない。

こめかみが痛んだ。

ひどく痛む頭に追い討ちをかけるように、突然、甲高い電話のベ

ルが鳴り響く。

テーブルに放置されていた携帯電話の振動で、空き缶が転がっていった。

岡崎は仕方なしに体を起こして、携帯電話を手にした。

「寝ているところ、悪いな岡サン。ミイラ死体が、また出たんだ」
酔いを一気に醒ます久保の言葉が電話口から飛び出した。

*

現場は連続放火事件のあった雑居ビルの前だった。

周囲は早朝にもかかわらず、騒々しい。遺体の周囲には青いシートが張り巡らされていて、外からは覗き見ることができないが、噂を聞きつけた野次馬達がずっと騒いでいた。

街灯のほとんどない裏道をはさんだ向かい側、電柱のそばで、遺体は発見された。発見者は、雑居ビルの警備に当たっていた警察官である。

夜が明け始めてだんだんと視界がはつきりしてくると、電柱脇に捨てられていたゴミのような塊が、人間の姿をしていることが分かってきたらしい。

遺体が佐々木麗子の変死事件と同じあることは、誰の目にも明らかだった。検視官が「短い人生で、二度もお目見えするとは思ってもしなかった」と深いため息をつく。

岡崎も琢磨も捜査員たちも、無言で検視官の言葉に肯くほかなかった。

干からびた肌は土色の粘土をこねて乾燥したものに酷似している。羽織っていた黒い半袖の上着は薄汚れ、髪の毛は使い古した毛筆の筆のようにボサボサで、白とも銀ともつかない色にオレンジが混じっている。大きく見開かれた瞳だけが、たった今まで目の前の風景を写し取っていたかのように、瑞々しく潤っていた。

そして驚いたことに遺体には耳がなかった。抉り取られたように、

両耳が失われていたのだ。

雑居ビル放火事件の捜査本部は騒然としていた。ミイラ死体の手には、しっかりと火炎瓶が握られていたからだ。昨夜は放火がなかった。雑居ビルの連続放火犯が、ミイラ死体の人物である可能性も浮上している。

「こりゃあ、一体どういうことだ」

岡崎も遺体の脇にかがみこんで、エジプト展に出展されているミイラとそっくりな物体を眺めやった。

佐々木麗子の遺体と同じだった。違うところといえば、無くなっているのが、耳か、目か、それだけのことだ。

「これで、事件を闇に葬れなくなりましたよね」

琢磨が岡崎の隣に立って呟いた。

「ばか。滅多なこと言っんじゃねえよ」

素直に思ったことを口に出す後輩をたしなめてはみたが、事実には違いない。

佐々木麗子の遺体も、おそらくはその前に発見された女子高生も、一般人の目には触れてはいない。隠そうと思えば遺体の状況を伏せることができる。事実、警察は詳細な発表を控え、新聞報道やマスコミも動いていない。

「岡崎さん、ポケットにこんなものが」

検視官が遺体の上着のポケットから、マッチを取り出した。

手袋をはめなおして、岡崎はマッチを受け取る。

飲み屋・いちべえ、と店の名前が書き記されていた。

「他に遺留品は？」

岡崎の質問に、近くにいた鑑識課の者も首を横に振る。

難航するかと思われたミイラ死体の身元確認も、遺留品が残っていたので案外簡単に判明することになった。マッチに記されていた「いちべえ」の店長に「最近みなくなった客」について捜査員が聞いたところ、客ではなく店員が一人、無断欠勤でクビになっているらしい。

名前を平沢幹夫。

バンドを組んでおり、友人たちによれば、ここ一月の間、アパートにこもりきりで会ってくれなかったという。

遺体の頭蓋骨の形から画像を起こし、明日にでも店の店長と友人、東山芸能プロダクションの人間を呼んで身元を確認することになっていた。

岡崎達も身元判明の連絡を受け、一旦、土岐河警察署に戻ることにした。

デスクに座ると未完成の調書が岡崎を歓迎した。けれど白紙の用紙の前に、浮かんでくるのはミイラ死体の佐々木麗子の顔だった。彼女はまだ、野辺山教授のそばにいるのか。何故、現世にとどまっているのか。

とにかく、考えなければならぬことが多すぎる。

娘の進路と妻の機嫌のとり方。再び現れたミイラ死体。溜まった調書。

「岡崎さん？ お・か・ざ・き・さん！」

向かいの机に座っている琢磨から大声で呼ばれて、岡崎は慌てて書類を床に撒いてしまうところだった。

「なんだ、てめー」

「あの……今日、行くんですよね」

「今日？」

どうやら正常な思考回路というものに、通電していなかったらしい。

岡崎はしまったという風に、手のひらを額に当てた。煩雑な机にまぎれたカレンダーを眺めやる。今日は、六月二十六日。野辺山教授とともに、佐々木麗子を伴って乳児院に預けられている「希実」を尋ねる予定だったことを思い出す。

岡崎は腕時計をみた。

時間は三時を回ったところだった。ミイラ遺体は現在、創英医科大学の野辺山のところに司法解剖に回っている。早急に搬送された

が、終わったかどうかは分からない。

岡崎は内ポケットの携帯電話を取り出すと、メールがないのを確認した。気だるそうに片肘を机にのせて、後輩の顔を見上げる。

「解剖、終わったと思うか？」

「連絡がありませんか？」

岡崎は頷いて、そのまま机で頭を抱え込んだ。わずかに広くなった額から髪を掻き揚げて、頭を掻く。

迷っていることもあった。係長の久保に、野辺山から聞いた他県でのミイラ死体のことを話すべきかどうかである。

話してしまうのなら今日だ。このまま外に出てしまう前に言っておかなければ、タイミングが悪くなる。

関連があるのかどうか、確信はない。けれど、同じような遺体であることは、同じ法医学者同士の見解として一致しているようであった。

話せば、合同捜査本部がおかれることになるかもしれない。否、すでに、警視庁から通達が入っているかもしれない。

けれども、決心はつかなかった。久保に話してしまえば、事件がさらに大きくなる。オカルトじみた事件をどこまで本署が取り上げてくれるのかも不安だった。

「待ち合わせは……何処だった？」

琢磨は呆れたように、内ポケットから手帳を取り出すと、しおり代わりの紐をくいと持ち上げて内容を確認した。

「ハイ、えっと、16時、土岐河駅前、となってますが」

岡崎はもう一度時計を確認して、携帯電話を手にした。

「出るぞ」

琢磨が頷く。

とにかく、一つずつ解決して問題を減らすことが先決だ。そう考えて、岡崎は腰をあげた。

野辺山との約束までもう少し時間がある。

佐々木麗子の娘がいる瀬地矢愛育園は、最寄りの土岐河駅から二

駅の所にある。

麗子が子供に会いさえすれば、納得して成仏する。これで肩の荷が一つおりるわけだ。野辺山教授がとり憑かれているという問題が一つ解決して、次に連続ミイラ死体の搜索に専念できる。

土岐河警察署を出たところで、野辺山と連絡がついた。予定通り、麗子と希実の再会が叶うことになった。

四の段 寄寓…… 3

瀬地矢愛育園は、閑静な住宅街の奥にあった。

夕刻であつたので、小学校に通う生徒達も帰宅し、園庭は賑やかだった。歓声をあげながらサッカーに興じる男の子達、砂場でおままごとに熱中する女の子、縄跳びの練習、思い思いの時間を過ごしている。表情は生き生きとしていて、とても親がいなくて淋しい想いをしているなどとは微塵も感じさせない。

岡崎も思わず顔が綻んだ。

「いいねえ、子供は」

珍しくスーツを着込みネクタイを締めた野辺山が、しみじみと言った。白衣を脱いだ野辺山は、会社の役員か、管理職のような雰囲気だった。

「ああいう非現実的な遺体を解剖したあとじゃ、これは堪らなく癒されるよ」

「嫌な言い方じゃないか、野辺山ちゃん」

眉を寄せた岡崎の肩に野辺山が手をのせた。

「それより、野辺山ちゃん、佐々木麗子さんは？」

「さあ、急に電源が入ってアッチと繋がるようだから、今は分からないね」

岡崎はかえす言葉がなくて、さらに深く眉を寄せて頬を人差し指で掻いた。佐々木麗子の成仏も目的ではあつたが、岡崎はあの赤ん坊が、実はとても気になっていた。

父親の佐々木陽司はとりつくしまもなく赤ん坊を手放した。せつかく生まれてきたというのに、母親は変死し、父親には捨てられる。

佐々木麗子の、生きていた頃の顔写真が浮かんで、岡崎の心は痛んだ。

いつまでも門のところに不審者よろしく立っているわけにもいか

ないので気を取り直し、琢磨と共に入口にあるインターホンを押す。すぐに園長が出てきた。品のいい初老の婦人だった。

念入りに岡崎達の身元を確認すると、園長は「今さら何をしに来たのだ」と言わんばかりに小難しい顔になった。まさかこちらも「母親の霊」を連れて来たなどとは言える訳がない。

こういう時の為に、ちゃんと口実は用意してきている。遠慮なく警察手帳を提示して、国家権力を振りかざすことになっていた。捜査上に必要な事ができたとも言え、すんなり園に入れてくれるだろうと踏んでいた。

琢磨は用意してきた台詞を詰まることなく、丁寧かつ官僚的に言った。ここは琢磨の出番だ。のんびりした穏やかそうな琢磨の口調には偉ぶったところがないし、決められた台詞をきちんとこなせる真面目さももっている。岡崎ではつい要らぬ事まで言ってしまう、相手が聞き入れないと知ると必ず短気を出すだろう、とは野辺山の意見だった。

「実は、あの時赤ん坊が包まれていたおくるみをお借りしたいのです。その繊維が捜査に必要です」

「捜査？」

「ハイ、申し訳ないのですが、これ以上は捜査上の秘密ですのでお話できません」

園長はさらに眉をひそめた。

いつもこんな顔をしていては子供に嫌われるのではないかと、岡崎が余計な心配をしていると、園長は素直に「どうぞ」とようやく中へ通してくれた。

応接間でしばらく待たされたが、一人の保育師と共に問題の赤ん坊がやってきた。

岡崎は少々驚いていた。まさかすぐに会えるとは考えていなかったからだ。

おくるみを希望したので、てっきり現物だけが運ばれてくると思っていた。後で赤ん坊が元気かどうか気になるので会ってみたいと、

ついでを装ってお願いする予定でいたのである。

赤ん坊は岡崎たち三人の向かい側に座らされた。保育師が少し腰に手を添えているが、カエル型に足を開いて膝の上に手をのせ、しっかり座っている。

「七ヶ月になりましたのよ、希実ちゃん」

園長も「希実ちゃん」をはさんで腰を下ろす。

佐々木麗子の子供「希実」はきよとした表情だった。人見知りをしている様子はまだなかった。薄いピンクのリボンつきの服に、なぜか手に、薄汚れた同じピンク色のバスタオルのようなものをつかり握っている。

とても元気そうだった。頬は艶々していたし、黒目が大きな瞳はくるくると良く動く。少しぼつちやりしているという表現が似合うほどだった。ウインナソーセージのような腕と足。手首も足首も関節は皮膚に埋もれていて、線が入ったように見えている。

希実を見下ろす園長は、なぜか表情を曇らせた。小さくため息をつき、まるで苦手な食べ物でも目の前にしたように、何かを言いかけては止め、また口を開いた。

「いやあ、元気そうで何よりですな。我々も、気になっていたのですよ」

岡崎はつい、その場の居心地の悪さに何か言わなくてはと思い立っていた。なんと芸のない一言だったと、あとになって自分で後悔したほどだ。

野辺山も、じっと赤ん坊を見ている。

琢磨が小さな声で野辺山教授に霊の存在を問うたが、首を横に振るだけだった。

「あの……この子、少し問題があるんですよ」

園長は意を決して言葉を発したようだった。深いため息がそのあとに続く。

「本当なら、近日中に発達心理の先生とカウンセラーの方と共に、そちらに伺おうかという所までできていたのですが……」

園長がそこまで言った時、事務員がお茶を運んできた。

希実はその人間をじっと見ていた。

岡崎からは事務員の顔を見ることができなかったが、お茶を置いた後、わざわざ希実の方を振り返ったのだから笑いかけたりしたのだろう。

しかし、希実の表情には変化がない。

事務員が去ったあと、希実は視線を移してきた。

隣に座る、園長、保育師、前に座る岡崎、琢磨、野辺山の順に、一人につき数秒ずつ、大きな瞳をぎょろりと動かし、まるで値踏みでもするかのように大人びて、それでいて冷めた目で眺めていく。心なしか上目遣いな視線は、希実が七ヶ月の赤ん坊であることを忘れさせた。

岡崎は目があつた瞬間、反射的にぎこちなく笑いかけた。娘の幼い頃と重なって、目尻がだらしなく下がったことも自覚していた。妙な違和感だった。

七ヶ月の子供とは思えない、目の輝き。赤ん坊特有の、無垢、というか無邪気な輝きがないように思える。

その時、パタン、と扉が閉まり、岡崎は耳元で心臓の音を聞いて我にかえった。

「それですね」

園長が咳払いをひとつした。

「おくるみはお貸しできないと思います」

そう言つて、希実の手に握られた、汚れたピンク色のバスタオルを指差した。

「私達は、片時も離さないものですから、きっと母親の匂いをするのではないかと思つて、汚れてきたのですが持たせているのです」
「なるほど、そのおくるみはライナスの毛布というわけですね」

野辺山がスポーツマンらしい爽やかで人懐っこい笑みを見せた。園長もつられて微笑み返す。

琢磨と岡崎は顔を見合わせていたが、そのあとすぐに野辺山が、

「ライナスの毛布というのはね、漫画のピーナッツ、スヌーピーといえは知ってるかな。その友達に毛布を引きずっているキャラクターがいるでしょ？　それがライナスという名前なんだよ。幼い頃はね、何かのこだわりでずつと手にしていると安心するもの、っていうのがあるんだよ、例えば、積み木でも車でも、おしゃぶりでもいいわけだ」と解説を加えてくれた。

「ああ、そういえば、うちの娘はウサギのぬいぐるみだったな。真っ黒になっても洗わせないと、よく家内がばやいていたよ」

それでおくるみだけでなく、希実まで一緒に現れたという訳だったのだ。岡崎は納得するとともに、幼い娘達と過ごした懐かしい光景が脳裏に甦ってきた。

ピンクのウサギの耳を握り締めた手の親指を器用に口に含んでいた娘。そういえば、下の娘の癖はなんだったであろうか。

けれど、そんな岡崎の回想はすぐに園長の言葉で消し去られた。「この子、閉所恐怖症じゃないかと、先生はおっしゃるんですよ。ですからその原因が、あの……この子の母親の死因に関係があるのかと、それで伺おうと思っていたのです」

岡崎は園長の言っていることがすぐに理解できなくて、あごを突き出したまま小首を傾げた。

七ヶ月の子供が、閉所恐怖症？

「とにかく、この子はサークルの中に決して入ろうとしません。周りを大人に囲まれるだけでも、狂ったように泣き叫ぶのです。真っ暗闇もダメなようでした。いつも夜は電気を点けたまま別室で眠っています」

「ほお、それは珍しいケースだ」

野辺山はまるでマウスでも観察するように希実を見ている。

「岡サン、彼女は暗闇で発見されたんだろ？」

「暗闇、ってもね……真っ暗じゃあなかったよ。まあ確かに、不可解ではあったけど……狭い所に入っていたということもありませんし、状況的には参考になるようなことはなかったと思いますが」

「そうですか」

園長は落胆したように小さな声で返答した。

佐々木麗子がミイラで発見されたのに、希実が満足そうに眠っていたことは、非現実的な現象だった。やせ細ることもなく希実は生きのび、こうして愛育園に預けられている。しかし急激に母親がミイラ化して死亡したと仮定すれば、納得できることではある。今のところは、野辺山教授の解剖結果から、そう結論付けられていた。

状況的にも閉所恐怖症に陥るような環境であつたとは言い難い。

カーテンは閉められていたし、部屋は蒸し暑かった。それでも発見された時は暗いといつても薄明かりは差し込んでいたはずだ。とりたてて、サークルの中に入っていたということもない。希実は和室に敷かれた布団に佐々木麗子と並んで寝ていたのだ。

「では、原因はそれ以前にあるのかもしれませんが。お父さんにも伺つてみます。食も細いですし、こちらとしても、問題が多いとお預かりできませんので、別の施設を考えている所でしたの」

「はあ……」

岡崎にはそう答えるほかなかった。

「食が、細いのですか、その子は？」

「ええ、そうは見えませんがね」

野辺山の質問に、園長は愛想笑いをかえした。

希実は血色も肉付きもいい。小食でも元気な子供はいるので、岡崎としてはこの時点ではあまり園長の言葉を重要視していなかった。そのあと、口実だったおくるみの繊維をこっそり保育師に取ってもらい、何とか体裁を整えて、差しさわりのない会話をしたあと帰ることにした。

野辺山が腰を浮かし、岡崎も再度、園長に礼を言い、希実を見た。希実は一瞬、一点を凝視していた。

視線の先には琢磨がいた。どうやら岡崎が園長と雑談をしている間、琢磨自身は何か希実を笑わせようとしていたらしい。小首を傾げたり、しきりに瞬きしてみたり、大きく目を見開いて「ばあ」

と声なく言ってみたりと、かなりの努力をしていたようだった。

何をして、希実が決して笑わない。

じっと上目遣いで琢磨のことを見ている。

岡崎も思わず気の毒になって、琢磨を突いてやめさせた。照れたような笑いを見せる琢磨に、岡崎も吹き出しそうになりながら視線を正面に戻した時だった。

希実が笑っていた。

岡崎は思わず身震いしていた。

それは七ヶ月の赤ん坊の微笑ではなかった。

上目遣いのまま、両方の口角を持ち上げただけの笑みだった。にたり、という表現が、まさしく似合う。

映画などで蛇の妖怪が獲物に狙いを定めて満悦したように笑う、あの薄ら笑いにそっくりだった。

四の段 寄寓…… 4

六月二十六日。

香坂はこの日から会社に出勤しなくなった。

無理して購入した郊外の高級マンションには、香坂専用の書斎がある。四畳半の狭い空間だったが、彼にとっては贅沢で自由な空間であった。

子供に仕事の邪魔をされないように、内装する時に予め鍵をつけてある。

香坂は書斎にこもると鍵をかけた。

机の上を占拠していたパソコンと几帳面にファイルされた書類を乱暴に隅に押しやると、買ってきたばかりの小箱を積み上げる。ざっと二十箱はある。

ちゃんと机と椅子が設置してあるが見向きもせず、香坂は床の上に胡坐をかいた。

頬を緩ませ、子供のように目を輝かせながら、箱のひとつを手にとった。

車のプラモデルだった。

香坂は子供の頃から細かいものを組み立てるのが好きだった。時間を忘れて熱中し、何度、母親に叱られたかもしれない。怒りながらも、完成させると決まって母親は根気のある子供だと褒めてくれた。褒めて、頭を撫でてくれた。子供だった頃、香坂の心はそれだけで満たされた。

箱を開けると、プラスチックの枠に細かなパーツがびっしりと散りばめられていた。元となる車の本体を取り出し、箱の写真と見比べる。色をつけるためのカラーのビンを一つ一つ手にとって、完成図をイメージしていった。

自然と心が和んできた。

仕事に追われ、ローンに追われ、嫌な付き合いをしていたことも

すべて忘れていた。営業成績を上げて、母親のように香坂自身を褒め称えてもらえることはない。上司の決まり文句はいつも「やれば出来るじゃないか」であった。

パーツの一つを手にして、設計図どおりに組み立てていく。作業が細かいので、香坂はうつむき加減で、丁寧に一つずつ、車のプラモデルを完成させていった。

部屋の外では、無断欠勤する夫をなじる妻の声がしばしの間、響いていた。

が、それも、しばらくの辛抱だった。

鍵がかかった部屋へは、妻は入っては来ない。そのうち静かになって、香坂は作業に熱中することができた。

郊外の日中は騒音がない。

子供たちは学校へ行き、家に残る女たちの大半はパートか買い物、友達と食事やエステに出かける。

書斎は静かだった。

どこからともなく、時を刻む秒針の音だけが響いてきた。

無論、香坂には何も聞こえていなかった。左腕にはめられた腕時計が、時を刻んでいく。規則的に、囁くように、確実に時を刻んでいた。

赤い、血のような色をしたバンドの腕時計であった。まるで手首から多量の出血をしたあとで血糊が乾き、どす黒くまとわりついていくかのようだ。

その時計が時を刻んでいる。

香坂は、時を忘れて没頭した。

日が落ちて、何度、妻が呼びにきても一切返事をせずに、食事すらとることはなかった。

部屋を闇が包み込んでいく。香坂は仕方無しに、机の上のライトを点灯した。ただひたすら、眠ることもなく作業を続けた。

机の電燈が狭い部屋に香坂の影を作る。

薄かった影が、不意に墨を混ぜ込んだかのように澱んで闇を深く

した。

そこから、人影が沸き立った。

影は香坂にまわり憑くように揺らぎ、やがて、一人の人間の形を成する。

老婆だ。

闇に同化してしまうのではないかと思うほどの薄墨色の着物をまとい、枯れ枝のような腕を膝にのせて正座している。髪は艶を失って縮れ、根元から白くなって銀鼠色になっている。頬はこけ、目が落ち窪み濃い影を落としていた。

薄い唇がわずかばかり持ち上がり、あるかないか判然としない笑みで老婆の顔に張り付いた。

「楽しかろう？」

どこからか声が湧き出した。老婆の口元は動いていない。しわがれた声だった。ラジオの選局を誤ってノイズが入ったままのような声だ。思わず背筋がむず痒くなる。

「楽しむがよい。かわりに、いただいていくぞえ……」

老婆の声に反応するかのように、香坂は小さく痙攣した。寒気を感じて、ブルリと震えるくらいの、わずかな痙攣ではあった。

骨に一枚皮を巻いただけのような腕が、香坂の背に触れる。

再び香坂が痙攣した。

しかし、顔は満足げに笑っている。手は、変わらずに車を作り続けていた。

五の段 鬼憑…… 1

ミイラ死体捜査は深い迷宮に入り込もうとしていた。

解剖の結果、雑居ビル付近で見付かった新たなミイラ死体は佐々木麗子の遺体と同じ状況であることが確認され、ついに連続変死事件として取り上げられることになった。

結局、岡崎は久保課長に女子高生変死事件の報告をしなかったのだが、言うか言うまいかという悩みは、杞憂に終わったことになる。合同捜査本部が土岐河警察署に置かれたのは、ビルの脇で平沢幹夫と見られる人物の遺体が発見されて一週間後のことだった。DNA鑑定、頭蓋骨から起こした本人画像と知人達の証言も一致した。知人の中には、東山芸能プロダクションのプロデューサーやアルバイトの若者も含まれている。

岡崎は部屋の前にぶら下がった捜査本部の垂れ幕をため息まじりに眺めて、人差し指で頬をかいた。報告しようがしまいが、三件連続で同じ死体が発見されれば、いくら横のつながりが薄い警察とはいえ放置しておくわけにはいかない。

だんだんと話がややこしくなってきたなあ。

思わず呟きそうになるのを寸でのところで堪えて自分のデスクに戻った。

平沢幹夫の遺体が一般道で発見されたことで、世間の注目も集まり始めていた。無論、変死事件としてではなく、怪奇現象としての注目であった。けれど警察までもが世間の言うように、怪奇現象で事件を済ませるわけにはいかない。

雑居ビル放火事件のほうは被疑者死亡という形で送検される。これも、変死事件とどう関わっていくのか、関連性は全く分かっていない。

また、被害者達の接点や共通点も一切なかった。通り魔殺人的要素を取りざたされなくもなかったが、もしもそう

だとすれば、なんと手の込んだ無差別殺人であつたろうか。警察としては、まず被害者達の交友関係などを洗い出すことになった。

岡崎は佐々木麗子の担当だ。

佐々木麗子は昭和六十一年生まれ。出身は北海道だった。

佐々木陽司の話と数少ない麗子の友人によれば、麗子の父親は酒と賭け事に溺れる典型的な暴力夫で、借金を残して失踪しているらしい。残された麗子の母親が昼夜を問わずに働いていたが、癌に侵されて早世。以後、祖母に育てられてた。その祖母も高校二年の時に脳出血で死亡。高校卒業後、山岡製作所に事務員として就職し、そこで夫の陽司と知り合った。

麗子は「子供は温かい家庭でしっかり育てたいわ」と友人に常々漏らしていたと言う。

岡崎は調書を下敷きにして机に肘をついて顎に添え、どこを見るときもなく宙を凝視していた。考えることといえば、ミイラ死体で発見された麗子と、最後に会った希実の表情だった。

部屋に積まれていたたくさんの育児書。帰らない夫。それでも子供だけは懸命に育てていたのかもしれない。だったら、希実のことが心残りだったはずだ。瀬地矢愛育園に、どうして麗子は現れなかったのか。

そして、希実。

岡崎は、娘達の赤ん坊の頃を思い出そうとしていた。

七ヶ月といえば、確か下の娘は立っていたように思う。につこりと微笑む笑顔がみたくて、綾子は何かしら働きかけて、娘を笑わせていた。

何より心に引っかかるのは、閉所恐怖症という言葉だった。

「岡サン、どうしたの、ぼんやりして」

久保が大福に黒ゴマをつけたような顔になって岡崎を覗き込んできた。

「いえ、何も……」

「何も、つて顔じゃないね」

「佐々木麗子はなんで死んだのかな、と思いましてね」

久保は首を傾げてきた。

「そりゃあ岡サン。犯人がいるからじゃないかい？ 許すことのできない極悪人がね」

久保らしい言葉に、岡崎は顔を綻ばせつつも、どうにも納得いかない。

希実が閉所恐怖症らしいことも、表情に乏しく妙に大人びていることも。事件は何もかもまとまりがなく、一つ一つの事柄が繋がっていない。

「もしかして、会いたくなかったなんてことはねえよな……」

「岡崎さん……」

今度は琢磨が向かいのデスクから声を抑え気味にしながら立ち上がった。岡崎は返事をせずに、肘をついたまま心持ち顎を上げて後輩の顔を見上げた。

「この前の捜査会議で、ちょっと問題になってましたが、やっぱりこれは一定の周期がありますよね……」

「だから、それは今のところ何の根拠もないし、ただ偶然が二回重なっただけとも言えるだろう？ 俺だってそうは思うがあんまりそれにとらわれていると、何かを見失うこともあるぞ」

「偶然ですか？ 僕、そういうの嫌いです」

岡崎は言葉を失って目を見開いた。

これもまた琢磨らしい気もするが、捜査上の憶測は慎むべきであると先輩刑事から叩きこまれてきた岡崎には同調することができなかった。

「だって聞いてください。一人目の女子高生、相沢美登里が死亡したのが五月の六日。これは両親の証言からはつきりしています。次が佐々木麗子で六月の一日。これは遺体の発見日で死亡日時ではありません。そして平沢幹夫が六月の二十六日の早朝に発見されました。彼の場合は雑居ビルに刑事が張り込みしていたので、二十五日

の深夜という事も十分考えられますよね。これから被害者がまた出たら、次は」

「縁起でもねえこと言うんじゃないよ」

「野辺山先生だって、言っておられたじゃないですか。次の犠牲者が出るかもしれないって……それで発見日と死亡日時を考えてみると、きつちり二十五日ごとなんですよ。おかしいじゃないですか。数えて直してみたんです。佐々木麗子も、平沢幹夫も、はつきりとした死亡日時は断定されていませんが、もしも、仮に日にちを断定すると、一人が亡くなって二十五日後に必ず次の遺体が発見されているんです」

「おいおい、だからさ」

「次は七月二十日です」

琢磨の言葉はのんびりしていて穏やかだが、珍しく眉間にしわが寄っていた。そういうえば、佐々木陽司のところを訪問した時と同じだった。ひどく腹立たしげに「世の中狂ってる」と言い捨てたことを、岡崎は思い出した。この後輩はどうやら、課長の久保と同じく勸善懲悪が信条らしい。もちろん岡崎も、犯罪を憎むから刑事の仕事が続いているわけだが、頭から足の先まで全身全霊をかけて刑事の仕事に打ち込んでいるわけでもなかった。

岡崎の口について出た言葉は「馬鹿」だった。他に言う言葉が思いつかなかった。脳裏には、化け物の仕業じゃないかと淡々と話す野辺山の顔も浮かんでいた。

「そうなる前に、事件を解決すんのが、俺達の仕事じゃねえか」

椅子に深くもたれなおして、岡崎は琢磨を見上げた。

「わかってはいるんです……手がかりがないので、気持ち焦るんです。どうしようもなくて」

「そういう時はな、琢磨」

岡崎の浮ついた声に、琢磨は沈みかけていた顔を上げた。

手がお猪口の形になっていて、それを煽るように飲むマネをする岡崎を見て、ようやく琢磨の顔に薄い笑みが戻ってきた。

五の段 鬼憑…… 2

野辺山は久しぶりに講義を早く終えて帰宅の途についていた。

自宅は大学から三駅ほど離れた郊外にある。都心のベッドタウンになっていて、駅前には一通りの設備が整っていた。ちょうど帰宅時間と重なっていて人通りは多い。特にスーツ姿のサラリーマン風の男女がほとんどだった。

ところが、なだらかな斜面に展開される住宅街は三分も歩けば、煌々と明かりが灯り続ける駅前と違って、家の明かりと等間隔に並んだ街灯だけが頼りになる。

自宅は駅から十五分ほど歩かなくてはならない。

駅を降りた野辺山は鞆を片手に下げたまま大きく伸びをした。

ゆったりとした気分は久しぶりだった。

瀬地矢愛育園を訪れてから、佐々木麗子がぱったりと現れなくなっただけだ。

いつもなら、決まって夕暮れ時になると野辺山の法医学教室は、冷房の設定温度を最低にしたのではないかというくらいに冷えてくる。無論、寒気を感じているのは野辺山一人だ。

気がつく、部屋の隅に麗子が立っている。

エジプト展で見えるような完全なミイラの姿だ。おそらく最後に身につけていたと思われる半袖のＴシャツとスカートをはき、根元が白くなった黒い髪を背で束ねている。ごっそりと開いた眼窩からひとしずくの涙を流し、黙って立っているのである。

うつむき加減で、何をするでもなくじっと、だ。

最初は語りかけてみたりしたが、野辺山も霊感があるといっても強いほうではない。解剖中に遺体から声が聞こえて犯人を告げられたこともあったが、霊と対話することも、まして除霊なんて試してみたこともなかった。

岡崎と違って、野辺山は瀬地矢愛育園へ麗子はちゃんと付いてき

ており、希実という子供に会って、成仏したのだと考えていた。

ようやく佐々木麗子から解放され、次の学会で発表する論文の執筆は非常にはかどった。あとは五日後の本番を待つばかりだ。

時計を見ると、まだ七時前だった。

今夜は帰っても一人になる。

野辺山の妻は同じく医者で、市民病院で医局長をやっている。いまは一週間前からアメリカの病院を視察しに出かけて不在だった。

夫妻には子供はいない。妻は重度の子宮内膜症で、若くして子宮摘出を決意した。それでも野辺山は楽しく結婚生活を送っていた。お互い、研究に没頭し仕事にも打ち込める。休日は二人で、テニスやスキーなど季節に合わせてスポーツを楽しんだ。

唯一の不便は、妻がいないと家が片付かないことだった。

迷うことなく、食べ終わればゴミにできるコンビニの弁当を買いに寄った。夜の八時まで開けている県立図書館も覗いていきたかったが、そろそろ溜め込んだ洗濯をしないと明日着る下着がなくなっているはずだった。

洗濯は得意だった。洗剤を入れてスイッチを押せば、乾燥までやってくれる優れものを買ってある。

空を見上げると梅雨の中休みらしく、今夜も星空が綺麗だった。ロマンチックな気分になりながら帰宅し、シャワーを浴びてから、着ていたものもすべて洗濯機に投入した。

テレビをつけてビールを取り出し、コンビニの弁当をひろげて、ソファアではなく床に胡坐をかいて腰を下ろした。ビールを煽つてから、ローテーブルに勢いよく置く。

「ああ、いい気分だ」

一人きりのリビングは少々広く感じられる。けれど、当直をこなさなければならぬ妻を持つ野辺山にとっては慣れたものだった。くだらないと思いつつクイズ番組にチャンネルを回し、リモコンをテーブルに投げ出した瞬間だった。

背中に寒気を感じた。

嫌な冷氣だった。

冷たい手を首筋に当てられたような、唐突な悪寒が全身を駆け抜ける。

「きた」

自宅で霊現象に遭うことは稀だった。ちゃんと土地の由来も周辺も調べてから家を建てた。家には念をこめた札も貼ってある。たまに、出先から連れて帰ってしまった霊を見ることがあったが、一次的なものだった。

しかし、今日は出先と言っても、いつも通っている創英大学病院だけだ。

思い当たることは一つしかない。

電気はついていてのに視界が暗くなった気がした。テレビにも砂嵐に似た雑音が混じり、画像が歪む。

振り向こうとした。

首が動かない。

ローテーブルにリモコンを置いたままの状態で、手が固まっている。瞬きもできない。

額から汗が噴出した。いつもの麗子が現れる時とは明らかに違う。冷氣を感じることはあっても、金縛りにまでなったことは一度もなかった。

麗子ではないのか　そこまで考えた時、バチン、という破裂音とともに、ブレーカーが落ちた。

部屋は闇に包まれた。郊外の住宅街では、窓の外の明かりなど期待できない。

テレビの音も消え去って、野辺山の息遣いだけが闇に溶け込んでいった。

野辺山の肩が跳ね上がった。

後ろに、誰かが立っている。

鋭い視線が、野辺山の背中に突き立った。皮膚がびりびりと音をたてたかのように、過敏に反応した。

澱んだ生暖かな空気が蠢く。視線の主が、どうやら動いたらしい。見開いた目が乾燥して痛いほどだった。

ふわりと風船が風で飛ばされたように、野辺山の左頬を何かが掠めていく。目だけを動かして左側を見た。

枯れ枝のような手が伸びてきた。部分的な白骨死体を司法解剖した時に見た時と同じ、骨に薄皮が一枚張り付いているだけの手だ。それが頬を掠め、野辺山の首に巻きついてきた。

息が止まる。片手だけなのに、首が絞まった。そのまま引きずられるようにして後に向けて強い力が加わった。無抵抗のまま、置物が転がるようにして野辺山はうしろに倒れた。頭に強い衝撃があり、一瞬、目が眩む。

気がつくと、野辺山は横たわっていた。

どこからか、水の滴る音がする。

汚臭が鼻をついた。

あたりは、漆黒の闇だった。

リビングの床にいたはずなのに、頬に触れる感触はイ草だった。畳敷きの上に、野辺山は横になっっているらしい。

かざりと、畳をかきむしった音がした。

どうやら、自分の左指が畳を弾いたらしい。

右手を顔に添え、右側臥位になっているようだった。身体が硬いものの上に寝かされて痛んだ。ギシギシと音を立てて壊れそうだった。

何を見ているんだ、僕は……

不定期に滴る水音を聞くうち、野辺山は徐々に冷静さを取り戻した。

どこをどう見ても、野辺山の家の中ではなさそうだった。言うなれば、鍾乳洞の中にあるような空気の冷えだった。滴る水音は、小さな音のはずなのに反響して聞こえる。

地下、か？

水音に混じって、今度は足音が聞こえてきた。

靴音ではなかった。スリッパを引きずるような、草履で土の上を

歩いたような音だった。足音は徐々に近付いてくる。

耳を澄ませて足音を聞いていた。

刹那、皿を何十枚と割ったような激しい炸裂音とともに、野辺山は光に包まれた。カーテンを開けて一気に朝日を見た時と同じだった。あまりの眩しさに視力を失う。

目蓋の裏に張り付いた光の残像が少しずつ消え、しばらくしてようやく目を開けることができた。

あたりは変わらず暗闇だった。

が、思わず短い悲鳴を上げていた。

黒を背景に、女が一人赤ん坊を抱いて正座していたからだ。

髪は艶々として長かった。額で二つに分けた髪を緩く後で結わえているようだった。白い着物を身にまとい、腕に赤ん坊を抱いている。赤ん坊の産着は、同じく白地だったが、牡丹の花が刺繍されている。糸には金も混じり、色とりどりの大輪を白い布地に描いたようだった。そんな着物を見たのは、野辺山の妻が結婚式の時に着ていた色内掛け以来だ。

若く美しい女だった。

女の色香が溢れ出ている。思わず目を奪われた。赤ん坊が身につけている牡丹の花がかすむほどだ。肌理の整った白い肌は薄紅色に上気し、細められた目は穏やかに赤ん坊に向けられている。薄くもなく厚くもない形よい唇が、何かを呟き続けていた。

不意に、女が呟くのをやめた。

澄んだ黒目が大きく見開かれ、女の顔が恐怖に歪んでいく。美しいがゆえに凄艶だった。

野辺山は、女の顔が鬼神の如く醜く歪んでいくのを、横になったまま見ていた。目が離せなかった。女は狂ったように泣き叫んでいた。

叫びながら、女が着物の裾を乱して立ち上がった時だった。

野辺山の両目に、激痛が奔った。声を上げずにはいられなかった。野獣のように咆え、手で目を覆って、床をのた打ち回った。

その時、呻き声に軽快なメロディーが混じり始めた。
軽騎兵序曲だ。

それが自分の携帯電話の着信音であると気付くのに、野辺山はかなりの時間を要さなければならなかった。

五の段 鬼憑…… 3

岡崎は三杯目のジョッキを店員に注文した。

「だからな、琢磨、そう真剣に考えることはねえって。世の中憎んだって、俺たちに変えられるわきやねえんだって」

顔をしかめたままの琢磨を指差して、岡崎は店内の音楽に対抗するように声を張り上げ、かつ、諭すように続けた。

「中にはどうしようもなく、悪事に手を染めるヤツだっているんだぜ？ だいたい、世の中な、平和ボケすりゃあ、するほど、快樂、つてもんを欲しがるんだよ。生きることに、必死にならんでも済むとな、馬鹿野郎な事を考えちまうんだよ……」

「岡崎さん、飲みすぎじゃないですか？」

「何言ってやがんだ、たった三杯じゃねえか……」

「お酒が入ると、すぐに説教するんだから……」

琢磨はカクテルを手に口元を綻ばせた。

店内の喧騒を眺めやって、盆を片手に近寄ってくる店員を呼び止め、同じカクテルとチーズの盛り合わせを注文する。

「しかし、おめえ、お洒落な店を知ってるんだなあ」

岡崎はビールを一口飲むと、辺りをみわたした。店内は中世ヨーロッパの宮殿のような豪華な造りになっている。床は白い大理石で、歩いている人間が映るほどに磨かれていた。円いテーブルには精巧な彫り物があつて、天井にはシャンデリアがぶら下がっている。

店内は客でいっぱいだった。店員は忙しく立ち働いて、あちこちを行ったり来たりしている。客の出入りも多く、岡崎の隣を派手な化粧をした若い女の子が男と腕を組んで通り過ぎていった。向こう側では、大勢の若者が長い時間、たむろするように騒いでいる。

娘も大学に受かつて、こんな風に男友達をつくるのかと思うだけで、岡崎の酒量は増えるばかりだった。

「こんな風に、ずっと笑って暮らせればいいのに、こういう若者の

影には犯罪に手を染める者もいるんですよね」

ぼんやりと騒ぐ若者に視線を送りながら、琢磨が言った。

「防犯課にでも、移動するか、お前？」

「考えてみます」

岡崎はジョッキを片手に身を引いた。

「本気で言ってるのか？　だがよ、お前とお代官様と、二人で犯罪論を戦わせたら、さぞや大激論なんだろうな」

「犯罪者は断罪すべきだというやつですか？」

「久保係長の口癖だよ」

岡崎は目の前のポテトを口に放り込んだ。

「でもな、もしも、俺の娘が誰かに殺されるようなことがあったら、俺だって犯罪者になるかもしれん……時々、そう思うこともあるんだよ」

「岡崎さんはそんなことしません」

「いやに断言するじゃないか」

琢磨は子供が褒美をもらったように、無邪気に微笑んだ。

本当にこんな風に、ずっと笑っていられたら犯罪なんて起こらない気もする。だが人間とは忙しい生き物だ。怒ったり、怨んだり、嫉んだり。悲嘆にくれて、生きる気力をさえ失うこともある。

だからこそ、楽しいのでもあるうが。

「そついや、野辺山ちゃん、確か、しばらく一人だって言ってたな」

「佐々木麗子が現れなくなつて、一週間ほどお会いしていませんね」

岡崎は内ポケットから携帯電話を取り出した。

「きっと一人やもめを楽しんでるかもよ」

野辺山教授の携帯番号を選択して押しながら、岡崎は笑っていた。飲み仲間が多いほうがいい。早いめに佐々木麗子の友人を訪れて、今日はこうして羽目はずしに来た。このまま家に帰らずに、琢磨のアパートか野辺山の自宅に押しかけることだってできそうだ。

だが、何度目かのコールののち留守番電話に切り替わった。

「出ねえよ、先生」

「岡崎さん！ 何度もかけたら迷惑なんじゃないですか？」

琢磨の忠告も聞かずに、岡崎は再び野辺山を呼び出した。気分がいい酒は、すっかり岡崎の血中を駆け巡って思考回路を鈍らせていたのかもしれない。

二度目のコールで、つながった。

「野辺山ちゃん！ 今、飲んでる」

途中で言葉を切った岡崎を、琢磨は不思議そうに眺めた。二人は眼を合わせる。岡崎の眉が寄った。

「どうした？ 何かあったのか、野辺山！」

電話口から聞こえてきたのは、搾り出したような呻き声だった。

*

岡崎達が飲んでいた店から、どんなにタクシーを飛ばしても、野辺山の自宅までは四十分ほどかかる。

琢磨は車に乗ってきていたが、さすがに飲酒運転をすることはできない。

二人は店にタクシーを呼びつけて飛び乗った。

内ポケットの古びた皮手帳を急いでめくり、野辺山の住所を運転手に告げる。

苦しげな呻き声はただ事ではなかった。

「どうしたんでしょうか、先生」

「心臓の血管が詰まってなきゃいいんだがな」

「岡崎さん、縁起でもない……」

腕を組んだり、足を組みなおしたりしてみたが、どうにも落ち着かなかった。胸騒ぎというものがあるとすれば、こういうことを言うのではないかと、岡崎は始めて思った。

今回のミイラ死体事件は常識の範疇を超えている。

脳だけが生々しいミイラ死体。体の一部を失った死体。警戒態勢の中でおこる小火。赤ん坊らしからぬ、佐々木希実のゾツとするよ

うな笑み。野辺山に付きまとう麗子の亡霊。

どれをとつても、何一つ繋がってこないが、唯一共通していると
いえば、これが現実的でないという事だけだった。

そのことが、岡崎を不安にした。

苛々しながらタクシーを飛ばしてもらい、野辺山の自宅に着いた
のは夜も九時になるうかという時間だった。

見上げた家には、明かりがともっていなかった。

「ホントに自宅からの電話だったんですか？」

「そう言われると、自信がないよ」

岡崎は頬を掻きながら門から中に入った。ガラス窓が仕込まれた
玄関ドアからは薄い明かりが漏れている。廊下の電気がついている
のだろう。

「いるじゃないか」

岡崎はポケットからハンカチを取り出した。もしもこれが犯罪が
らみだった時のために、自分の指紋を残しておくわけにはいかない。
悲しい習性というべき行動だ。

乱暴にインターホンを鳴らし、ドアを拳で叩いた。何度も野辺山
の名前を連呼し、琢磨が近所迷惑だと諫め、裏から回って家の中を
覗いてみようかと決めた時だった。

玄関を開錠する音がした。

岡崎は急いでハンカチでドアをつかみ、開け放った。

玄関先に、スウェットスーツ姿の野辺山が倒れこんでいた。

「野辺山先生！ 大丈夫か、何があつたんだ」

玄関ホールでうつ伏せになったまま返事をしない野辺山を岡崎は
上向きにした。琢磨は家に上がりこんで、ハンカチを片手に電気を
つける。

「おい、これ」

上向きになった野辺山をみて、岡崎が声を失った。

野辺山の顔は真っ青だった。クビにはくつきりと指の痕がついて
いて、何者かが締めたことを示していた。

「強盗か？ おい琢磨、電話だ」

「……待てよ、岡サン」

仰向けのまま、野辺山はかすれた声を出した。弱々しく首を横に振る。

「違うんだ」一旦ひとしきり咳き込んで、野辺山は続けた。「違う、強盗じゃない。麗子だよ、佐々木麗子。僕に、何かを見せたらしい」

岡崎が言葉を失っているのを見て薄く笑うと、肩を借りて体を起こした。

「彼女はいなくなっただんじやなかったのか？」

野辺山は首を横に振った。

「いや、いたんだよ、たぶん、僕の中に……ずっとだ。力を、蓄えていたのかな……今もいるんだ。分かる、感じるよ……」

そう言つて、野辺山は自分自身を指差した。

「ちよつと待つてくれ。何がなんだか……」

「そう、僕もわからない。あれが、犯人なのかな……それとも、佐々木麗子なのかな……」

岡崎と琢磨は目を見合わせた。

七月初旬の夜にしては、冷たい風が玄関から吹き込んできた。夏の虫が、小さく鳴いているのが聞こえる。郊外の住宅街は物音一つなかった。

五の段 鬼憑…… 4

香坂は書斎にこもったきりだった。

何度、妻が声をかけても、嚇しても宥めても部屋から出ようとしなかった。部屋から出るのは用を足すときくらいで、ほとんど食事にも手をつけようとしなかった。

妻が誰を呼んでこようともしない、それは同じことだった。

香坂は次第に痩せていった。頬はこけて、骨に一枚皮を巻いただけのようになつていく。肌は艶を失つて、一気に二十も三十も年をとったかのようにだった。

それでも、子供が欲しいおもちゃを手にしたように満面の笑みを欠かすことはない。

机の上には、たくさんの車が並んでいた。

年代物のクラシックカーやレースカーなど、種類は様々だ。

それをきちんと並べて、香坂は飽きずに眺めていた。ひとしきり眺めたあと、また新しい箱を一つ手にしてつくり始める。それがなくなると、パソコンを開いて新しい商品を注文する。出かけなくても、すべて部屋の中で買いたい物ができる便利な時代だ。

「満たされておるな……」

老婆は胡坐をかいて座り込む香坂の後ろにいた。いつものようにきちんと膝をそろえて正座している。目は針ほどの隙間をのぞかせるだけの細いもので、口元はいつも微かに笑みを浮かべている。

老婆がいるところだけは、深い闇が包み込んだように濃くて黒い霧に包まれたかのようにだった。

「生きていたとて、苦しみばかり。ならば、わらわの為に生き、満たされたまま死にゆくが幸せというものぞ……のう？　そうは思わぬかえ？」

香坂は老婆の呟きが聞こえているのかいないのか、ただ、ひたすらにプラモデルづくりに熱中していた。

左腕には、紅い時計が巻きついたままだった。

正確に時を刻んでいく。まるで香坂の寿命を刻んでいるかのようだ。

「さあ、楽しむがよい。わらわの為に、のう」

老婆は細い腕を差し出した。薄墨色の着物の袂が、動きに合わせて衣擦れの音をたてた。

「わらわの為に……」

目蓋が痙攣したように、ぴくりと震えた。ゆっくりゆっくりと、まるで重い荷物を持ち上げるかのようだった。目蓋がじれったいほどに時間をかけて開いていく。

半分ほど開いたところで、老婆は苦しげに胸元に手を上げた。

眼窩には瞳がなかった。常闇の国へ誘うかのようになり、ごっそりとした闇が開いていた。

「許さぬ……」

香坂の背にそつと手を当てると、老婆はそのまま闇に溶け込んでいった。

六の段 管掌…… 1

野辺山はすっかり体調を崩して大学を休んでいた。学会も欠席せざるを得なかった。

絞められた首には紫色になった手の跡がくつきりと残っている。まさか七月の蒸し暑くなった初夏にタートルネックの服もあるまい。女性ならそれなりにお洒落のしようもあるが、いつもジャージや薄汚い白衣姿の野辺山では、かなりの無理がある。

野辺山の妻、真理子も連絡を受けてすぐに帰国した。

岡崎もたびたび仕事の帰りに野辺山を訪ねた。今日もずっと疲労感が付きまとうと、昼間に電話で聞いて知らぬ顔ができなかった。玄関に出迎えにきた野辺山にはどこか生気がなく、貧血で今にも倒れそうにみえた。

「野辺山ちゃん、どう？」

「よくないね」

佐々木麗子に首を絞められ、異様な体験をして一週間が経っていた。

「捜査のほうはどうなの？」

「よくねえよ」

「そりゃ気の毒だ」

リビングに案内され、岡崎はソファを勧められた。向かい側に腰掛けた野辺山は、ため息をつきながら深くもたれかかり、首を撫ぜた。

岡崎と琢磨は、一週間前に何があったのか野辺山からすでに詳しく聞かされている。

瀬地矢愛育園に出かけてから、佐々木麗子が成仏したと思い込んでいたこと。そのことが、どうやら、彼女の気配に気付けなかった原因の一つでもあり、麗子が力を蓄えていたのではないかと野辺山は考えていることも。

「悪いね、真理子は今日当直だから、せっかく来てもらっただけ、ビールしかないよ」

「十分だ」

岡崎はビールの缶を目の高さに持ち上げて顔を綻ばせた。これが目当てでもあったが、正直言つて体のほうも疲れきっていた。

三件のミイラ死体事件の被害者達に接点などありはしない。それぞれ、チームを組んで調べつくしているが、見付かったのは、佐々木麗子の祖母の出身と、平沢幹夫の母親の実家が同じ県だったというくらいだった。これにはほとんど意味がない。

一方の佐々木麗子は、調べれば調べるほど大人しく控えめな人物像が浮き彫りになっていく。育児に関しても、毎日同じ時間にベビーカーを押して散歩に出かける彼女を、何人もが目撃していた。

相談できる親もおらず、頼れる友人たちは独身で仕事を持ち、夫には逃げられ、どれほど孤独だったか、男である岡崎には想像もつかなかった。

「麗子さんは、そうか、どちらかというと大人しくて、尽くすタイプの人だったんだね」

「そうらしい。寂しかったのかもしれないな。温かい家庭のために、あんな男に尽くしてさ」

「岡サン、彼女が聞いてるよ」

野辺山が大して声の調子も変えず当たり前のように言うので、岡崎は思わず飲んだビールを吐き出しそうになった。

「毎晩なんだ、何とかならないかな」

野辺山は深く椅子に座りなおして、頭の後ろで手を組んだ。心底、疲れ果てたという顔だった。よく見ると、目の下にはクマができている。

「野辺山ちゃん、痩せた？」

「痩せもするよ。毎晩、あんなの見たら、おかしくなりそうだ。毎晩、目を抉られる映像が繰り返されるんだぜ？ 決まって、その女は赤ん坊を抱いてるんだ。でもって、洞窟のようなところで寝かさ

れてる。僕は何を麗子さんが伝えたいのか、さっぱり分からない。

だから毎晩みるんだろうけど……」

「赤ん坊を抱いているのが、佐々木麗子さんだと、そう思う？」

「いや、別人じゃないかな。彼女なら、視点が違うと思うわけだよ」

野辺山はいつもの調子を取り戻して、講義口調で続けた。チョークかタバコの変わりに、人差し指を立てて、小さく振っている。

「いいかい？ 赤ん坊を抱いた女を、僕は見てるわけだ。もしも女が麗子さんと同一人物なら、麗子さんに憑依されている僕が女の容姿を見ることはできないはずだ。赤ん坊を抱く女の目を通して周囲を見ているなら、麗子さんと女が同一人物だと考えられるんだけどねえ。僕は赤ん坊を抱いた女を、眺めてるわけだから……ただ、洞窟に横たわっている時は違う」

「そっちは麗子さんだと言うわけか？」

「いや……洞窟の時は僕自身が横たわっているような感覚がある。きっと同化しているんだろうね。だってそうだろう？ 麗子さんはマンションで発見されたのであって、洞窟とは縁がなさそうだし。でもだよ、こう考えられないかな。僕は麗子さんが見た映像を、そのまま引き継いで見ているんだよ」

岡崎はビールを煽ってから、首をかしげた。缶をローテーブルに置き、身乗り出す。

「やっぱり、別人だと思うんだ。麗子さんも僕と同じように、洞窟で寝かされているという疑似体験をした。きっとそれは、赤ん坊を抱いた女の経験だ。疑似体験をした時に偶然に女の記憶を覗き見た。覗き見た、というより、波長が合ったんだろ。きっと最も強烈な記憶だったんだろ。それが、目を抉られた時の映像となって残っている、とそういうわけだよ。どうだい？」

「わかったような、わからんような。要するにさ、野辺山ちゃん。赤ん坊を抱いた女ってのは？」

「犯人、じゃないかな。麗子さんはそれを僕に教えたかった」

野辺山は右手の人差し指で岡崎をさし示した。

岡崎は返事のしようがなかった。つまるところ、この連続ミイラ死体の犯人は亡霊だと、野辺山が言っているのと同じことだからだ。それでは、近頃のワイドショーを賑わせる、偽霊媒師と同じだ。テレビでは連続ミイラ変死事件と題して、いろいろな霊能力者が現れてコメントに余念がない。犯人はエジプトの死者だとか、ペルシアやアリュート族、中国の晋の時代にも死者をミイラにする習慣がある地域があり、そこから現れた呪いだとか、琢磨が指摘したのと同じ、二十五日毎、という情報もどこからか入手し、世間は呪いのミイラ事件といって騒ぎ立てている。警察が何も立証できないのが、呪いの根拠にもなりつつあるくらいだ。

岡崎は大きく咳払いをして、遠慮なくビールをお代わりするために立ち上がった。

「じゃあ、野辺山ちゃんはその赤ん坊を抱いた女の目的はなんだ、って言うの？」

勝手知ったるキッチンの冷蔵庫からもう一本ビールを拝借しながら尋ねた。

「さあ……」

「確かに麗子さんは目を奪われたさ。例えばだけど、赤ん坊を抱いた女が目を取り戻そうとしてる、ってのは分かるが、じゃあ、耳がなかった平沢幹夫は？ 首が切られていた相沢美登里は？」

野辺山を責め立てるのは筋違いだが、この際、自分のことは棚に上げておくことにした。

「僕が気になってるのはね、岡サン」

体を起こした野辺山は、いつものように膝の上に両手を置いて組み、顔を岡崎に向けてきた。

「女が赤ん坊を抱いていることだ。それで、目を抉られた時には赤ん坊の姿がない。赤ん坊はどうなった？ それが、希実ちゃんと重なるんだ。僕の杞憂であって欲しいけど」

足元から水風呂ならぬ、氷風呂に使ったのかと思った。全身の関

節を瞬間冷凍されたようだった。

「やめてくれよ、何考えてんだよ、野辺山ちゃん」

野辺山は首を横に振った。

「分からない……何も分からないよ」

*

香坂の妻、秋枝は精神的に参ってきていた。

夫は日々やせ細り、会社を欠勤し、書斎にこもったまま出てこない。小学校六年生になる息子も、怖がって部屋から出てこなくなっていた。

何の心配もなく、今まで生活してきた。夫は営業職で毎晩遅いが、人並み以上の暮らしをしてきた。マンションを買い、子供も受験を控えている。仕事もせずに専業主婦でいられるのも、友達とランチに出かけ、エステに週一回通えるのも、すべて夫のおかげだった。友達と旅行にも行きたかった。年をとっても、綺麗だねといわれるのが自慢で、夫の給料がもっと上がればと、願わない日はない。

それが、根底から覆されようとしている。

何が不満だったのか、秋枝にはさっぱり分からなかった。専業主婦として、家の事はきちんとこなしてきたつもりだった。帰りの遅い夫の食事も手抜きせず、起きて待っていた。どんなに遅くても、朝はきちんと起きて、夫の健康を考えて和食を用意した。夫にはそれなりに、尽くしてきたつもりだった。

今も、夫の香坂義夫は書斎にこもったままだ。

気が狂いそうだった。

一人で家にいると、書斎が気になって仕方なかったので出かけようとも思ったが、気分がすぐれない。結局、秋枝は気を紛らわせるためにテレビを付け、ソファに座り込んだ。

昼過ぎからテレビを見ることは稀だった。大抵、友達と出かけるか、子供が帰るまでに買い物に行くのが習慣だったからだ。

テレビは、芸能人の結婚の話題から、特集へと変わっていった。最近、連続して起こっているミイラ死体の特集らしい。

ミイラ？

秋枝はふいにその言葉が、夫の義夫と重なって聞こえた。日ごと痩せていく夫の姿は、ミイラといってもおかしくない。もちろん秋枝はミイラなど見たこともなかった。博物館など興味もないし、ましてエジプトなどの歴史も関心がない。

テレビは連続ミイラ死体事件が一定の周期を持っていることを伝え、被害者が徐々に痩せ細っていく、と証言をしている人物がモザイクで登場していた。続けて、霊能力者が出演し、怨霊が関わっていると力説を始める。

秋枝は落ち着かなくなつて立ち上がった。

まさか、という思いが沸き起こる。

霊能力者の解説を無視して、秋枝はキッチンにぶら下げてあるスケジュール用のカレンダーのところに駆け寄った。家の予定や覚書代わりに使っているカレンダーだ。

義夫が部屋に籠りだしたのは何時のことだっただろうか。

会社から電話があつたのが、六月二十六日だった。夫が、初めて無断欠勤をした日だ。

秋枝はテレビを振り返った。

二人目の被害者の発見が、同じ日ではなかったか。

慌ててテレビのリモコンを取り、秋枝はチャンネルを変えた。昼過ぎのこの時間、どこも主婦向けのワイドショーや特集、料理などをやっていることが多い。

他局でも、同じ特集を組んでいる。

被害者の、遺体発見日が一覧になっていた。

六月二十六日。

秋枝はリモコンを取り落としていた。廊下の向こうにある書斎のほうを振り向く。額から汗が噴出した。なのに、体は寒気を感じる。開け放ったベランダ側の大きな窓から、冷たい風が吹き込んで、秋

枝の体温を奪っていった。

藁をも縋る思いで、秋枝は電話を取っていた。

六の段 管掌…… 2

土岐河警察署刑事課に取次ぎの電話が入ったのは、ちょうど琢磨がコーヒーを入れ替えてくれた時だった。

「久保課長。ちよつと」

刑事課の一人が、久保を呼んだ。電話を久保が取り、話を始めるのを横目で見て、岡崎は琢磨が入れた熱いコーヒーで喉の奥を潤す。岡崎と琢磨は佐々木麗子の子供、希実に関しても調べることを久保に許可され、これから産院と保健所を回ることになっていた。

生まれた赤ん坊は産院で健診を受けてから退院する。その後は、一ヶ月健診と四ヶ月健診を、大抵の子供は受けているはずだった。健診を受けていなければ、最近では保健師から家に電話がかかってくるという親切らしい。もしも、早期から希実に異変があったとすれば、このいずれかの時点で何かしらの発達上の問題点が指摘されているはずだ。

「岡崎さん、産院のほう、これから時間が取れるそうです」

「おお、行くか」

そそくさと書き途中の調書を片付けると岡崎は腰をあげた。

「ところで野辺山先生のほうは、どうなんですか？」

「ああ、また今夜にでも、慰めに行ってくるよ。野辺山ちゃんがとり憑かれてたつて、俺に除霊ができるわけでもなし、事件早期解決が、何よりの除霊じゃねえかと思うしな」

「ホントに、あの赤ん坊が関係してるんですか？」

「分かん」

眉がよった。そんなことは自分が誰かに聞きたいくらいだった。このままでは、深いしわが眉間に刻み付けられそうだ。頭の上から、岡崎自身にも分からない事をのんびりと問いかけられると、自然とそうなってしまう。

「岡サン！」

受話器を肩にはさんだまま、久保が岡崎を手招きした。

何事かは分からないが、岡崎は久保課長のデスクに向かった。久保はメモをとりながら、電話の応対をしていた。

「住所は分かりました。今から捜査員を行かせますから、しばらくお待ちください」

久保の言葉を聞いて、岡崎の眉間のしわはさらに深まった。また余計な仕事に向かわなくてはいけないかもしれない。

「奥さん、取り乱さず、どうか落ち着いて。はい。そうです。いいですか、捜査員が到着するまで、自宅でお待ちください」

くどい位に念を押して、久保は電話を切った。切つてすぐに、住所を書いたメモを岡崎に手渡す。

「ミイラ死体になるかもしれない、という電話だ」
「またですか？」

岡崎は露骨に不快な顔をしていたに違いない。嫌いなカレーを無理やり食べさせられたとしても、ここまで嫌そうな顔はしないと、自分でも思っくくらいだった。

痩せてきた、家に籠るようになった、という理由から、テレビで報道されているミイラ死体になるのではないかという通報が、一日に何十件とかかってくるようになっていたからだ。それらすべてを一件一件調べていくわけにはいかない。捜査員が向かうと、よくてただの拒食症や引きこもり、最悪イタズラということも続いていた。久保は岡崎の態度に怒るわけでもなく、メモをさらに突き出した。

「今度はちよつと、臭うぞ」

「課長の勘ですか？」

渋々メモを手にした岡崎を、久保は腕組みして睥めやった。どうだ、参ったか、と言わんばかりに微笑む。

「琢磨と、あと二人ほど連れて行ってくれ。名前は香坂義夫、四十歳。ラクヨー電機の営業社員だ。いいか、ここが重要だ。妻によれば、義夫は、六月二十六日、この日から突然、人格が変わって部屋に籠り、やせ細ってきたらしい」

「六月二十六日？」

声をあげたのは琢磨だった。琢磨は「二十五日周期説」を重要視している。次の被害者が現れるとすれば、まさにこの日しかない。そして、エックスデーは七月二十日だ。

「今日は何日だ？」

「七月十三日ですよ、岡崎さん」

久保は腕組みしていた手を解き、デスクに手をのせて立ち上がった。

「くれぐれも用心してくれよ。まさか、怨霊だなんて思いたくないけどな……危険だと思ったら、すぐに応援を呼ぶんだ。こちらもそのつもりで待機しているからな」

岡崎と琢磨は、軽く敬礼して久保の前を辞した。

*

マンションは、第1種低層住居専用地域に指定される閑静な住宅街の一角にあった。

都市計画によると、これに指定された地域は高層マンションの建設はできず、騒音などを発する工場、風紀を乱す遊戯施設などは一切建築が許可されない。そのため、香坂義夫が住むマンションも三階建てで、緑に包まれた高級感漂う造りになっていた。

静かだった。

これから起こりえるかもしれない恐怖が、こんな静謐な場所で起こるなどと考えたくもなかった。

思わず岡崎は「怨霊」が出ると決め付けている自分に苦笑した。

野辺山の首にくつきりと残っていた指の痕を見たからかもしれない。

「三階の三二六です」

琢磨が部屋番号を確認してインターホンを押した。すぐにかすれた声で返事があり、こちらが警察であることを告げると、玄関のオートロックが開錠された。

「窓の下にいないていいですか？」

同行した捜査員の一人が岡崎に問うた。

「まさか、被疑者を確保しにくわけじゃねえんだから。俺達は被害者の可能性がある人間を保護しに行くんだぜ？」

エレベーターで三階に上がると、それぞれの家にポーチがついている。

贅沢な造りだった。岡崎の住む小さなマンションとは大違いだ。

エレベーターを降りると、身奇麗にした四十代の女性が門の前に立っているのが見えた。ひどく、やつれている。岡崎達の姿を見た途端、安堵したように息をつき、深く頭を下げた。

香坂秋枝はこれから夫がどうなるのか、と聞いてきた。

「一連の事件と関連があると決まったわけではありませんよ、奥さん。とにかく警察病院のほうを手配してあります。そちらで詳しい検査をしていただいて」

「でも夫は、頑として動きません。部屋だって鍵をかけてあるんです」

秋枝は祈るように手を胸の前で組みながら、涙ぐんでいた。

「とにかく、ご主人にお会いします。鍵を開けることくらい、すぐにできますから」

岡崎達は警察手帳を広げて、秋枝に見せた。戸惑いを見せつつ、ようやく彼女は玄関を開けた。手早く部屋に入ると、シューズロッカーから人数分のスリッパを用意した。

「そちら側の扉です」

マンションは三LDKではなく、四LDKのようだった。入口から二番目の扉の前で秋枝が足を止める。

岡崎も「失礼します」と言っ、中に入ろうとした。

「岡崎さん……」

囁くような小声で琢磨が呼び止める。岡崎は先に他の二人を家に入れて、振り向いた。

琢磨貴彦が、青くなって玄関の手前で立っている。ひよろりと大

きな体が、すっかり玄関口を塞いでいた。

「何やってんだ、お前」

琢磨は口を少し開け、目を見開いたままだった。厭々をする子供のように、首を振る。

「岡崎さん、入れませんよ、僕」

「何が」

言いかけて、岡崎は思い出した。野辺山の法医学教室を訪れた時、佐々木麗子が部屋にいるから寒いと言っていた琢磨の言葉をだ。あの時、わずかばかりでも靈感をもっているらしい琢磨に嫉妬したことを、岡崎は覚えている。

「まさか、お前、いる、とか言うんじゃないだろうな」

「応援を呼びましょうよ、岡崎さん」

「応援つて、誰のことだよ！」

「だって、真つ暗じゃないですか、この家中。ひどく冷たくて」
琢磨はスーツの腕を捲り上げて岡崎に見せた。「見てくださいよ、こんなに鳥肌がたってる。身体が沈んで、床にめり込みそうです。こんな気分の悪い場所は、生まれて初めて来ました……」

馬鹿なことを言っていないで、だったらそこで見張りでもしている、と言いかけて岡崎は振り返った。

秋枝が口元を手で覆って、眉を寄せていた。捜査員二人も、顔を見合わせている。

岡崎は玄関から入って、家を眺めてみた。

暗いようには見えない。時間はまだ午後の三時過ぎだ。季節はもう初夏で、いくら風通しのよいマンションだといっても、寒いという言葉はそぐわない。

けれど確かに、空気が重い。飲みすぎて翌朝に酒が残り、体が少しだるい、くらいの感じではある。あるいは、調書と睨めっこしすぎて肩が凝ったか。

それでも怨霊がいるといって、帰るわけにはいかない。希実の発達に関して、保健所と産院も回らなくてはならないのだ。

「こちらですか、奥さん」

扉の一つを指差して、書斎であることを確認する。

「香坂義夫さん、いらっしやいますか！」

扉を叩いてみたが返事はなかった。耳をあてて中の様子を伺って見たが、時折、スプーンなどをかき回すようなガチャガチャという音が聞こえるだけだった。中に誰かがいて、何かをやっていることは確からしい。しかもまだ、生きている。

「開けて、よろしいか」

岡崎の確認に、妻は頷いた。

手袋をはめ、ポケットから取り出したJ字状の金具を鍵穴に差し込んだ。ものの三秒とかからず、鍵が外れる。

扉は滑るように開いた。

背中が見えた。丸い背中だ。扉を背に、男、香坂義夫が胡坐をかいて座っている。

四畳半ほどの狭い部屋に小さな窓があった。片脇に机とパソコンがあり、スチールラックを本棚代わりにしてある。

部屋は足の踏み場がなかった。小さなプラスチックの欠片やビニール袋が散乱している。右端には小箱が山のように積み上げられていた。机の上には、小型から中型まで、無数の車の模型が並んでいる。

「お父さん、こんな、いつの間に……」

岡崎の肩越しに秋枝が呟いた。香坂義夫は妻の声に反応したかのように肩を震わせた。

ゆっくりと振り向いた顔は、土色だった。生気がない。頬はこけ、目が零れ落ちそうなくらいギラギラとした光をためている。髪は根元から白く変わっていた。

「香坂さん、お聞きしたいことが」

「岡崎さん、出てください！」

琢磨が玄関先から叫び声をあげた。

「黒い影が、うわっ！」

言葉にならない声をあげて、琢磨は玄関に座り込んだ。座ったというより、腰が抜けたという表現がぴったりだ。

岡崎も、他の捜査員も、そして秋枝も異様な琢磨の怯えように虚をつかれて立ち竦んでいた。黒い影も、人影すらも見えない。部屋は東向きで、日差しもない。

琢磨が腰を下ろしたまま、後退していく。

だが、琢磨にかまっている暇はない。同じく見えない黒い影とやらに怯えているわけにもいかない。岡崎は香坂の話を聞くために部屋の中に足を踏み入れた。

「入るな」

低い声だった。すべてを拒絶するように、香坂はまた背を向けた。しかし、香坂さん。奥さんが心配しておられますよ。病院を手配しましたから、一度行ってみましょう」

「俺はどこも悪くない」

「香坂さ」

香坂の肩に触れようと伸ばした手を、振り向きざま弾かれた。反動で岡崎がよろめく。

凄まじい力だった。

岡崎も、警察官として柔道の黒帯をもっている。道場でもそう簡単に若い者に負けたりはしない。そのがっしりとした身体を、腕一本でよろめかせたのだ。

香坂が、煙が立ち上るようにユラリと体を起こした。細い体のどこに力が残っているのかと、思うほどだった。体ごと岡崎に向き直り、香坂はうつむき加減の顔のまま、上目遣いに睨み上げた。

「俺の楽しみの邪魔をするな」

抑揚のない低い声には、岡崎を後退させるだけの気迫があった。

「岡崎さん、ダメです、戻ってください！」

琢磨が玄関先から叫んだ。

「琢磨、応援を呼んでくれ。救急車でもいい……さあ、香坂さん。我々は香坂さんの楽しみを奪い取ろうとしているわけじゃありません

んよ」

再び差し出した手を、香坂が見下ろした。

香坂も反射的に手を差し出した。

その左手に赤いものを見つけて、一瞬、岡崎は心臓が打ち鳴らされた。手首でも切って血を流しているのかと、思ったからだった。

腕時計らしかった。

紅かった。尋常な色ではなかった。殺害現場に横たわる遺体から流れ出て乾燥した、どす黒い血の色に似ている。錆びて饅えた匂いが、岡崎の鼻をついた。

血の、臭いだ。ただの血の臭いではない。鉄臭い香りの中に甘いものが混じっている。どこかで嗅いだ記憶のある、不思議な臭いだ。

「さあ、香坂さん」

岡崎はすっかり香坂が気を許したものとばかり油断して、一歩近付いてしまった。その隙を、香坂は見逃さなかった。積み上げた積み木がくず折れるようにかがみこむと、岡崎の腹の辺りに突進してきた。

まともに頭突きを食らって、岡崎は部屋から投げ出され、向かいの廊下の壁に背中を打ちつけた。

香坂秋枝の悲鳴が、廊下にまで響き渡る。

「岡崎さん！」

ちょうど電話を終えた琢磨も身を起こした。捜査員たちは二人がかりで、香坂を押さえにかかる。

腹を抱えて蹲った岡崎を琢磨が助けおこした。

苦痛に顔が歪んだ。異常な力だった。痛みを堪えて、岡崎は琢磨に抱えられたまま声を振り絞った。

「やめとけ、無理するな」

なんとか香坂に触れようとしていた捜査員二人も、岡崎の言葉に書斎を出た。

捜査員が部屋を出ると、香坂義夫は音を立てて扉を閉めた。

秋枝が泣き崩れた。

岡崎も、琢磨も、手が出なかった。

六の段 管掌…… 3

野辺山は眠っていた。

夢を見ているのかどうか、いや、寝ているのかどうかすら定かではなかった。

身体を丸めて、誰かが眠っている。

狭い場所だった。手足さえ十分に延ばすことができない。息も苦しかった。周囲は暗くて何も見えない。

耳には、ざわざわと人が話す声が通り過ぎていく。時折、目覚まし時計のようなけたたましい音が鳴り響くこともある。

電車が、通る音のような気もした。

これが、なんなのか、分からない。野辺山自身の記憶なのか、佐々木麗子の記憶なのか、それとも赤ん坊を抱いた女の記憶なのか。

野辺山はまどろみながら、冷静になろうとした。落ち着いて考えれば、何かが分かるような気がするのに、だんだんと圧迫されて身体が押しつぶされていくような錯覚に陥る。

寒い、苦しい、助けて

「哲さん？ 寝ているの？」

聞き覚えのある、少し鼻にかかった声が野辺山を揺さぶりおこした。

「すぐに夕食の支度をするから。こんなところで寝ていちゃダメよ」
うつすらと開いた目に映ったのは、見慣れた顔だった。少し疲れて、後れ毛が頬にかかっている。

青い石のピアスは、そういえば先月の誕生日にプレゼントしたものだっけ……

「真理子？」

野辺山真理子が瀟洒なスーツを身にまとって微笑んでいた。野辺山と同じように、健康的に肌は日焼けし、頬にわずかだがシミがある。とても四十半ばには見えない快活な雰囲気だ。

野辺山はリビングのソファに座っていた。夢にしては、妙にリアルすぎた。

「また、あの女の人？」

「そうみたいだ……僕が彼女の訴えの意味を、理解しないからいろいろとやってくれる」

もたれていた背中をおこすと、出来の悪い木製家具のようにギシギシと関節が音をたてそうなくらい軋んだ。

「あなたは赤ん坊に会いたいんだろう、犯人を教えたいんだろう、って言つてたじゃない？」

「そうなんだけれどね」

妻の真理子は野辺山の靈感の強さをよく知っていた。真理子本人は、全く何も見えないし感じもしないようだが、夫の言うことは信じているらしかった。以前、一度、日本酒が飲みたいと訴え続ける老人の霊に出会い、二人で日本酒通になったこともある。

今回の佐々木麗子の事も、真理子にはすべて話してあった。

真理子は夫の隣に腰を下ろした。

「ねえ、私、思っただけど」

「なにを？」

真理子は、少しためらうように視線を逸らした。外科の第一線で、男勝りに仕事をしている妻には珍しいことだった。

「私が彼女なら、自分を殺した犯人なんかどうでもいいと思うわ。

だって、きつと母親なら、残してきた子供が一番気になるんじゃないかしら。居場所が分からなくなつて、這つてでも、とり憑いても、子供のところに駆けつけて、守護霊よろしく守っていくと思うわ」

「そうだな、やっぱり。だけど、そうなると佐々木麗子さんの行動がよく分らない。赤ん坊に会いに来なかったり、僕にとり憑いてみたり……やっぱり、犯人を教えたいのかな、と思ってしまうんだ。どう考えても赤ん坊を抱く女の姿が目には焼きついてるし、今の夢だって、なにかのヒントのような気がするんだ」

真理子はまた、言いよどむように唇を噛んだ。

二人の間で子供の話が出ることは少ない。野辺山も真理子が子宮摘出の手術を受けてからは、無意識にこの手の話題を避けていたところもある。子供を望まなかったわけではなかったからだ。選択肢は多くあった。真理子が流産を乗り越えて、どんな想いで子宮内膜症を克服しようとしていたか、保存手術の効果がなかった時にどんな想いで摘出手術を決意したか、胸が痛くなるほど分かりすぎていた。

「子供のいない私が言うのもなんだけど、外科で手術をしていても母親って強いわ。ホントよ。だから余計思うの。麗子さんだって、岡崎さんの話からすれば、きっと子供を可愛がっていたはずよ？ だったら、答えは一つじゃない。自分の子供に会いたいのよ。私が、七週目で子供を失った時、この子が助かるなら私は死んでもいいと思ったもの」

真理子の目には涙はなかった。乗り越えた者の強い光が妻の目にはあった。

「なるほど……」

だとしたら、答えは一つしか考えられない。野辺山の杞憂が、当たっていたことになる。

「私も、哲さんと同じ考えよ。麗さんは、子供を捜してるのよ。自分の子供を。哲さんに探して欲しいんじゃないかしら。だから、泣いているんじゃない？」

「瀬地矢愛育園にいる、希実ちゃんは、麗子さんの子供じゃない、って言うんだね、君も」

「そうよ、じゃなきゃ、会いに来ないわけないわ」

真理子は言い切った。

佐々木希実は、麗子がミイラ死体となっていたにもかかわらず生きていた。希実が、人間でないとすれば、生きていたことにも納得がいく。麗子が見せる女が抱く赤ん坊。あれが、希実と取って代わっていたとしたらどうであろうか。

身体は希実でも、中身は麗子の子供ではないわけだ。

野辺山は背筋が寒くなった。
麗子が、隣で笑っているような気がしたからだ。

七の段 発露…… 1

岡崎は時間というものが、どれほど無慈悲であるのか、初めて思い至った。

香坂義夫の家には捜査員がおかれることになったが、そこから来る報告といえは「何もできずに、ただ日々をすごす」ことだった。妻の秋枝は泣くばかりで、子供は怯えて部屋に籠ったきりだ。同じく書斎から出てこようとしない義夫に捜査員も手が出ない。時間は止まらずに時を刻み続けている。

その間、野辺山から岡崎に電話が入っている。岡崎は、野辺山の自宅に見舞いを兼ねてすぐに訪れた。

「乳児院にいる希実ちゃんは、本当に佐々木麗子の子供だろうか」
野辺山がそう言った時、岡崎には全く意味が分からなかった。佐々木麗子の赤ん坊を保護したのは、ほかならぬ警察だ。希実が発見された時、遺体となった麗子の隣で眠っていたことを、夫の陽司も鑑識の者も、保護のために駆けつけた女性警官も目撃している。

希実は確かに人間だった。

ただ、瀬地矢愛育園の園長が言うように、希実に問題があることは事実だ。

「だったら野辺山ちゃんは、希実ちゃんが亡霊だって言うの？」

「そうは言っていないよ」

野辺山は尋ねてきた岡崎に、いつものようにビールを勧めながら苦笑した。

「本物の、希実ちゃんにとって変わられたとか……」

「今度は希実ちゃんがとり憑かれた、ってのかい？ 先生の次に？ まさか、とり憑かれた希実ちゃんが犯人だなんて、言いだすんじゃないえよな」

頬をかきながら眉を寄せる岡崎に、珍しく野辺山の顔が陰しくなった。

「いいかい？ 麗子が見せる白い着物を着た長い髪の女だ。彼女は赤ん坊を抱いてる。そこにキーワードがあると思うわけだよ。この事件には赤ん坊が絡んでるだろう？ 希実ちゃんに気をつけたほうがいい」

「悪いけどね、野辺山さんよ」

岡崎はビールをローテーブルに置いた。野辺山真理子が、つまみになるものを見繕って持ってきたが、それには目もくれなかった。「警察はさ、亡霊を逮捕することはできやしないんだよ。まして、麗子さんを助けるなんて、それも無理だ。もう少し、現実的に対処するよ」

岡崎には他に言いようがなかった。亡霊を確保するわけにも行かないし、起訴することもできない。警察の仕事の範疇を超えている。琢磨と岡崎にできることは、現実的な方向から事件を見ていくことだ。

香坂義夫をはじめて訪れた翌日、岡崎と琢磨は一日遅れたが、予定通り、佐々木希実の生まれた産院と地区の保健所へ出かけている。野辺山は、希実が亡者ではないかと言う。だとすればきっと、この捜査で何かしらの収穫があるはずだった。

希実は見たところ、赤ん坊らしくない。とり憑かれているのだとすれば、健診の際にチェックされる発達の状態で引つかかっているはずだろう。

だが、空振りだった。希実は平均的な赤ん坊だったに過ぎない。産院の医師も保健師の反応も、たいして変わらなかった。どちらも戸惑いを隠さず、返答にも困っている様子だった。それもそうだろう。警察が赤ん坊の発達を聞き、まるで容疑者を洗い出すように捜査に来ているのだ。

産院によれば、佐々木希実は確かに十一月二十一日深夜二時四十分、自然分娩で出産されていた。体重三千二十グラム、身長五十七センチの平均的な赤ん坊で、生まれた時の状態を示すアプガースコアも九点で問題がない。産院での一カ月後の検診でも、なんら問題が

なかったという。

保健所では、さらに戸惑った反応だった。希実の四ヶ月健診はきちんと指定の日に受けられている。担当した保健師は何十人と子供を見るので、希実のことを覚えてはいなかったが、記録によればすべて発達段階はクリアされていた。音のするほうへの反応も良好、寝返りもうつるようになっており、特に気になる記載も残されていない。予防接種も問題なく消化されていた。

「僕は、別に何も気になりませんでしたけどね。甥っ子だって、僕があやしても笑ってくれないし、あんなもんじゃないですか？」

「そりやお前の顔が面白くないんだろうさ」

琢磨は、希実のあの背筋の凍るような微笑を見ていないらしかった。

「僕はやっぱり、野辺山先生に、香坂さんに会ってもらうべきだと思うんですよね。佐々木麗子さんを連れて行けば、犯人を教えてもらえるかもしれないでしょう？ あの時僕が見た、恐ろしく黒い影が、絶対怨霊だと思います！」

岡崎は返事をする前に、琢磨の後頭部に平手を入れた。

「馬鹿か、お前は。そんなことをして野辺山先生に何かあったら、どう責任取るんだよ」

「はあ……」

それだけは、できそうにない。

誰もが、ミイラ死体事件の犯人は怨霊だと決め付けていた。他ならぬ、岡崎自身もそう考えていた。

「瀬地矢愛育園に行つて、もう一度、希実ちゃんに会ってみるかな

……」

その事を、上司である久保にどう説明し了承を得るのか、岡崎は頭を抱えた。

*

エックスデーの七月二十日は、無常にも、何の捜査の進展もないままに訪れた。

この三日前、ようやく課長の久保が、瀬地矢愛育園へ捜査員を派遣することを了承した。岡崎が説得したわけではない。尽力したのは野辺山だった。

佐々木麗子の話から、野辺山が見る映像のこともすべて久保に話し、今回の件に希実の存在が大きく関わっていることを、いつもの講義口調で説いたのだった。

発達心理学のカウンセラーや小児科医師などへ正式に要請を出して、希実を診断してもらうことになった。当然、瀬地矢愛育園の園長はもろ手を挙げて賛同している。これに、岡崎と琢磨たちが立ち会うことになった。

すでに、警察上層部はミイラ死体事件から手を引き始めていた。捜査本部がおかれて約一ヶ月弱。その間に世間を大きく驚かせた凶悪事件が発生し、マスコミの感心も一旦ミイラ死体事件から削がれていった。

七月二十日は、雨だった。

今年は一向に梅雨が明けず、昨日から降り続く雨はやむ気配がない。太平洋高気圧の勢力が弱く、前線は日本上空に停滞し続けている。

瀬地矢愛育園へは十三時に向かう約束であった。

香坂義夫の家には別の捜査員が四人、今日も向かうことになっている。マンシヨンの外で、ずっと張り込みを続けているのだ。

「岡サン、どう？　これで希実ちゃんに何かが見付かって、これはもう化け物の仕業だとなったら、霊媒師も警察で探すのかい？」

上目遣いに岡崎を見上げる久保の顔は真面目そのものだった。机の上に肘をつき、手を組んで顎に当てている。

「そうですね、もう、それで我々の仕事は終わりかもしれません。琢磨は香坂に黒い影が憑いていると言っていましたし、その影の住処が希実だとしたら、除霊してもらえないですからね」

岡崎の声にもため息が混じった。正直、終わりにして欲しいという思いが強い。怨霊相手に警察ができることなど、なさそうだからだ。そんなことよりも、いま岡崎には家庭に抱える問題もあるし、書き上げなくてはならない調書は、また一件増えている。

「そうだよ、早く解決して、調書を出してもらわなくちゃね」

久保はふくよかな頬に眼がうずまった。嫌味な微笑だった。これから逃げるには、出かけてしまうのが一番だった。

「では先に聞き込みに戻って、直接、瀬地矢愛育園のほうに行ってください」

自分のデスクに戻って、スーツの上着を手にした。向かいにいるはずの琢磨を呼ぼうとしたが、いない。

時計は、とつくに九時を回っている。

遅刻なんて、珍しいな。

そう考えていると、けたたましく電話が鳴り響いた。

香坂義夫のマンションに張り込んでいる捜査員からだった。

ついに、香坂が四人目のミイラ死体となったという知らせだった。

七の段 発露…… 2

閑静な住宅街は喧騒にまみえていた。

一旦は削がれたミイラ死体事件への興味が、一気に命を吹き返したらしい。どこからどう聞き込んだのか、大勢の野次馬がマンションを取り囲んでいた。岡崎達が到着する頃には、すでにマスコミも集まりつつあった。

「出ませんか？」

何度も携帯電話をかけている岡崎に、同僚が声をかけてきた。

「何やってんだ、アイツは」

「昨晚はデートだったんじゃないですか」

誰も琢磨のことを気にかけていない。若い者の、寝坊くらいにしか考えていないようだった。

しかし、岡崎は違っていた。ひどく胸騒ぎがしていた。

琢磨はのんびりして見えるが、真面目で曲がったことは嫌いなはずだ。いままで遅刻などしたこともないし、一分でも遅れることはなかった。手帳にはいつも几帳面に予定が書きこまれている。

携帯電話は、何度かけても留守番電話だった。

そのうち、鑑識の捜査が終わったと報告があり、一旦携帯電話をかけられなくなった。

香坂義夫のいた書斎は、変わらず散らかっていた。車の模型を作っていたあとが、生々しくすら思える。

遺体の状況はいままでと同じだった。佐々木麗子とも、平沢幹夫とも。干上がった皮膚に潤いのありすぎる瞳。たった今まで、模型作りに熱中していても不思議ではない瞳だった。今にも遺体が起き上がり、「出ていってくれ」と叫びだしそうだ。

「見てください」

鑑識の一人が屈んで香坂義男を指さした。

指し示された先には、あるべきものがなかった。

左手だ。

手首から先が鋭利な刃物で切り取られていた。どんな見事な手捌きをすれば、これだけ綺麗な切り口で手首を持ち去れるのかと問いただしたくなる。折ったのともまた違う切断面だった。

岡崎はそれを見てすぐに気付いた。

出血の痕すらない部屋で切り取られた手首。

あまりに印象的だった血の色をした時計がない。一週間前、岡崎に差し出した腕には、確かに異様な紅さの時計が巻きついていて、記憶に間違いはない。いくら五十が近いといっても、それくらいの記憶はしっかり残っている。

いままでの遺体も、必ず何かが失われていた。

首。瞳。耳。今回は手首から先だ。

ミイラ死体は必ず共通点がある。発見される数日前まで、歩いていること。それまでは痩せてはいるが生きていること。遺体となって発見されると、身体の一部が失われていることだ。

紅い時計が無くなっている。

このことだけが今までの死体と違うということはないはずだ。今までの死体にも、一緒に無くなったものがある、ということではないか。

首に巻きつくものと、耳につけるもの……佐々木麗子の場合の目は何だ？ コンタクトレンズか……

早急に確認する必要がある。

もう一つ最も重要なことがある。琢磨が言っていた二十五日周期だ。

香坂義夫の場合で当てはめてみると、二十五日周期は切れ目無くやってくることになる。つまりは、今日、この瞬間に、次のミイラ死体になりえる被害者が存在するということだ。

琢磨の性格からして、遅刻（いや、こうなっては無断欠勤といってもいいであろう）するわけがない。おまけに、香坂の部屋を訪れた時、黒い影を見たと言っていた。仮に、黒い影が怨霊の正体だっ

たとして、それを見た琢磨を野放しにしておくだろうか。

自分が怨霊なら、次の獲物は間違いなく琢磨しかない。

想像は悪いほうへ、どんどん突っ走っていった。岡崎の頭には野辺山が思い浮かんでいた。助けを求めるとすれば、いまは野辺山しか思いつかない。とり憑いている佐々木麗子も、怨霊の正体を知っている。

岡崎は後を他の捜査員に任せて、香坂義夫のマンションを飛び出した。

野次馬を掻き分けて、駆け出す。

間に合ってくれ、と、今は祈るほかなかった。

*

野辺山は、どうにかすれば纏れて転びそうな足を、何とか前に出して歩いていった。周りの人間からは、朝から酔っ払いだろうかと言われても仕方がないふらつきようだ。

昨夜から降り続いた雨は少し小康状態になって、霧雨のように野辺山を濡らす。

麗子は野辺山にしがみ付いたまま、決して離れようとしなない。毎日、目を抉られる映像、赤ん坊を抱いた女の映像、暗く狭いところに寝ている映像。それらがひたすら繰り返される。

妻の真理子がどこからか連れてきた霊媒師も、何の役にもたたなかった。

なんとか、自分で解決するほかない。

ようやくそう決心した途端、野辺山の記憶は途切れていた。

気付くと、見知らぬマンションの前にいた。何故、そんなところに来たのか、はじめは分からなかったが、野辺山の頭の中に、まるで文字が重なってダブったように、もう一つの記憶がじわりと重なってくる。

これは佐々木麗子が住んでいたマンションだ。

野辺山の記憶にはないが、麗子の記憶にはある。麗子の記憶を野辺山が重ねてみているらしい。

エントランスに立っていると、幻影のように薄い影が、ベビーカーを押して歩いてくるのにすれ違った。見たことのない女だったが、顔の形、髪長さ、連れている赤ん坊の顔を見て、野辺山は自分が何を見ているのかすぐに悟った。

佐々木麗子だ。

ベビーカーをおした麗子は、小さなバッグを手をしている。別段楽しそうにも見えなかったが、どこか生活に疲れた雰囲気漂わせている。

麗子の気持ちちが頭の中になだれ込んできた。

夫が女のところに入り浸りになり、麗子は一人になった。初めての育児に、本の通りに育っていかない希実。昼も夜も泣き続け、洗濯も掃除もいい加減になっていく。時には立ったまま、台所で食事をとる麗子が見えた。

それでも麗子は毎日、散歩を忘れない。昼間は陽の光に当たり、夜と昼の区別をつけることが大事だと思ったからだ。自身の気分転換のためでもある。

マンションを出て歩いていく姿は、どこか軽やかにすら見えた。そういえば、岡崎も佐々木麗子が死ぬほんの直前に、散歩へ行く姿を近所の住人に目撃されていると言っていた。

野辺山も幻影を追ってついでに行く。夢なのかとも思えたが、身体を濡らす冷たい雨は、着実に体温を奪い寒気を催すほどだった。

途中、一軒のパン屋に立ち寄り、また歩き出す。十分ほど歩いて線路を横切り、右手に「土岐河駅」を見ながら、さらに一本の幹線道路を渡ると、小高い山を背に緑の木立が覆う場所に辿り着く。

公園だった。「土岐河城址・わかくさ公園」と入口に表示されていた。

立て看板には、簡単に土岐河城の説明がなされていた。千五百八十年、廃絶、とある。城主・土岐河時実には跡継ぎがなく、戦乱の

世の波におされて廃絶、城も取り壊されたらしい。当時、勢力を振るっていた織田信長が本能寺で自刃する二年前のことだ。

入口から入ると視界が広がり、庭園のような造りになっていた。小道を抜けるとすぐ、芝生広場があり、広場を挟んで右側に子供用の遊具がおかれ、左側には小さな歴史資料館がある。芝生広場を抜けると、背後が小さな山になっており、石垣がわずかに残っていて土岐河城の痕跡を偲ぶことができる。

立て看板の説明書きのとおり、土岐河氏がこの辺り一帯を治めていた主だったらしいことは、野辺山も知っていた。

麗子は石垣の一つに腰を下ろした。ちょうど座るのにいい高さの石だった。そこで、さっき買ったパンを、昼代わりにする。

希実はいびきで、ぐっすり眠っていた。その姿を覗き込んで、麗子が微笑む。

幸せに満ちた微笑だった。化粧つ気もなく、髪は単に黒ゴムで止めただけ、Ｔシャツにジーパンという色気のない服装だ。けれど、野辺山には麗子が満たされて見えた。子供を持った母親の美しさが溢れているように思われた。

真理子にも、こんな幸せを知って欲しかったな……。

野辺山はつい、そんなことを思ってしまったほどだった。

その思考に重なるように、麗子の心中が伝わってくる。

この子は、私が守ってみせる。大切な、私の宝物……。

強い意志だった。毎日ここで希実の寝顔を見て、公園の遊具で遊ぶほかの子供達や母親を眺め、自分も希実をしっかりと育てていくのだと、心に誓っていたようだった。

その瞬間だった。

麗子と同じように石垣の一つに腰を下ろしていた野辺山は、電撃に触れたかのように体が痺れた。昔体験した、氷点下の世界である食肉の保存庫に入ったような冷気がまわりついてくる。

目を見開いた。凍り付いて音を立てそうな関節を無理やり動かして立ち上がった。

ここだ。

ここで、麗子はつかまったに違いない。おそらくは、麗子がいつも見せている赤ん坊を抱いた美しい女に。女はこの近くにいたのだろうか。

野辺山の思考がめまぐるしく働く。

慌ててあたりを見回してみた。公園の中は、いつもなら子供連れの親子が楽しそうに遊ぶであろう遊具が、寂しく濡れていた。小雨の中でも散歩を楽しむ老人や、仕事途中に立ち寄ったらしいスーツ姿のサラリーマンもいた。ごく、普通の日常がある。

そのあと、足元に目を落とした。

土岐河城址。ここで昔、何があったのか、歴史に疎い野辺山は分かるはずもない。けれど、戦国時代に建設された城ならば地下に秘密の隠れ家や抜け道、もしくは洞窟のような場所があったとしてもおかしくはない。

野辺山は座り込んで、地面に手を当てた。

ざあっと、足の先から全身の毛が逆立ってくる。この下に女がいる。それが、希実を奪ったのかどうかは分からないが、麗子が女にとり殺されたことだけは確かなのではないだろうか。

野辺山の頭に、水滴が不定期に滴る音が響いた。冷たい藁敷きの上に横になっている女。その女は目を抉られて、この下に閉じ込められている。

憶測などではない。麗子が、この事を伝えるためにここへ連れてきたのだらう。

「なんてことだ」

振り向くと、麗子が石垣の上に腰掛け、目を覚ました希実をあやしている姿が残像となって見えた。

怨念が、麗子が希実を想う気持ちに感応したに違いない。

激しい嫉妬と怨念、思慕の念とが、竜巻のように野辺山を包み込んだ。

重石を背中に乗せられたように、身体が沈んでいく。息が詰まり、

野辺山はついに地面に倒れ伏した。

七の段 発露…… 3

岡崎は車で野辺山の自宅に向かいながら、何度も携帯電話をかけた。赤信号に止まるたび、リダイヤルしてみるが一向に出ない。すぐに留守番電話のメッセージが変わってしまう。

気持ちがいそいそしてきた。

琢磨だけでなく、麗子にとり憑かれている野辺山にも何かが起こっているのではないかという不安が、岡崎を襲ってきた。

刑事事件として捜査をすすめてきた岡崎も、もうこれが人間業でないことを承服するしかない事態になっている。

二十五という数字には何か意味があるに違いない。同時に、身体の一部が奪われ、そこにはもともと何かを身に付けていたらしいことも、分かってきた。

野辺山の自宅に着くとすぐに、門から入ってインターホンを鳴らしてみた。返事はない。扉を思いっきり叩いて「野辺山先生！」と何度も叫んでみたが、何の反応もなかった。

「野辺山さんなら、さっき、フラフラ歩いて出かけられましたよ」
うしろから、初老の女性が声をかけてきた。向かいに住んでいるらしい。二階で掃除をしている時に、野辺山らしき人物が家から出て行くのを見たと言う。

「そうですか」

女性が去っていくのを待って、岡崎は扉に手をかけてみた。難なく玄関ドアが開く。信じられない面持ちで、しばらく扉を眺めやっていた。鍵もかけずに、野辺山はふらりと家を出たことになる。

いくら乱雑で物事に頓着しない性格だといっても、出かける時に鍵をかけないなどというのはおかしい。

「どこに行ったんだ、野辺山ちゃん」

野辺山も気になるが、琢磨のことも心配だった。時計は十一時になっっている。希実と会う約束は十三時だ。それまでに、琢磨の家に

も行かなくてはならない。

岡崎は野辺山と一緒に行きかけたが、このまま琢磨を放置しておくわけにいかない。琢磨のマンションには一度しか立ち寄ったことがなかった。あの時は、酔って一緒にタクシーに乗って帰っただけだったが、だいたいの場所は覚えていた。

岡崎は再び車に乗り込んで、アクセルを乱暴に踏んだ。タイヤが激しく水飛沫を上げる。

琢磨のマンションは隣の駅近にあるワンルームだったと記憶している。管理人が常駐していて、セキュリティは万全なんだと言っていた。

「お前、自分が警察官なんだから、セキュリティなんかに頼るなよ」「ダメですよ、岡崎さん。予防できることは、きちんとやっておかないと」

そう言つて、琢磨は酔っ払いの乗ったタクシーから降り立った。

まるで、昨日のことのように記憶が鮮明に甦ってくる。

途中、道を間違ひながら、ようやく琢磨のマンションに到着した。昼近いのに、空腹すら感じなかった。心臓は年に似合わず精力的に働き、全身の血管も拡張して、小さな血栓くらいならふっ飛ばしてしまいそうな勢いだ。

岡崎は警察手帳を管理人に見せ、同僚が中で倒れているかもしれないと嘘をつき、同行してもらつて琢磨の部屋に辿り着いた。琢磨の部屋の前で、もう一度携帯電話をかけてみた。発信してから、玄関の扉に耳をつけて中の音を確かめてみる。

かすかに、琢磨の携帯電話の着信音が鳴り響いているのが聞こえた。

「開けてもらえますか」

管理人は肯くと、合鍵で部屋を開ける。何かあったら連絡をくださいと言いついて、管理人は戻っていった。

岡崎はゆっくりと扉を開けた。

脳裏には、香坂義夫の姿があった。車の模型作りに熱中していた

香坂。その痩せ方は異常で、枯れ木のような状態であるのにもかかわらず、力は恐ろしく強かった。

部屋は薄暗い。

玄関から入って右手が簡易の台所、左手が洗面と浴室。部屋は一枚の引き戸で仕切られている。

引き戸は開いたままで、向こう側の部屋のカーテンが閉まっているのが見える。

「琢磨？ いるのか？」

玄関が自然と閉まって、パタンと音をたてた。思わず岡崎の肩が跳ね上がった。

俺は何を怯えてるんだ……。自分が思いのほか、怨霊が出てくるのではないかと恐怖していることに、初めて気付く。

「琢磨？ 返事くらいしろよ」

岡崎は靴を脱いで、部屋に上がりこんだ。台所は綺麗に片付いている。鍋とフライパンが一つずつ、調味料なども揃っている。彼女がやってきて、ここで食事でも作っているのかもしれない。いや、琢磨なら、案外まめに食事を自分で作っているとも考えられる。

念のため、トイレのドアを開けて中を確認してから、岡崎は引き戸の向こう側の部屋を覗いた。

右側にパイプベッドが置かれている。薄暗くて、よく分からないが、テーブルの上にも物はなく、本もDVDなどもきちんと整頓されて置かれていた。

目を凝らすと、布団が盛り上がっている。だが不自然な盛り上がり方だった。横になって眠れば、頭が枕の上にのり、布団も人間の身体の形に膨らむはずだ。それが山のように盛り上がっていた。

「なんだいるのか？ カーテンくらい開けるよ」

岡崎はベッドの上で、琢磨がうずくまっているのだと思った。声をかけて、カーテンに手をかけようとしたときだった。

「開けるな」

低い声だった。

「琢磨じゃないのか？」

「かえれ。僕の楽しみを、邪魔するな」

香坂義夫が言っていたことと、同じような台詞が布団の中から聞こえた。心持ち、早口なようにも思える。いつも、のんびりと話す琢磨の口調とは明らかに別人だった。

岡崎は歯を食いしばった。このまま引き下がって、帰るわけにはいかない。香坂とおなじ口調であることが、岡崎を動かした。

カーテンを乱暴に開け、布団の端を握り締めて剥ぎ取った。

琢磨がパイプベッドの上で膝を抱えて座っていた。膝を抱え込み、膝頭の上に額をつけて丸まっている。

うずくまっているのが確かに琢磨だったので、岡崎は息をついた。「何をやってんだ、お前。遅刻じゃないか」

岡崎は膝を抱えた琢磨の腕をとって引張ろうと手を伸ばした。差し出した手が、琢磨のそばで止まる。

琢磨の左腕に、香坂と同じ紅い時計が巻きついていたので、紅い蛇のように、今にもどす黒い血が流れ出そうな色をして手首に巻きついている。

声が出なかった。この時計が何を意味しているのか、どうして琢磨の腕に巻きついていいのか、答えが分かっているのに、その答えから逃げようとすら思った。

「琢磨、しっかりしろ！ 思い出せよ、そんなことしてる暇ねえだろう？ 香坂義夫が死んじまったんだよ、お前の言う通り！」

声を張り上げたが、琢磨は反応しなかった。

岡崎は力にものをいわせようと、琢磨の肩に手をかけた。

瞬間、音をたてて、カーテンが閉まる。

岡崎は琢磨の肩に手を乗せかけた状態で、硬直した。眼球が零れ落ちるかと思うほど、目を見開いた。心臓が、口から飛び出しそうだった。

琢磨が、膝の上にのせていた顔をゆっくりと持ち上げた。見慣れた部下の顔に重なるように、もう一つの顔が、確かに岡崎にも見え

た。

「うわあ！」

岡崎は驚いて尻餅をついた。

琢磨の顔に重なって見えたのは、老婆だった。

針のように細い目をしているが、目蓋はひどく落ち窪んで闇を形成している。口元には薄い笑みを浮かべ、肌は乾燥して艶を失い、ミイラ死体さながらの姿だ。髪は根元から白くなり獅子舞のようにボサボサになって肩にかかっている。身につけた着物は薄墨色で、暗い部屋に溶け込むようだった。

血の臭いが、漂ってきた。

「わらわの邪魔をする者は容赦しない」

テレビの砂嵐に混じって、遠くから聞こえてくるような不快な声だった。

「この男は、わらわの獲物。渡しはしない」

獲物だと？

岡崎は頭に血がのぼっていた。無差別殺人の犯人が言う台詞と同じだった。被害者を人とは思っていない、傲慢な言葉が岡崎の神経を逆撫でした。

体を起こして琢磨にとびついた。腕力には自信がある。腕をつかみ、ベッドから引き摺り下ろそうと足を踏ん張った。

頑なに膝を抱えていた琢磨の腕を解き、もう一方の手をもつかもとした瞬間、腹に衝撃が加わった。

岡崎は吹き飛ばされ、反対側のラックに激突した。ラックに几帳面に並んだCDや本の類が上から音を立てて落ちてくる。

気を失いかけたが、寸でのところで堪えた。腹部を蹴られて、息ができない。腹を抱えて、ゆっくり顔を上げると、琢磨がベッドに腰掛けてじっと見ていた。

その後で、老婆が枯れ枝のような腕を琢磨の首に回している。

岡崎は絶望的な気分を味わっていた。

連続ミイラ死体を作り出した怨霊が、いま目の前にいる。

部下までもが餌食になろうとしているのに、対抗手段が岡崎にはなかった。

「帰るがいい。お前には用がない。分かったら、消えるがよい」
老婆は勝ち誇ったように唇を持ち上げて鮮やかに微笑んだ。ゆっくりと目蓋が持ち上がる。

岡崎は息をのんだ。喉が渴ききって焼け付き、ひりひりと痛んだ。老婆の眼窩には瞳がなかったのである。

八の段 干戈…… 1

どこが痛んでいるのか、分らない。夢なのか、現実なのか、揺さぶられる身体は、まるで海の上を漂っているかのような感じだった。

「刑事さん、大丈夫かい？」

何度目かの呼びかけに、岡崎はようやく重い目蓋を開けた。

額の辺りが、ジリツと痛む。手を当てようとしたが、そうすると今度は抱えていた腹が鈍く痛んだ。

「いたたた……」

「怪我してるやないか、刑事さん。部屋ん中の病人に追い出されたんけ？」

顔を上げると、琢磨の部屋まで案内してくれた管理人だった。

年老いた管理人の顔が、琢磨に重なって見えた老婆とダブった。思わず声をあげそうになるのを、生唾を呑むことで凌いだ岡崎は、自分が廊下に座り込んでいることにやっと気付いた。

琢磨の、部屋の前だった。

いつ、どうやって、部屋から出たのか、全く記憶がない。

「なんか分かんが、手当てしてやるけ、とにかく部屋にきんしゃいね」

管理人がどこかの方言まじりに手を差し出した。

額を切ったようだった。CDラックにぶつかった時に、上から落ちてきたもので切ったに違いない。

岡崎は頭が混乱してきた。何をどうすれば、琢磨を救うことができるのか分らない。佐々木希実にとり憑いているモノがああ老婆だとすれば、希実から除霊を試みれば、打開策があるのだろうか。

もしくは、佐々木麗子が、何かを知っているのだろうか。

野辺山

岡崎は思い立って、痛む腹を押さえながら立ち上がった。大丈夫

か、と声をかける管理人に礼を言い、岡崎は一旦、署に戻ることにした。

時計はまだ十二時過ぎだった。

琢磨の部屋で老婆に会ってから、ほとんど時間は過ぎていない。

もう一度、野辺山に電話を試みよう。

取り出した携帯電話には三件の着信が入っていた。いずれも数分前のもので、岡崎が気を失っている間にかかってきたようだった。

知らない番号だった。折り返しかけてみると、聞き覚えのある声が出た。

「岡崎さん？ よかった！ 野辺山が倒れたのよ。いま、私の勤める市民病院の救急にいるの！」

野辺山真理子の声だった。

*

「老婆が？」

野辺山は救急センターのベッドで、体を起こした。

「じゃ、それがあの赤ん坊を抱いた女だよ」

「野辺山ちゃんが言う通り、目がなかった……」

野辺山は口をあけたまま、息を大きく吸い込んで止まったように見えた。岡崎もベッドの脇でとりあえず腰を落ちつけることにする。野辺山は「わかくさ公園」で倒れているところを助けられて、ここに運ばれたらしい。打撲などの痕もなく、異常も見つからずに元気である。

岡崎は気を取り直して、琢磨がどうやら次の被害者になってしまったことを説明した。

二十五日周期で訪れる新しい被害者。腕に巻きついた紅い時計。異常な力と老婆の姿。岡崎の話を、野辺山は黙って聞いていた。

「つまり、僕がわかくさ公園で見たものと考え合わせると、こうなるわけだね」

野辺山はベッドの上で胡坐をかき、人差し指を立てた。

「昔、土岐河城で女が一人、目を抉られて死んだ。おそらく、地下かどこかに幽閉されて、殺されたんだと思うよ。女には子供がいて、ひどく想いを残したらしい。そこへ、たまたま佐々木麗子が毎日やってきた。女と同じように、赤ん坊を抱いて、その子を守ろうと必死だった。それで、死んだ女は佐々木麗子にとり憑いて、ついに殺した」

「なるほど、筋が通ってる。だが、何で、ミイラにしなきゃいけないんだ？」

「それは決まってるよ。女がミイラになって死んだからじゃないかな」

「自分と同じ目に遭わせてる、っていうことか」

野辺山は軽く首をかしげた。

「ひとつ、おかしい事があるんだよ、岡サン」

今度は岡崎が首をかしげた。

「第一の被害者は、佐々木麗子じゃない。女子高生だろ？」

岡崎は切れた額に思わず手を当ててしまい、痛みを感じて顔をしかめた。肝心なことを失念していた。順番が違う。一番目の被害者は、相沢美登里、首を折られてミイラ死体で見付かっている。五月六日のことだ。佐々木陽司が麗子と喧嘩したのは翌日だ。

「だったら、合わないじゃないか。あの老婆みたいな恐ろしい女は麗子が憎くて、とり殺したんじゃない、ってことになる！」

「そこで、希実ちゃんだ。麗子はずっと前から散歩に土岐河城址、わかくさ公園へ出かけている。女の目的はとり殺す事ではなく、もともと希実ちゃんにあったとしたら、どうだい？　麗子が邪魔になっただよ、だから、二人目は、麗子」

岡崎は腕組みをして、野辺山の推理に肯いた。

「だったら、希実ちゃんを手に入れたわけだし、その次の平沢幹夫

や香坂義夫、そして琢磨は、何故？」

野辺山は息をついて、首を横に振った。「それは、女に聞いてみなくちゃね」

「女に聞くって言ったって、野辺山ちゃん。どうやって聞くのよ。俺は追い出されちまったし」

「希実ちゃんだ」

「はあ？」

そこまで言って岡崎は慌てて顔を上げた。

「しまった、瀬地矢愛育園に一時だった！」

時計はすでに一時だった。いまから車を飛ばせば、三十分ほどで到着する。岡崎は音をたてて立ち上がった。

野辺山もベッドから降り立つ。

「一緒に行くよ、彼女も」

そう言って、自分の後ろを指差した。

「いるの？」

野辺山は微笑んだ。佐々木麗子は、ずっと野辺山と一緒にいるよ
うだった。

八の段 干戈…… 2

野辺山とともに市民病院を出た岡崎は車を飛ばした。

瀬地矢愛育園には本当なら琢磨も同行することになっていた。カウンセラーや医師らとは現地で落ち合う手はずだ。

愛育園に遅れる旨を連絡しておき、とにかく急いだ。

平日、十三時の瀬地矢愛育園は、夕刻に訪れた時と違って静かだった。小学校へ行っている子供達は不在で、幼児達は昼寝中らしい。希実のいる乳児院から泣き声が聞こえてくるくらいで、職員達も一息ついているようだった。

すでに、小児科医師の診察が終わり、発達心理学の専門家やカウンセラー達が希実と会っていた。

園長が岡崎達を出迎えて、小児科医師のほうは全く健康に問題ない、という診断であったことがまず伝えられた。

案内された遊戯室には、中央にプレイマットが引かれ、真ん中に希実が座っていた。相変わらず、かえる型の足をして膝の上に手をのせている。前に座っているカウンセラー達の顔を、きょとんとした表情で眺めていた。大人でいえば、「無表情」といっても表現できる。

臨床発達心理士の女性が声をかけながら、希実におもちゃを渡した。手を出し、希実が受け取る。振ると音が出るようだった。希実は一回だけ、それを振った。だが、すぐに前にいる女性の顔を眺める。ニコリともせずだ。女性はまた、違うおもちゃを希実に渡した。誰が見ても優しい笑顔をもつ女性だ。けれども、希実には反応がない。差し出されたおもちゃを、もう一つの手に取った。二つのおもちゃをしばらく眺めると、急に希実は興味を失ったように、床の上へ置いた。投げ出したのではなく、置いたのだ。

「まあ、やっぱりなにか、問題があるのかしら」

愛育園の園長が低い声で漏らした。岡崎が問うと、この頃の赤ん坊ならば、差し出された新しいおもちゃを取るなら、もともと持つ

ていたおもちゃは捨て去るらしい。おもちゃを「置く」などという行為はありえない。

「どうだい？ 野辺山ちゃん、麗子さんの反応は」

「うん、ないね。今日は隣にいるよ。相変わらず、泣いてる」

赤ん坊らしくない。岡崎ですらそう思う。自分の子供たちがこれくらいの頃は、もっと声を出して笑っていた。もっと活発で、そういえば、上の子供は手を叩いたりラッパを吹いたりしていたのではなかったか。伝え歩きをして、あちこちで悪戯し、いつも綾子が慌てていたのではなかったか。

岡崎は園長に自らの子供のことを話してみた。

「そうですね、九ヶ月くらいなら、そういうこともできますね。でも、希実ちゃんは滅多にそんなことはしませんね……まあ、個人差もありますし、おもちゃには興味を示さない子供もいますから、一概には言えませんけどねえ」

結果的に、希実が発達障害の疑いがあり、継続的に観察、という判断が下された。

専門家達が去ったあとも、希実はいまマットの上に座っていた。何をするでもなく、じっとだ。

野辺山と岡崎は、希実の前に座った。

希実が顔を上げる。

上目遣いの目が、すうつと細くなった。それだけなのに、希実が笑っているのだと分かる。野辺山も希実から目を離せないでいるようだった。

「な、おかしいだろ、この子」

「岡サン……麗子さんを見てるよ、希実ちゃん」

野辺山の声は震えていた。

どこかを見ていた希実が、岡崎に視線を移してきた。希実の口元が綻ぶ。ククク、という笑い声が、喉の奥から振り絞るようにしてでた。

岡崎は思わず全身に寒気を感じて立ち上がった。

「また来よったか……ぬし、死にたいかえ？」

思わず野辺山を背に庇い、岡崎は腰を低くした。園長が慌てて駆け寄ろうとしたのを、手で制する。

「こつちへ来ちゃだめだ。この部屋から出たほうがいい」

園長のほうを振り向かず、岡崎は告げた。それを聞いて、希実の笑みが深くなる。

「慈悲ぶかき言葉じゃのお。して、なんとする？」

声は希実のものではないようだった。希実の口を動かしてはいない。まるで電波状態の悪いところでラジオの音を流したような、低くて聞き取りにくい、しわがれた声だった。

希実が手を前につき、腰を浮かせた。そのまま、操り人形を立たせたように、ゆるりと立ち上がる。園長が悲鳴をあげた。赤ん坊らしからぬ立ちように驚いて、岡崎の言うままに部屋を飛び出していた。

希実の輪郭が、薄墨にぼやかしたようにあやふやになっていった。鍋から立ち上る煙越しに、人間を見ているのに似ている。

「ほれ、女が隠れたわ。わらわが怖おうて、出て来れぬらしい。この前来た時もそうじゃったの……さつさと、向こうの世界に消えてしまえばよいものを」

希実が肩を揺らして笑う。

「そうか、なるほど。麗子さんは希実ちゃんに会いたくなかったわけじゃないんだ。お前がいるから、来ることができなかったということなんだね」

野辺山が静かに語りかけている。岡崎には見えないが、麗子が後ろに立っているのだろう。

「それはどうかねえ」

老婆とも、希実とも思えぬ声が笑みを含んだ声をあげた。

岡崎は胸が悪くて吐きそうだった。他人の子供を奪うなど、考えられない。自分の娘が奪われた時の事を考えると、麗子の気持ち痛みいほどよく分かった。岡崎とて、自分の娘たちが犯罪に巻き込ま

れ殺されでもすれば、いつ立場が逆転して自身が殺人者になるかもしれないと、常々思うほどだからだ。

麗子の執念に、初めて同調できた。

「希実ちゃんと、琢磨を返せ」

岡崎は野辺山を背に匿ったまま、一步足を踏み出した。不思議と恐怖はなかった。

「希実？ ほお、返してやろうぞ。本人に、聞いてみるがよい」

言葉が終わらないうちに、希実から黒い影が湧き出した。二重写しのように見えていた黒い影が独立して、希実の後に一人の老婆が正座しているのが見える。

琢磨の家で見た、目のない老婆と同じだった。

「なにやら、勘違いをしているようじゃが……わらわと赤子は別の人格じゃからの」

黒い影が離れた希実は、再びぺたりと腰を下ろした。表情のない顔で、辺りを見回すと、岡崎達から不意と顔を背け、老婆のほうへと向き直る。そのまま、甘えるように老婆の膝に這い上がっていった。

老婆が勝ち誇ったように笑う。

「この子は、わらわの子じゃ」

着物の袂を払うと、老婆は膝の上に上がってきた希実を抱きかかえた。陽炎が消えゆくように、老婆と希実の姿が薄くなる。

「いけない！ 待つんだ！」

野辺山が岡崎をおしどけて駆け寄ったが、手をついた床には、すでに二人の姿がなかった。

プレイマットの上に、野辺山が膝をついていた。

ようやくあがった雨の止み間、昼下がりの明るい日差しが、長く部屋に差し込み始めていた。

八の段 干戈…… 3

騒然とする瀬地矢愛育園をあとにした岡崎と野辺山は、琢磨の家へと取って返していた。今、あの老婆が行く場所は二つしか考えられない。

一つは、土岐河城址、わかさ公園。しかし、こちらは考えにくい。身を隠す場所もすでになく、まさか、閉じ込められていた洞窟に籠るとは思えない。

もう一つは琢磨の家だ。

老婆の目的が赤ん坊だったことは分かった。目を抉られて殺される前、老婆は赤ん坊を抱いていた。赤ん坊に対して思いを残して死んでしまい、代わりに希実を我が子にしようとしているのかもしれない。

「つまりさ、野辺山ちゃん。怨霊は希実ちゃんを取り込んで、つてことか？」

「いや、希実ちゃんは明らかにおかしい……赤ん坊にも霊がとり憑いているのか……だとしたら、分かりやすい。希実ちゃんにとり憑いているのは老婆の抱いていた子供の霊じゃないかな。希実ちゃんを奪い、自分の子供の霊を宿らせた」

「だとしたらなんてヤツだ。赤ん坊を奪われる苦しみを知っていないから、麗子さんから希実ちゃんを奪ったつてのか？」

「そうなるね……」

乱暴に踏んだアクセルで、野辺山の腰が軽く浮く。

「怒るのはわかるけど、安全運転でね、岡サン」

「免停になったつてかまいやしないさ」

左にハンドルをきった途端、タイヤが道路と摩擦を起こして甲高い悲鳴をあげた。今度は道を間違えずに、琢磨の住むワンルームマンションに到着する。さっきと同じ管理人から鍵を借り、エレベーターに乗る前に課長の久保に電話を入れた。

「岡崎です。琢磨が怨霊につかまりました。佐々木希実も奪われています。すぐに琢磨のマンションに救急車の手配と、誰か、寄越してもらえませんか？」

一息に話す岡崎の切羽詰った口調に、電話口の向こうで久保が息を飲んでるのが手にとるように分かった。

「わかった。こっちも収穫があつたんだぞ、岡サン」

「もしかして、身につけていたものですか？」

「そうだ。平沢幹夫はどうやら誰にも会っていなかったらしいが、いま、一人目の犠牲者、相沢美登里の家族に確認してきた。ちょうど、死ぬ一月前頃から、首に紅いチョーカーをしているのを、妹が見ている。高校に行っているのか、と訊ねたらしいんだ」

「首に？ 琢磨は香坂と同じ紅い時計をつけられています。今から、向かいます」

応援が到着するのを待つようと、久保が叫んでいたが、岡崎は電源を切るボタンを押した。応援が何人来ようと、怨霊を前にしては同じことであるのは分かっている。

「どうする、岡サン」

「わからん。分からんが、琢磨を放っておくことなんかできやしねえさ……」

岡崎は笑っていた。こんな時になぜ笑えるのか、自分でもよく分からない。

死を、意識したことは、刑事という仕事から何度もあつた。けれども、こんなに間近に、こんなにリアルに死を意識したのは初めてだった。十年ほど前に大学の同級生を亡くした時以上に、「あの世」というものが扉一枚向こうに存在していた。

綾子の顔と娘たちの笑顔が脳裏に浮かんできた。思えば、いい家族だった。妻が三人いるようだ、いつも思ってきた。

幼稚園の時に描いてもらった、お父さんの似顔絵が思い浮かんできた。小学校の時の「お父さんと仕事」という作文は確か優秀賞をもらった。他にはどんな思い出があつたらうか。どこへ連れて行っ

てやっただろうか。思い出せることが、案外少ないことに、岡崎は驚いていた。いつも帰りが遅くて、非番の日に夕食をとるくらいしか顔を合わさない。いつしか、子供達のことは綾子に任せっきりになっていった。

父親らしいことを何もしてやっていないな……

不意に岡崎は思った。

当たり前のように父親になったが、本当の親にはなっていたのだろうか。

「どうしたの、岡サン」

「悪かったな、野辺山先生。巻き込んだしまったな」

「先に麗子さんに見込まれたのは僕じゃないか」

野辺山も笑っていた。

「麗子さんは？」

「いるよ」

今は涙を流していないという。

岡崎はエレベーターのボタンを押した。

*

鍵を開けると、ドアが軋んだような音をたてて開いた。

中は真っ暗だった。物音一つしない。まるで、そこだけが切り取った別世界のように思われるほどだった。

時計はまだ四時を回ったところだ。初夏の四時は、まだ日が高い。日没まではあと三時間はあるだろう。

さつきマンションに入る時、左側から日差しを感じた。ベランダの左側から日が差し込んでいることになる。つまり、マンションは南向きで、これほど暗くなるわけがない。

異様な暗さだった。闇に目が慣れ、しばらくすると辺りが見える

ようになるのが普通であるが、琢磨の部屋は違つようだった。

皮膚がびりびりと逆立っていく。ぞろりとした不快感が背中を駆け抜けていった。

「琢磨？」

玄関を入つてすぐ脇に電気のスイッチがある。手探りで探し当て、スイッチを入れた。

点くはずがなかった。カチカチという音が、虚しく部屋に響く。

どうやら、老婆と希実はこちらに戻ってきているようだった。

その時、岡崎の右脇からすうつと冷たい風が流れ込んできた。人が動いた時と同じ、空気の流れだった。岡崎は息を止めて、右側をみていた。

「見えるの？ 岡サン」

眉を寄せ、生唾を飲んでから、岡崎は肯いた。声が出せなかった。佐々木麗子だった。身体の輪郭は仄かに光を帯び、そのおかげで周囲が見える。紫苑色とも藤紫とも見える淡い光が、麗子を包み込んでいた。

冷たい、体温のない光。

長い髪を後ろで結わえ、化粧つけが全くなく眉が薄い。卵形の顔には暗い影が落ちていた。無論、眼窩におさまるはずの眼球は失われている。ミイラ死体が着ていたのと同じ、白いＴシャツにスカート姿だった。

空気が流れるのと同じくらいの存在感で、麗子が部屋の奥へと進んで消えた。

「……来たねえ……」

引き戸の奥から、耳障りな声が響いてきた。

玄関扉が、大きな音をたてて閉まる。岡崎も野辺山も肩が跳ね上がった。

「帰さぬからね……」

闇の奥に、老婆が座っていた。隣で、希実が指を吸いながら腹ばいになって眠っている。右側に置かれたベッドがまた、こんもりと

堆く山になつて布団が被さつていた。そこには琢磨が座っているの
だろう。

「琢磨をどうした？ あいつは何をやつてるんだ」

老婆はゆるりと顔をベッドのほうへと向けた。

「この男かい？ さあ……極楽へ行く、夢を見ておるのじゃよ。日
常の苦痛から逃れて、平和で犯罪のない世界で、女と暮らしておる
のじゃろうよ」

「何を馬鹿な！」

岡崎は怒鳴つて足を踏み出した。

「おや、それはこの男の望んだこと。心底現世が嫌になつて、極楽
を望んだのよ。人の世は、とかく苦しみばかり。最後の時を、こう
して幸せに過ごすことの、何が馬鹿だと言ふのじゃ？」

赤ん坊のように膝を抱えて布団に隠れる琢磨を、岡崎はみた。

確かに、琢磨は潔癖ともいえる性格だったかもしれない。犯罪を
憎んで警察官になつたものの、かえつて犯罪を目の当たりにするこ
とが、琢磨のストレスとなつていたのだろうか。

愕然とする岡崎に、香坂義夫の姿が思い浮かんだ。

彼もまた、日常から逃れて、童心に戻り、車の模型に没頭したの
だろうか。

「なるほど、だから脳だけは生々しく生きているわけだ。快樂で満
たされた脳には、異常な興奮物質と麻薬が充満している。それは、
科学的にも証明されているよ、岡サン」

野辺山が後ろから、いやに冷静に話しかけてきた。岡崎の眉間の
しわが深くなる。

日常が嫌だから、逃避するのか。

「冗談じゃねえ。そんなものは、生きているって言わねえんだよ！」
はき捨てるように言つて、岡崎は部屋の奥へと駆け出していた。
暗闇の中、狭い台所を抜けて奥の部屋に入る。駆け込んで、琢磨の
かぶっている布団を剥ぎ取つた。膝に額をつけて蹲っている部下の
腕をつかむと、力任せに引っ張つた。

「岡サン！ やめろ！」

野辺山の制止の声が耳に届くのと同時に、岡崎は自らの体が急落下する時のように浮いたのを感じた。そのままベランダ側の壁へ投げ飛ばされる。大きな音をたてて、背中を打ち付け、床に落下した。危うく窓に激突し、突き破るところだった。

息ができず、激しく咳き込んだ。

野辺山が岡崎のもとへ駆けつけようと引き戸のあたりまで来たが、老婆がゆつくりと顔を向けてきた。

ちょうど、岡崎と野辺山の間に、老婆が正座する形になる。

「どうする？ わらわを殺すかえ？ あの時のように、目を抉り、乳飲み子を取り上げ、座敷牢に閉じ込めるかえ？ どんな想いをし、息絶えるまでの二十五日間を過ごしたか、お前になど分かるうはずもないわ！」

老婆が大きく目蓋を持ち上げた。深遠の闇が、眼窩の奥に閃いた。着物の裾を枯れ枝と同じ手で押さえ、優雅な仕草で立ち上がる。衣擦れの音すらしなかった。

「土岐河時実のように、狂い死にするかえ？ それとも、わらわの目を抉った正室、由宇のように、井戸に飛び込んでみるかい？」

「まさか……」

野辺山が苦しそうな声をあげた。

「まさか、なんじゃと申すのじゃ。そうじゃよ、土岐河の人間を根絶やしにしたのは、わらわじゃ。いい気味じゃ」

岡崎は腰に手を当てながら、ようやく顔を上げた。

闇の中にたたずむ女の深い怨念を目の当たりにして、体の芯が震えた。心臓が凍り付いて痛む。何度か咳き込んで、岡崎は懇願するように声を絞り出した。

「恨みを晴らしたんなら、それでいいじゃねえか。希実ちゃんを返して、琢磨を元に戻してくれ」

「恨みが晴れた？」

老婆は軋む音をたてそうなきこちない動きで、岡崎のほうへと向

きを変えてきた。壊れたロボットが、最後の電力を使って首を回したかのようだった。

「お前、知ったような口を利くじゃないか」

突然、琢磨がベッドの上に立ち上がった。琢磨の目には何も映っていないようだった。遠くを見据えて、口がわずかに開いている。ベッドから飛びおると岡崎の脇に立つ。琢磨は岡崎の胸元をつかんだ。首が締まって、岡崎は苦悶の声をあげる。

琢磨が顔色一つ変えずに、手に力を込めると、岡崎の身体はズリと持ち上がっていった。

「岡サン、逃げるんだ。早く！」

引き戸に手をかけ齒噛みする野辺山を、老婆はおかしそうに眺めた。

「逃げる？ ククク……どこへ逃げるんだい。お前達は、わらわの子のために生きてもらおうよ……ククク……恨みが晴れる？ そんなことあるはず無いんじゃないよ。土岐河を根絶やしにしても、城が戦で燃え尽きても、わらわの気持ちは晴れることなぞないのじゃよ」

「岡サン！」

野辺山の叫びも虚しく、岡崎は再び空を飛んでいた。人間の、琢磨の力とは思えなかった。いくら背の高い琢磨だといっても、岡崎を片手で持ち上げて投げ飛ばすなどとは常識では考えられない。

岡崎は、散乱したCDやディスクの上に、激しい音を立てて落下した。

声も出なかった。グキリ、と、何かが折れる音がする。

琢磨は操り人形の如く、何事も起きなかったかのようになり、またベッドに上がって膝を抱え込んだ。

老婆が、岡崎に駆け寄ろうと足を踏み出した野辺山を睨み返して牽制した。目がないのに、たしかに睨んでいるように見える。

睨まれると、ぬるりとした視線が絡みつくようだ。

「行かせぬ」

老婆が、滑るように移動した。骨と皮同然の腕を野辺山に伸ばし、

首に手をかけようとした時だった。

希実が声をあげた。

音の出るボールを握りつぶしたような声は、徐々に泣き声に変わっていった。

老婆の動きが止まる。

野辺山はその隙を逃さず、老婆を突き抜けて岡崎のもとに駆け寄った。

希実が泣きじゃくっている。

ぐったりと意識を失っている岡崎を抱き起こした野辺山が顔を上げると、希実の周りが藤色の光に仄かに包まれていた。

「ライナスの毛布か……いや、もしかして……」

本当の母親の匂いに、希実自身が反応を示したのかもしれない。それとも、暗闇に反応したか……。

「岡サン、しっかり！」

岡崎は左肩を押さえて呻き声を上げた。

「折っちまった……」

顔を上げた岡崎は、希実を挟んで麗子と老婆が対峙しているのを見た。だが、深い闇は藤色の光をも飲み込もうとしていた。淡い光は、色を失いつつある。

「わらわの子じゃ……わらわの。報われぬ子じゃ」

老婆は希実を抱きかかえようと手を差し出した。けれども、希実の泣き声はおさまるどころか、狂ったような叫び声に変わっていく。「不憫な子じゃ……ここへ、つれて来るでなかった……それもこれも、土岐河の呪いじゃ……」

呟く老婆の背中からは、怒りの炎が立ち上ったかにみえた。闇が陽炎のように揺らぐ。

「今、満たしてやろうほどに」

老婆は泣きじゃくる希実にそっと手を添えた。琢磨の全身が、痙攣したかのように跳ね上がった。

「琢磨！」

左肩を骨折しているにもかかわらず、今にも起き上がり、駆け出しそうな岡崎を野辺山が押さえ込む。「琢磨に何をしゃがった」

「煩いね……」

老婆のひと睨みで、岡崎が呻き声とともに腹を抱えこんだ。野辺山が庇うように岡崎の前に出たが、遅かった。何かに腹を蹴り上げられたように、岡崎は二つ折りになっていた。

一方、膝を抱えて身体を丸めた琢磨は、時おり小さく震えながら、またうずくまった。

老婆は暴れる希実を抱きかかえた。土色の干からびた腕で希実を抱え、もう片方の手で自らの胸元をはだける。そのあと、希実の頭を抱え込んで胸の辺りに押し当てた。

岡崎も、野辺山も一瞬息が止まっていた。

いつの間にか老婆の姿が女にかわっていた。白い着物を身にまとった、美しい女だ。

長い黒髪を後でゆるく結わえている。肌の白い女だった。艶かしいほどの桜色の唇は薄く開かれ、まつげの長い切れ長な瞳は真っ直ぐに希実に向けられている。

はだけた胸元からは、豊かな乳房が片方のぞいており、それに希実が吸い付いていた。満足そうに、喉を鳴らしながら母乳を飲んでいる。

「馬鹿な……」

「野辺山ちゃん、俺たち、何を見てるんだ……」

野辺山は首を横に振った。直後、電撃に打たれたように顔を上げる。声を落とし、壁に背を預けた岡崎の耳元に近付いてきた。

「ミイラ　　そうか、ミイラ死体は、希実に母乳を与えるための、餌だったんだよ、岡サン……」

「え、えさ？」

「そう、餌。岡サンだって、母乳が何から作られているか知っているだろう？　血液だよ、体液。脳はね、体の中で一番保護されているし、死なないような機構を持つてる。脳血流関門といって、余計

な物質を通さない機構すらあるんだよ。脳だけを守って、全身から血液を奪うってやり口じゃないか？」

二人は、以後、口をあけたまま、女が希実^{きじつ}に母乳を与える姿を眺めていた。

希実^{きじつ}が食事をほとんど摂らないのに痩せていなかったわけも、邪魔^{じゃま}だった麗子^{れいこ}を始末^{しまつ}したのに、その後も平沢^{ひらさわ}や香坂^{かざか}などの被害者^{ひがいしや}が出続けたわけも、すべて辻褄^{つじづみ}が合う。

岡崎^{おかざき}は、魔物^{まぶつ}と化した女の執念^{しつねん}に声も出なかった。

九の段 寂滅…… 1

女の乳房に吸い付いていた希実の口の動きが、時おり止まり始めた。

安心したように目を閉じ、両方の手を拳骨に握り締めている。眠りについた希実を、女は愛おしそうに眺めやっていた。

これが、とうてい怨霊だとは想像もつかない、美しくて穏やかな微笑だった。子供をあやすように身体を左右に振り、今にも子守唄を口ずさみそうに見える。

どんな幸福も、この瞬間に勝るものはないと、そう言いたげに見えた。

岡崎も野辺山も、壁際に座り込んで女の姿を眺めていた。あとから考えれば、この隙にいくらでも逃げることもできたかもしれないのに、二人はそうはしなかった。

女の幸福に満ちた姿は、二人を釘付けにしていた。

妻の綾子が、二人の娘を育てていた時のことが、まるで昨日のことのように岡崎の脳裏に甦ってきた。

綾子もまた、女と同じように恍惚とした表情で子供を抱いていた。宝物のように、大切に扱っていた。岡崎も同じように、忘れかけていた幸福な時を思い出していた。

女は、そんなかけがえない時間を無慈悲にも奪われ、二度と子供を見ることができないように目を抉られて、殺されたのか。

もちろん、女のしていることを許すことはできないのだが、心のどこかで同情している自分もいた。

岡崎はゆつくりと、左肩を押さえながら立ち上がった。左手は全くいうことを利かない。

「岡サン、どこに行くの？」

野辺山が囁く。

事件が終わってからこの時のことを思い出しても、どうして自分

がこういう行動に出たのか理解できなかったし、おそらく一生分らないだろう。ただ、一つはつきりしていたのは、女だけでなく麗子も、同じように母親としての喜びと人生を無慈悲に奪われたのだということだけだった。

岡崎のあとを野辺山も支えるようにして付いてきた。

ゆつくりと、希実を抱いてあやし続ける女の脇を通り抜け、岡崎は台所へ出た。琢磨ならきつと、料理をするために今から持ち出そうとするものを置いているはずだ。

迷わず台所の流し台の下にある開きをあける。大抵ここに、包丁置きが設置されているはずだった。

几帳面な琢磨らしく、包丁と果物ナイフが片付けられている。

「岡サン？ 何をやるつもりなんだ？」

野辺山が岡崎の手を押さえ込んだ。それを振り払って、果物ナイフを手にする。包丁だと、もしもの時に刃渡りが長すぎると咄嗟に判断したからだ。

右手にナイフを持ち、岡崎は女を振り返った。

すでに女は、希実を床の上に寝かせて干からびた老婆の姿に戻っていた。

闇を背負っていた。深い深い闇だった。とめどなく続く、漆黒の霧を背後に感じた。女の執念と悲しみから生まれた、黒くて深い闇だ。

「希実ちゃんを、麗子さんに返してくれないか」

左手は力を失って、肩からぶら下がっている。こんなに人間の腕が重いものだと、岡崎は生まれてはじめて知った。右手でナイフを老婆に向けて突き出す。

岡崎の声に反応するように、淡い藤色の光が、琢磨のそばで灯りだした。

「この子は、わらわの子だと、そう言うたはずじゃ」

「違う。お前が勝手に、自分の子供の霊を宿しただけだろうがよ。それで、お前は報われるのかよ。結局は他人が生んだ子じゃねえか」

老婆は針ほどに目蓋を持ち上げ、口の端を鋭角に持ち上げて失笑した。

「なにを言うのかと思えば……思い違いも甚だしい男じゃ」

老婆は衣擦れの音をたてて、立ち上がった。

「わらわの子はのう……世継ぎとして相応しくないと、正室によつてすぐに殺されたんじゃよ。何の罪もないと言うに。土岐河を滅ぼしてからも、わらわは子が生まれ変わるを信じて、待ち続けた。だがどうじゃ？ 生まれ変わっても、子は生きることが許されぬ。何度生き返っても、口減らしだの、流行り病だの。それにどうじゃ。こんな世になつても、子を捨てる親がある。最後にわが子が生れ落ちたあと、小さな箱に子を捨てよつた。錠をかけ、二度と出られぬ小さな箱じゃ。わらわはこればかりは許せなんだのよ」

深い恨みのこもつたゾツとする笑みだった。氷塊の中にうずもれた気分だった。

「箱の、中？」

野辺山が小さく呟いて、慌てて岡崎の横手に出てきた。

「それは最近のことだね、岡サン、コインロッカーだ。それなら、僕が見た映像と一致する。狭くて、息苦しい場所。辺りは騒がしくて、電車の音が聞こえるんだよ。千九百七十年から八十年ごろ、子供をコインロッカーに捨てる事件が多発したじゃないか！」

岡崎もナイフを手にしたまま、野辺山を振り返った。

当時、コインロッカーには使用期限がなく、中で捨てられた乳児や嬰兒が死亡する事件が多発していた。

希実が狭くて暗い場所を恐れるのは、その記憶だということなのか。

「だから、希実ちゃんは、閉所恐怖症だつて言うのか？ でもそれは、希実ちゃんに」

そこまで言つて、言葉が途切れた。

希実に老婆の子供の霊が宿つて、閉所恐怖症の記憶が植えつけられたと言うのか。

二人は眉を寄せていた。

老婆が、喉の奥で低く笑った。

「希実は、わらわの子じゃよ。ようやく生まれ変わって、ここまで大きくなったのよ。今度、この子を守るのはわらわじゃ。他の誰の手も借りぬ」

言い終わるか、終わらないうちに、老婆は淡い光を放つ麗子に向き直った。地鳴りのような音がした。琢磨のいるベッドがガタガタと音を立てて揺れる。

ギャツという悲鳴とともに、淡い光が霧散した。

振り返った老婆は、そのまま野辺山を見据えた。

野辺山が声を出す間もなく、岡崎の脇を抜けて吹き飛ばされていた。つた。

「野辺山！」

玄関扉にしたたか背中を打ちつけた野辺山は、ズルリと力を失って座り込んだ。

岡崎は老婆に向かってナイフを突き出した。

「ムダじゃよ。面倒なことをせずに、このままとり殺してくれようか」

岡崎は内臓が口から出てくるのではないかと思うような吐き気に襲われていた。今まで、転生などというものは、頭から信じていなかったからだ。

希実こそが、女の子の生まれ変わりだったのだ。前世の記憶が老婆との接触によって甦り、赤ん坊らしからぬ状態にあったのである。

すべては、老婆の子供への執念のなせる業だったと。

岡崎はナイフを握る手に力を込めた。左腕にも力を入れる。もう少しならいけそうだった。折れていても、動かすことくらいはできる。

小さく息を吸い込んだ。勇気をくれと、誰ともなく懇願している自分がいた。

岡崎は駆け出して、横たわる希実のもとに座り込み、間をおかず
に手にした果物ナイフを振り上げた。

「何をするのじゃ！」

鋭い声にも岡崎は臆せず、睨み返した。

「俺を殺すか？ その前に、まあ聞けや。お前が希実ちゃんと育て
る、って言うが、そのあとはどうするってんだ？ 幼稚園にあげる
のか？ 小学校の参観に、お前が行くのか？ 飯はどうするんだよ
いつまでも母乳ってわけにやいかねえだろうが。現実世界にはよ、
お前の手だけではどうしようもねえ事が、たくさんあるんだぜ？」

老婆は闇が閃く瞳を見開いて、岡崎から目を逸らさずにいた。今
すぐにでも襲い掛かることができるように、軽く足を開いて、手を
上げている。

「生きてるって、言えんのかよ、今のままで。こんな不幸をこの子
が味わうなら、いつそ今死んだほうがましだぜ？ あの世で育てる
よ。それにな、今の世の中、狂ってることがたくさんある。怨霊よ
り怖い、虐めっていう化け物も蔓延ってんだよ」

岡崎は横たわる希実の心臓に向けて、ゆっくりとナイフを近づけ
た。

ほんのわずかに手に力を込めれば、刃は難なく希実の心臓に突き
立つだろう。

視野の片隅では、ユラリと薄紫の影が揺らぐのが見える。それに
もかまわずに、ナイフをゆっくりと、希実の心臓に近づけていく。
もしも怨霊となった老婆に表情が浮かんだとすれば、この時だっ
たかもしれない。口惜しそくに噛んだ唇が岡崎にも見えた。

「俺は本気だぜ？ 俺を殺せばいい。だが、死ぬ前にナイフを突き
おろすくらい時間はあるだろうよ。俺は気が短いんでね。早いめ
に、返事をもらえるかな、化け物さんよ」

老婆は動かなかった。

老婆に女としてではなく、母親としての情念が強く残っていると
するのなら、岡崎の言葉に必ず動揺するだろうと思っていた。

死ぬかもしれないな、俺は。

どこかでそう思いつつ、このナイフを突き出さなくてもよくなり
ますようにと、祈っていた。結果的に、希実を刺すことになれば、
どの道、自分は生きてはいないのだ。

「わが子を、殺すというのかえ？」

「てめえは、たくさんの人間を殺してきたじゃねえか！」

「わらわの血に汚れた手が、わが子の生を奪っていると、そう言う
のじゃな」

返事はしなかった。そう考えて、手を引いてくれるなら、それで
いい。

だが、老婆は肩を振るわせて、笑い始めた。

「わらわが、そう言えば、お前は勝ったとも思ってたか」

老婆が言い終る前に、琢磨がベッドの上で立ち上がった。

「もしもこの子を、現世で生かしてやりてえんだったら、お前が身
を引くことだ！」

「知ったような口を利く……」

琢磨がベッドから降り立った。背の高い琢磨が立っていると、そ
れだけで威圧感がある。ふらりと足を前に出し、岡崎に近付いてき
た。

心臓が暴れだした。老婆に対峙してもビクともしなかった心臓が、
琢磨を傷つけなくてはいけないかもしれないと思った途端、怯えた
ように血液の排出を早める。

「琢磨になにをさせる気だ」

老婆は応えない。

岡崎はナイフを握る手に力を込めた。今、希実が死ねば、問題を
先送りするだけであることは重々承知している。希実が再び生まれ
変わり、老婆は希実の魂を追って、再び現れるだろう。

ナイフを、希実の首筋に当てた。横に引くだけで、頸静脈が切れ
る状態にある。

「死んでもいいんだな」

「それはお前のことじゃよ！」

琢磨が足を踏み出した。

岡崎は一瞬ためらったが、ナイフを横に引こうとした。

刹那、淡い光が目の前で瞬き、視力を失った。鈍い痛みが、腹の辺りにじわりと広がる。その上から、琢磨が覆いかぶさって首を締めてきた。

希実が泣き出した。

九の段 寂滅…… 2

玄関扉にめいっばい背中を打ちつけた野辺山は、わずかばかり意識を失っていたようだった。

扉を背に座り込んでいたが、口の中に広がる血の味が自身を正気にさせていった。頭を振って目を開くと、変わらぬ闇が広がっている。

「琢磨になにをさせる気だ」

岡崎の声だ。

引き戸の向こうに岡崎の背中が見える。座っているようだった。

岡崎に重なるように淡い藤色の光が漂っている。

麗子が泣いている。

野辺山には彼女の嘆きが聞こえてくるようだった。

希実を助けて。

ただ、その一念だけが今の彼女を現世にとどめている。真理子と言ったように、希実を守るためだけに、麗子はいま怨霊と化すのも覚悟でここにいるのだ。

と、思ったのもつかの間、琢磨が岡崎に向かって駆け出し、馬乗りになった。

「岡サン！」

野辺山は口元を手で拭って起き上がった。手には血がべっとりとついている。

琢磨と岡崎が纏れるように引き戸の境目を越えて倒れこんできた。琢磨がはずみで希実を蹴り上げて弾き飛ばす。

希実が転がって激しく泣き出した。その周りを藤色の光が覆いこみ、あっという間に希実が淡い光に抱きかかえられた。

光の正体、麗子は瞬きをする間もないほど早く野辺山のそばへと移動し、希実を差し出した。

野辺山には、はっきりと麗子の姿が見えていた。

目を挟まれる前の、本当の麗子の姿だ。ミイラの姿ではなく、人間の姿に戻って希実を抱いていた。希実に対する愛情だけが今の麗子の支えであることは、明白だった。

「早く、この子を！」

若くて張りのある、初めて聞く麗子の声だった。このために、どれほどの力を必要としているのか、野辺山には見当もつかない。

麗子は希実を野辺山の腕に押し付けて、抱かせた。

「君は、なにを？」

希実を野辺山に預けると、麗子はすぐに淡い光に戻った。

激しく泣き叫ぶ希実を、どうしていいか分からない。抱きかかえた希実が重かった。十キロの米を担いだ以上に、ずしりとした人間の重みを感じる。手には、希実の拍動と体温が伝わってきた。

生きている。希実は前世がどうであれ、確かにこの世に生を受け、佐々木希実として生きようとしている。

野辺山は希実を抱く手に力を込め、柔らかな頬に顔を寄せた。目頭が、熱くなった。

*

琢磨の手が、岡崎の息を止めていた。

すぐに気が遠くなり始めた。どこからか聞こえる赤ん坊の泣き声が、脳裏に娘たちの姿を呼び起こした。久保や、綾子や、野辺山がその周りを囲んで笑っていた。

暖かいものが、腹部から流れ出ていく。不思議と痛みはなかった。

「……すまん、助けて、やれなかった」

かすれて聞き取れないほどの声を、岡崎は出した。

諦めだけが全身を支配していく。このまま訪れる漆黒の世界に身をゆだねれば、すべてが無に返り、何も憂いることはない。

ところが一瞬、琢磨の手が緩む。岡崎はゆっくりと目を開けた。視点が首を絞める琢磨の両腕に定まった。

藤色の光が、琢磨を包んでいる。左腕に巻きつく、紅くて禍々しい時計のあたりに、光が集中していた。

時計だ。

これが、老婆と琢磨をつないでいるに違いない。血液を奪い取るための、あの世とこの世を繋ぐ、老婆の分身。

岡崎は最後の力を振り絞って、自分の腹に突き立っている果物ナイフを抜き取った。同時に腹部から、心臓の拍動にあわせて新しい血が流れ出す。

右手にしっかりとナイフを握り締め、琢磨の腕めがけて突き下ろす。
「ぎゃあ！」

琢磨の声とも老婆の声とも区別がつかない悲鳴とともに、果物ナイフの先は滑って岡崎の右鎖骨下あたりを傷つけた。

血の臭いが、鼻をついた。顔に、血しぶきが降りかかる。

左手を押さえ込んだ琢磨が、うしろに転がった。そこから黒い影が立ち上る。

「ようも」

瞬きする間もなく、岡崎を庇うように藤色の光が黒い影の前に出た。

けれども、すぐに光は霧散していく。

岡崎はそれを、仰向けに倒れたまま眺めていた。右手には、吸い付いたようにナイフが握られたままだった。

「許さぬ」

低い声が部屋に木霊した。地の底から這い上がる地鳴りのような声が、鼓膜を振動させる。見開かれた瞳のない眼窩から、あるはずのない光点が閃いたようにみえた。

霧散した藤色の光は、なおも終結して黒い影の前に立ちはだかる。麗子の、執念を見ている気がした。

「やめろ！」

泣き叫ぶ希実を頭上に掲げた野辺山が、岡崎の脇に立った。

「僕が、希実を引き取るから。責任を持って、育てるよ。それでど

うだい？ でなきゃ、僕はこの手を離すよ」

野辺山は血まみれで横たわる岡崎に視線を移した。

「岡サン、僕も岡サンと同じ考えだ。今、目の前にいる人を助けられないんだったら、このまま希実ちゃんを殺して、一緒にあの世に行くよ」

「馬鹿……」

自分でも信じられないほど、かすれた声が喉から飛び出た。

野辺山は口元を引き締めると、目の前にいる老婆を睨んだ。物分の悪い生徒に、懇々と説明するような、落ち着いた口調で説いていく。

「さあ、どうする？ お前の望みはこの子が生きることだろう？

お前が育てたって、この子は幸せにはなりはしないぞ。岡サンの言う通りだ。僕なら、希実にきちんとした治療を受けさせてやれる。

お前にはできないぞ。教育環境だって整えてやるう。いや、そんなことじゃないね、僕の妻は、誰よりこの子を愛して育ててくれるよ。そうだろう？ 麗子さん。だから、君は僕を頼ったんだ。僕たち夫婦なら、希実を育てることができると、そう思ったんだろう？」

静寂が琢磨の部屋を支配した。

血と、惨劇にまみえる部屋は信じがたいほど静謐な場所へと変わった。

藤色の光が、徐々に蒲色混じりになっていく。冷たい体温のない光が、暖かな色を交えていった。

部屋に、唐突なまでに陽の光が戻ってきた。

散乱したDVDや、乱れたベッドが見える。岡崎と琢磨の腕から出た出血で、カーペットが無残にも汚れていた。

そこに女が一人、座っていた。白い着物を身にまとい、見事な刺繍に彩られた産着を手をしている。長いまつげは、涙に濡れていた。「許さぬ……わらは決して許さぬ……」

女は号哭していた。産着を握り締め、激しく首を左右に振った。その隣に、麗子が並び座った。岡崎にとっても、野辺山にとって

も、本当の麗子の姿を見るのは、これが初めてだったかもしれない。思っていたより、細い目だった。化粧をしていないので、眉も少し細い。細面の小顔な女だった。

麗子は泣いていなかった。ただ、名も知らぬ女に寄り添うように、寂然として座っていた。

野辺山も高く掲げていた希実を抱き下ろした。いつの間にか泣き止み、指をくわえて野辺山の胸に添うようにして眠っている。

「許さぬ……決して……」

女は野辺山を睨みあげた。激越なほどの視線を岡崎も感じた。

「とり殺してやる」

腹の底を鈍く振動させる声の残響を残して、女は陽炎のように消えていった。

救急車の音が、遠くから歪んで聞こえる。部屋の外で何人かの足音が不ぞろいで聞こえ始めた。

野辺山は希実を抱きかかえたまま、岡崎を覗き込んだ。

「岡サン、しっかりしてくれ」

「ああ、もうダメだよ。お供えは焼酎でいいから……」

岡崎は目を閉じた。

夢の続きにいるように思えた。

跋の段 縁由

病室は静かだった。窓の向こうには青々と茂った枝が伸びていて、葉の一枚一枚に光の粒が転がっていた。

目蓋の上に光が落ちた。ゆっくりと目を開けると白いマス目のある天井がぼんやりと視界に入る。

息を大きく吸い込むと、引きつったような痛みが腹部を襲った。奇妙な違和感が腹部にある。身体も、自分のものであってそうでないような感覚だった。

生きていたのか……。

長い夢を見ていたようだった。生まれてはじめて見た怨霊が、いまだ横に座っているような気がして、背中に冷たい汗をかいた。耳を澄ますと、静かだと思っていた病院は、小さな騒音に包まれている。行きかう足音、何かを移動させる音、遠くに響く放送、話し声。

「お父さん？」

聞きなれた声が岡崎を呼んだ。ゆるりと顔を横に向けると、ベッドサイドに綾子が座っている。そのうしろに、長女の佳織と次女の晴香がいた。

綾子は随分年をとって見えた。いつも化粧は薄いが、今日は何もしていないらしく、目尻のしわが妙に目立つ。佳織が綾子の肩に手を添えて、「よかったね、お母さん」と言う。三人は肩の荷を降ろしたように、視線を交し合って微笑んだ。

「すまなかったな」

いつもなら口にしらない言葉を、岡崎は素直に言った。なんだか、とても家族に対して悪いことをした気分だった。今までだって別段いい事してきたわけではなかったし、あまり家族を大切にしていることがなかった。それ以上に、今回の事件で心配をかけてしまったことが、とても悪いことのように思えた。

綾子が驚いて口をあけていた。

「珍しい、お父さんが謝ったよ」

「お父さん、変になっちゃった」

娘二人が茶化すように笑っている。

「まったく、久保さんから電話をもらった時は、お父さんの保険証書をどこにしまったか、思い出すのに苦労したわよ」

「やだ、お母さんたら、素直じゃないよ」

「ホント、真っ青になってたんだよ、お母さん」

娘たちの明るい笑い声と、岡崎と同じで素直でない綾子をみていると、心底死なくてよかったと思えた。

岡崎には、生きて、家族のために何かをする時間がまだある。死んで、歯噛みをしながら、子供たちの未来を心配する必要などない。生きていれば、いくらでも娘たちの未来に手を差し伸べてやることのできるのだ。

麗子の気持ちだが、今になって理解できた。

守りたかったのは希実の未来だったのかもしれない。死んでしまった自分にはできないことを、託せる者を探し出すことに全精力を尽くして逝ったのだ。

助かったのに、胸が痛んだ。

いまだ、名前すら知らぬ怨霊が見せた最後の慟哭の聲が、耳に残っているかのようにだった。

*

綾子たちが帰ったあと、再び小さなノックの音がして遠慮がちに病室の扉が開いた。

岡崎が顔を向けると、入ってきた人物は顔を綻ばせた。

「ああ、気付いていたんだね、岡サン」

野辺山は淡いピンクのタオルを胸に抱いていた。

「もう大変だよ、岡サン。親、一年生、一日目は本当に慌しく終わ

ってしまつた」

ベッドのそばに腰を下ろした野辺山は、胸に抱いていたものを岡崎に見せた。

ピンクのおくるみに包まれた希実がいた。桜色の頬は艶があつた。きよとんとした顔をして、笑いかけもしないが、大人しく野辺山に抱かれている。

「やっぱり、このおくるみがお気に入りだね」

「元気そうじゃないか」

「そりやそうだよ、祟られないように、大切に育てているからね」

「麗子さんは？」

野辺山は黙つて首を横に振つた。

「あのあと、消えてしまつたんだよ。久保さんがやってきてね、僕も事情を説明しているうちに、見えなくなつてしまつたんだ」

酷く、残念そうだった。

「琢磨は？」

「彼は治療中だ。元気、とはいえないが、かなり貧血もあるし、栄養状態も悪いようだよ。左の手首は酷い内出血だが、こっちは大した事ないから」

岡崎は息をついて枕に身をゆだねた。

すべてが終わつたのかどうか、それすらも定かでない。自身が見て、聞いたことは未だに信じられなかつたし、誰かに夢でしたよ、と言われれば、簡単に鵜呑みにしてしまいそうだった。

「岡サンも刃渡りの短い果物ナイフだったから、大事には至つてないんだよ。しかし、よく分からないが、何で、岡サンの腹にナイフが突き立ったの？」

「麗子さんじゃないかな。少なくとも、俺はあの時本気で希実ちゃんを刺そうと思つてたし」

「ほんとに？」

怪訝そうに覗き込む野辺山に、岡崎は苦笑いを返した。自分自身でもよく分からないからだ。ただ、希実が死ねば怨霊が琢磨にたた

る意味もなくなるだろうと、それだけは考えていたかもしれない。

「それより、大丈夫なのか？ 希実ちゃんを育てるなんて安請け合
いして。真理子さんはなんて？」

「真理子は人が変わったみたいに優しくなったよ」

岡崎は目を丸くした。

「それに関しては、詳しく聞かねえことにしようかな」

二人は心の底から笑いあえた。

「でもよ、野辺山ちゃん。あの怨霊は消えてなくなったわけじゃね
えだろ？ いつも希実ちゃんのそばに、いるんじゃないのか？」

「それならそれで、いいよ」

野辺山は見たこともないような優しい目を、希実に向けた。春の
日差しの下で咲き誇った桜でも、見ているかのようだった。

「僕と真理子にも、これでよかった気がするんだ。いまでも幸せ
だったが、これからまた違う幸せをもらえたわけだ。どんな因縁が
知らないけれど、ね。麗子さんも、はじめからそのつもりだったん
だろうしね。そう考えると、今まで喉につかえていたものは、全部
消えてしまっただよ、岡サン」

「確かに……」

岡崎は点滴の針が固定された左腕を上げて、頬をかいいた。

「しかし、あれだね、岡サン。子供を育てる、ってのは、とてつも
なく大変なことだね」

左手で希実を抱きかかえ、野辺山は右手の人差し指を立てた。

「まず、部屋の掃除だ。希実は、もう這い這いするんだよ。これが
イカン。床に物を落としておこうものなら、希実がわざわざ立ち止
まって手にするじゃないか！ つかまり立ちしてウイスキーのビン
を倒すし、スリッパをかむだろう？ テレビのリモコンはおしゃぶ
り代わりだ……それでだね、離乳食、と言うのがまた、困りもんだ」

野辺山の口から子育ての大変さを延々と聞かされるとは思っても
みなかった。よくそこまで観察したなと感心するほど、野辺山は希
実の一挙手一投足を事細かに話して聞かせてくれる。まとめて一冊

の論文にでもすれば、かなり実用的な育児書が出来上がるのではないかと、密かに考えて岡崎は心の中で失笑していた。

「ああ、野辺山ちゃん。タバコをやめないと、いけないんじゃないか？」

野辺山は小さく眉を寄せ、人差し指を振った。

「そうだよ、それが問題だよ」

その時、希実が小さな声をあげた。まるで、野辺山の苦悩に返事をしたかのように、じつにタイミングのいい声だった。

「声、出したよ。聞いたかい？ 岡サン」

岡崎も目尻が下がった。

「聞いたよ」

「まだ笑いはしないけどね、思っていたほど、異常さは感じないんだよ」

希実が小さな手を伸ばす。何かを掴み取ろうとでもするかのように、おくるみの中から腕を出した。病室の空を希実の大きな黒目が、ゆっくりと左から右へと移動していく。

「何を見てるんだろう？」

岡崎もベッドから身を起こして、希実を眺めた。

「知ってるかい？ 幼い子供には、霊が見えるんだってさ。でもちつともおかしい事じゃない」

野辺山は希実が見ている病室の天井に視線を移した。

岡崎には、ただの白い天井にしか見えない。ただ、そこに、麗子と、名も知らぬ女の姿があるような気がした。

佐々木希実が、野辺山希実になるには、まだ法的な手続きが残っている。

だが、それも遠い未来ではない。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3138d/>

怨嗟の輪廻

2010年10月8日13時36分発行